

# 三平 I 遺跡

— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

2013

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会



# 三平 I 遺跡

— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

2013

群馬県吾妻郡長野原町教育委員会





## 序 文

長野原町内には、縄文時代中期後半の拠点集落である長野原一本松遺跡・横壁中村遺跡や天明3年の浅間山の大爆発により発生した泥流被災状況を伝える東宮遺跡・小林家屋敷跡に代表されるように、多数の貴重な遺跡の存在が知られています。

教育委員会では、文化財保護事業の一環として、町の貴重な文化遺産である遺跡を保護するとともに、失われていく遺跡の記録保存に努めています。

今回報告する三平Ⅰ遺跡は、個人専用住宅に伴う調査であります。調査面積は僅かでしたが、縄文時代・弥生時代の土坑、平安時代の住居跡と土坑が発見され、遺構内からは長野県との交流を示す貴重な資料を得ることができました。本書が町民の皆様をはじめより多くの方々に活用され、郷土長野原の歩んできた道のりを知る一助となれば幸いです。

最後に、調査にあたって各方面から多大なるご指導・ご協力をいただき厚く御礼申し上げます。

平成25年3月

長野原町教育委員会

教育長 黒 岩 文 夫

## 例 言

1. 本書は、群馬県吾妻郡長野原町大字川原畑字三平に所在する三平Ⅰ遺跡の発掘調査報告書である。
2. 調査は個人専用住宅の建設に伴う事前調査として、原因者の委託を受けた長野原町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査から調査報告書作成に至るまでの調査事業費は、文化財補助事業として、国宝重要文化財等保存整備補助金・群馬県文化財保存事業補助金・町費が充てられた。
4. 調査は発掘調査を平成20年6月12日から8月7日迄、整理調査及び報告書作成を平成20年2月3日から平成25年1月31日迄の期間実施した。
5. 本遺跡の出土遺物ならびに図面・写真は全て長野原町教育委員会が保管している。
6. 本書は富田孝彦が編集・執筆した。各作業分担は以下の通りである。

編集・執筆：富田 遺構・遺物写真撮影：富田 遺物実測・トレース：富田・柿本・向出  
図版および写真図版作成：柿本・向出

7. 本書中の遺跡名は調査が数次にわたっている場合はそれぞれを識別するために遺跡名の最後にローマ数字を表記してある。同一遺跡内の別地点と解釈していただきたい。

### 例) 林宮原遺跡Ⅷ (遺跡名) (第8次)

8. 調査において以下の項目の一部を委託した。

表土掘削・埋め戻し：東光建設株式会社

測量：(株) 測研

石器実測：(株) 歴史の杜・技研測量設計株式会社

炭化材樹種同定：(株) パレオ・ラボ

9. 本書における石器の石質は飯島静男氏(群馬地質研究会)、弥生土器は石川日出志氏(明治大学)、平安時代遺物は中沢 悟氏(公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団)に御教示いただいた。
10. 発掘調査、整理調査及び報告書作成にあたり、次の方々、団体から御指導・御協力を賜った。(五十音 順敬称略)

相京建史・麻生敏隆・飯島静男・飯田陽一・飯森康広・石川日出志・石田 真・井上慎也・大川明子・小野和之・小川卓也・神谷佳明・川田 強・黒澤照弘・佐々木由香・坂口 一・篠原正洋・鈴木徳雄・関 俊明・高橋政充・高林真人・田中浩江・堤 隆・中沢 悟・中島 泰・福田貫之・藤巻幸男・松田 哲・諸田康成・向出博之・山口逸弘・吉田智哉

群馬県教育委員会・技研測量設計株式会社・公益財団法人 群馬県埋蔵文化財調査事業団・(株) 測研・(株) 歴史の杜

11. 調査組織は次の通りである。

教 育 長 黒岩文夫  
課 長 樋口 正(～平成21年3月31日)  
山口伸行(平成21年4月～平成22年3月31日)  
市村 敏(平成22年4月～)

社会教育 GL 白石光男  
" 副GL 中村 剛(～平成22年3月31日)

調査担当者 富田孝彦

調査参加者 市村勝美・柿本六美・小出康雄・佐々木忍・向出治恵

# 凡 例

1. 本書で使用した地図は1:2500「長野原都市計画図」(長野原町1994)、1:25000「長野原」(国土地理院1997)である。

2. 挿図の方位は磁北を示す。

3. 挿図の縮尺については下記の通りであり、各挿図中に示してある。

遺 構：住居跡……	1/60	カマド・貯蔵穴・土坑 ………	1/30	陥し穴・風倒木 ……	1/40
遺 物：復元土器……	1/4	土器片・礫石器類・打製石斧類・剥片石器類(削器)……………	1/3		
鉄製品・鉄滓	1/2	剥片石器類(石鏃・石核)……………	1/1	金床石 ……………	1/5

4. 遺構の略号については以下の通りである。SI:住居跡 SK:土坑

5. 挿図に図示した遺物は、観察表にその内容を記してある。観察表における復元土器の法量は左側から器高、中央が口径、右側が底径を表し、計測数値は推定値を含む。( )内の数値は現存値、< >内の数値は復元値を表す。

6. 土器の色調に関しては、「新版標準土色帖1995年後期版」(編・著小山正忠・竹原秀雄、監修農林水産省農林水産技術会議事務局、色票監修財団法人日本色彩研究所)の色名を参考にした。観察表において外面/内面の順で記した。

7. 挿図中のスクリーン・記号は以下の通りである。

## 遺 構・土層図



焼土

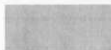


地山  
(遺構確認面)



白色粘土(山砂)

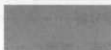
## 遺 物



磨面  
黒色処理



炭化物



被熱

● 土器

▲ 石器

□ 鉄製品

※土器における欠損部に関しては点描で表現している。

断面塗りつぶしは須恵器・灰釉陶器・陶磁器を示している。

# 目 次

序 文

例 言

凡 例

第1章 調査概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の方法と経過	1
第2章 遺跡の立地と環境	4
第1節 遺跡の位置	4
第2節 周辺の遺跡	4
第3節 既応の調査	13
第4節 基本順序	14
第3章 検出された遺構と遺物	21
第1節 縄文時代の遺構と遺物	21
第2節 弥生時代の遺構と遺物	40
第3節 平安時代および時期不明の遺構と遺物	43
第4節 遺構外出土遺物	67
第4章 自然科学分析	81
第5章 調査の成果と課題	83

## 挿 図 目 次

第 1 図	遺跡周辺の河岸段丘面分布図 (S = 1/25,000) ……5	第 30 図	1号坑上遺構遺物出土状況図 (1/30) ……49
第 2 図	遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000) ……6	第 31 図	1号坑上遺構出土遺物実測図 ……50
第 3 図	溝内地点位置図 (S = 1/2,500) ……13	第 32 図	2号坑上遺構実測図 (1/30) ……51
第 4 図	基本土層 (S = 1/20) ……14	第 33 図	2号坑上遺構出土遺物実測図 ……51
第 5 図	三平 I 遺跡調査区全体図<上面> (S = 1/150) ……19	第 34 図	SK07 ~ 10 実測図 (1/30) ……53
第 6 図	三平 I 遺跡調査区全体図<下面> (S = 1/150) ……20	第 35 図	平安土坑出土遺物実測図 1 ……54
第 7 図	縄文時代遺構配置図 (S = 1/300) ……21	第 36 図	SK11 ~ 14・16・42 実測図 (1/30) ……55
第 8 図	SK03 ~ 06・17 ~ 19 実測図 (S = 1/30) ……23	第 37 図	平安土坑出土遺物実測図 2 ……55
第 9 図	縄文土坑出土遺物実測図 1 ……24	第 38 図	SK30 実測図 (1/40) ……57
第 10 図	S K 20・45・21・22 実測図 (S = 1/30) ……27	第 39 図	SK01 実測図 (1/40) ……59
第 11 図	縄文土坑出土遺物実測図 2 ……28	第 40 図	SK02・24 実測図 (1/40) ……60
第 12 図	SK23・31・26・27 実測図 (S = 1/30) ……30	第 41 図	SK25 実測図 (1/40) ……61
第 13 図	縄文土坑出土遺物実測図 3 ……31	第 42 図	SK25 出土遺物実測図 ……62
第 14 図	SK28・29 実測図 (1/30) ……33	第 43 図	SK32・41 実測図 (1/40) ……63
第 15 図	SK34・36・37 実測図 (1/30) ……35	第 44 図	SK46・47 実測図 (1/40) ……64
第 16 図	縄文土坑出土遺物実測図 4 ……36	第 45 図	SX01AB 実測図 (1/30) ……66
第 17 図	SK38 ~ 40・43・44 実測図 (1/30) ……38	第 46 図	SX01A 出土遺物実測図 ……66
第 18 図	縄文土坑出土遺物実測図 5 ……39	第 47 図	遺構外出土遺物実測図 1 ……69
第 19 図	弥生時代遺構配置図 (S = 1/300) ……40	第 48 図	遺構外出土遺物実測図 2 ……70
第 20 図	SK15・33・35 実測図 (1/30) ……42	第 49 図	遺構外出土遺物実測図 3 ……71
第 21 図	弥生土坑出土遺物実測図 ……42	第 50 図	遺構外出土遺物実測図 4 ……72
第 22 図	平安時代及び時期不明遺構配置図 (S = 1/300) ……43	第 51 図	遺構外出土遺物実測図 5 ……73
第 23 図	SI01 実測図 (1/60) ……44	第 52 図	遺構外出土遺物実測図 6 ……74
第 24 図	SI01 実測図カマド (1/30) ……44	第 53 図	遺構外出土遺物実測図 7 ……75
第 25 図	SI01 カマド掘り方実測図 (1/30) ……45	第 54 図	遺構外出土遺物実測図 8 ……77
第 26 図	SI01 貯蔵穴実測図 (1/30) ……45	第 55 図	遺構外出土遺物実測図 9 ……78
第 27 図	SI01 遺物出土状況図 (1/60) ……45	第 56 図	遺構外出土遺物実測図 10 ……79
第 28 図	SI01 出土遺物実測図 ……46	第 57 図	遺構外出土遺物実測図 11 ……80
第 29 図	1号坑上遺構実測図 (1/30) ……48	第 58 図	三平 I 遺跡出土炭化材の操作型電子顕微鏡写真 ……82

## 挿 表 目 次

第 1 表	周辺の遺跡 ……7	第 4 表	三平 I 遺跡出土炭化材の樹種同定結果 ……81
第 2 表	三平 I 遺跡居住調査一覧 ……14	第 5 表	三平 I 遺跡住居跡属性 ……84
第 3 表	SI01 柱穴計測表 ……43	第 6 表	三平 I 遺跡出土土器一覧 ……84
		第 7 表	三平 I 遺跡出土遺物観察表 ……86

## 図 版 目 次

P L 1	1. 川原堀地区航空写真	2. 2区全景<下面>②<北東から>	
P L 2	1. 1区全景①<北から>	P L 5	1. SK03<南東から>
	2. 1区全景②<南東から>		2. SK04<南東から>
P L 3	1. 2区全景①<上面>①<東から>		3. SK05<南東から>
	2. 2区全景②<上面>②<南東から>		4. SK05平敷<南西から>
P L 4	1. 2区全景<下面>③<南西から>		5. SK05遺物出土状況<南西から>

6. SK06 (北東から)  
7. SK06半載 (北東から)  
8. SK17 (南東から)
- P L 6 1. SK17半載 (南東から)  
2. SK18 (北東から)  
3. SK19 (東から)  
4. SK20・45 (南から)  
5. SK20半載 (南から)  
6. SK21 (北から)  
7. SK21半載 (南東から)  
8. SK22 (北東から)
- P L 7 1. SK22半載 (北東から)  
2. SK23・31 (東から)  
3. SK26・27 (南から)  
4. SK26・27半載 (南から)  
5. SK26遺物出土状況(第131435)  
6. SK28・29 (南東から)  
7. SK28・29南北セクション (東から)  
8. SK28・29東西セクション (南から)
- P L 8 1. SK34・35 (南から)  
2. SK34東西セクション (南から)  
3. SK34遺物出土状況(第161472)  
4. SK36 (南東から)  
5. SK37 (南西から)  
6. SK37半載 (南西から)  
7. SK38 (南西から)  
8. SK38半載 (南西から)
- P L 9 1. SK39半載 (南から)  
2. SK40 (南から)  
3. SK40半載 (東から)  
4. SK43 (東から)  
5. SK44 (北東から)  
6. SK15 (北から)  
7. SK15半載 (北から)  
8. SK33 (南東から)
- P L 10 1. SK33半載 (北東から)  
2. SK33遺物出土状況(第2142)  
3. SI01 (南西から)  
4. SI01 (南東から)  
5. SI01南北セクション (北東から)
- P L 11 1. SI01東西セクション (南東から)  
2. SI01カマド (南西から)  
3. SI01カマド検出状況 (南西から)  
4. SI01カマド断層状況 (南西から)  
5. SI01カマドセクション① (南西から)  
6. SI01カマドセクション② (北東から)  
7. SI01カマド完備状況 (南西から)  
8. SI01貯蔵穴
- P L 12 1. SI01カマド火床 (南西から)  
2. SI01遺物出土状況①<鉄片> (第28411)  
3. SI01遺物出土状況②<鉄片> (第28411)  
4. SI01遺物出土状況③<鉄片> (第28411)  
5. 1号焼土遺構 (南東から)  
6. 1号焼土遺構遺物出土状況① (北東から)  
7. 1号焼土遺構東西セクション (南東から)  
8. 1号焼土遺構検出状況 (南東から)
- P L 13 1. 1号焼土遺構炭化材検出状況
2. 1号焼土遺構遺物出土状況②(第3141)  
3. 2号焼土遺構 (南東から)  
4. 2号焼土遺構セクション (南から)  
5. 2号焼土遺構検出状況 (南東から)  
6. 2号焼土遺構遺物出土状況(第3341)  
7. SK07 (東から)  
8. SK08 (南西から)
- P L 14 1. SK08半載 (南西から)  
2. SK08遺物出土状況①<明釜> (第3542)  
3. SK08遺物出土状況②<鉄片> (第3543)  
4. SK09 (南東から)  
5. SK09遺物出土状況<鉄片> (第3545)  
6. SK10 (南東から)  
7. SK10半載 (南西から)  
8. SK11 (南から)
- P L 15 1. SK12 (北東から)  
2. SK13 (南から)  
3. SK14 (北東から)  
4. SK14半載 (北東から)  
5. SK16 (南東から)  
6. SK16遺物出土状況<羽1> (第3748)  
7. SK30・45・20 (北から)  
8. SK30半載 (西から)
- P L 16 1. SK42 (南から)  
2. SK01 (南東から)  
3. SK01 (北東から)  
4. SK01南北セクション (北東から)  
5. SK01東西セクション (南東から)  
6. SK02 (北西から)  
7. SK02半載 (北東から)  
8. SK02ビット検出状況 (西から)
- P L 17 1. SK24東西セクション (南から)  
2. SK25 (北西から)  
3. SK32 (南東から)  
4. SK41 (南から)  
5. SK41半載 (南から)  
6. SK46 (南から)  
7. SK46半載 (東から)  
8. SK47東西セクション (南東から)
- P L 18 1. SX01AB (南から)  
2. SX01AB南北セクション (南西から)  
3. SX01A遺物出土状況 (南東から)  
4. 調査前風景 (東から)  
5. 調査風景
- P L 19 SK03～06・17～22・45出土遺物
- P L 20 SK23・31・26～29・34①出土遺物
- P L 21 SK34②・35～38・15・33・43・44・SI01出土遺物
- P L 22 焼土1・焼土2・SK07～09・16出土遺物
- P L 23 SK10・25・SX01出土遺物・遺構外出土遺物①
- P L 24 遺構外出土遺物②
- P L 25 遺構外出土遺物③
- P L 26 遺構外出土遺物④
- P L 27 遺構外出土遺物⑤
- P L 28 遺構外出土遺物⑥
- P L 29 遺構外出土遺物⑦
- P L 30 遺構外出土遺物⑧

# 第1章 調査概要

## 第1節 調査に至る経緯

平成20年5月下旬に施主より個人専用住宅建設の計画が示され、埋蔵文化財の取り扱いについて、長野県教育委員会教育課社会教育グループに照会があった。対象地は周知の包蔵地「三平1遺跡（No.3）」の範囲内に含まれていることから試掘確認調査の必要がある旨を説明し、調査実施で合意を得た。文化財保護法第93条第1項の規定により、同年6月3日付けで関係書類（「発掘届」・「開発に伴う文化財調査願書」）が提出された。同年6月12日に教育委員会文化財担当の立会いのもと、対象地内のガレージ掘削予定地と住宅建設予定地の範囲に3本の試掘坑（トレンチ）を設定して、遺構の有無および土層の堆積状況の事前調査を行った。その結果、平安時代面（表土下50～60cm）と縄文時代前期面（表土下100cm～130cm）の2面の文化層が存在することが判明したので、造成前に発掘調査（記録保存）する必要があると判断し、その旨を開発事業主である施主に伝えた。協議の結果、工事計画の変更が困難であるため、継続して発掘調査を実施することとなった。同年6月12日付け長教社第85号で長野県教育委員会を経由して施主より群馬県教育委員会教育長へ「埋蔵文化財発掘の届出」が提出された。

## 第2節 調査の方法と経過

### （1）発掘調査

#### a. 表土除去

表土除去は重機（バックホウ）を使用して行った。確認調査で50～60cm程度で遺物が出土することが判明していたので、そのことを念頭に表上から遺構確認面まで少しずつ掘り下げていった。遺物の出土が確認されるまでを重機でそれ以下は人力で除去した。重機のバケットの爪に鉄板を装着して遺構を傷つけないように配慮した。

#### b. 遺構確認

遺構確認は上述の表土除去後に人力で行った。住居跡は確認面での覆土の識別に努め、平面形を確定していった。確認面が黒色土中ということもあり作業は困難な側面もあった。

#### c. 遺構発掘及び遺物の取り上げ

遺構の発掘作業は、遺構の平面形を確定した上で土層観察用のベルトを設定し、遺構内の覆土の除去に着手した。住居跡・陥し穴の場合は長軸方向とその中心から長軸に対して直交方向に十字にベルトを設定し、上坑の場合は長軸に沿って半載して土層の観察を行った。

遺物の取り上げに関しては、単独と思われる破片は上層・下層・床面直上ごとに、個体もしくは遺物の集中している箇所は出土位置図（ドット図）を作成の上、取り上げ作業を行った。遺物出土位置図は1/20のスケールで作成し、標高値の記録を一点ずつ行った。

#### d. 実測図の作成及び遺構の写真撮影

実測図は上層堆積状況図、遺物出土位置図及び完掘状況遺構平面図を作成した。土層堆積状況図は遺物出土位置図と同様に1/20のスケールで作成した。完掘状況遺構平面図は光波測距儀を用いて行った。完掘遺構の変化点を二次元記録し、その場でパーソナル・コンピューターにより現地での詳細な観察の上で結線し作成した。また、

土層堆積状況図及び遺物出土状況（位置）図のポイントの位置も発掘状況遺構平面図作成時に記録した。測定したデータは公共座標値に変換後、加工・編集を行いCD-R等に保管した。

遺構の記録写真は土層断面、遺物出土状況、発掘状況の順で行った。カメラは一眼レフを用い、モノクロとカラーズライドの2種類のフィルムを使用した。フィルムサイズはいずれも35mmである。またデジタルカメラも併用して撮影した。

## (2) 自然科学分析

遺跡の性格や内容をより具現化するために発掘調査の成果に基づき自然科学手法を用いて以下の1項目を実施した。

### a. 出土炭化材樹種同定

小鍛冶岡連遺構と考えられる1号焼土遺構から出土した炭化材について樹種同定を実施した。これにより本遺跡での燃料材の樹種を特定することを目的とする。

## (3) 調査経過

### a. 発掘調査

発掘調査は平成20年6月12日から8月7日にわたって実施された。

6月12日、確認調査実施後に引き続き、表土掘削開始。

6月13日、ガレージ掘削予定地（1区）表土掘削。陥し穴1基（SK01）・土坑数基検出。

6月16日、住宅建設予定地（2区）表土掘削開始。

6月17日、1区SK01ベルト設定、掘り下げ。上坑半載。2区平安面住居跡（SIO1）検出。条痕文系土器出土。

6月19日、1区SK01セクション写真。測量2名基準点測量。

6月23日、1区ジョレンがけ・遺構精査。雨天のため午前中で作業中止。

6月24日、1区ジョレンがけ・遺構精査。SK01セクション図作成、ベルト外し開始。遺構配置図作成。

6月27日、1区SK01発掘、写真撮影。逆茂木跡が確認される。

6月28日、1区SK02掘り下げ開始。SK03・04半載写真、SK05半載写真。

7月1日、1区SK01平断面図、SK02セクション写真・平断面図、SK03・04平断面図、SK05断面図・遺物上げ（No1～6）。ピット1・2平断面図。全体清掃開始。

7月2日、1区SK05発掘。平石検出、サブトレ設定。全体清掃、1区完掘写真撮影。2区ジョレンがけ。土坑（SK06）半載。住居跡2軒か。

7月3日、1区平面図付け足し。2区SK06半載写真・作図。SIO1ベルト設定掘り下げ開始。SIO2?ベルト設定掘り下げ開始。鉄サイ・鉄製品（学引金具）出土。平面形からSIO2→SX01に変更。

7月7日、2区SIO1掘り下げ途中。SX01セクション写真・遺物出土状況写真。雨天のため午後作業中止。

7月8日、午前は雨天のため整理作業。2区SIO1掘り下げ終了。全体的にジョレンがけ・遺構精査。

7月9日、2区SIO1セクション写真。ジョレンがけ・遺構精査。サブトレ2本設定。SK06完掘・写真。

7月10日、2区SIO1セクション図・遺物上げ（No1～3）。SX01セクション図・遺物上げ（No1～4）。調査区遺物上げ（No1～5）。サブトレ周辺に焼土の広がり（1号焼土遺構）を検出、遺物上げ（No1）。調査区東端でも焼土の広がり（2号焼土遺構）検出。SK06平断面図。SK07セクション図。

7月14日、2区SIO1カマド断ち割り開始。1号焼土遺構サブトレ設定。

7月15日、2区SIO1カマドセクション図・写真。1号焼土遺構サブトレセクション図・写真。SK08・09セク



- ション図・写真。2号焼土遺構断ち割り開始。調査区遺物上げ(№6～8)。SK08遺物上げ(№1)。
- 7月16日、2区SIO1カマド袖部確認。1号焼土遺構焼土の分布状況写真。SK07・08完掘写真。2号焼土遺構断ち割り途中。
- 7月17日、2区SIO1平面図・セクション付け足し・写真、遺物上げ(№1～14)。1号焼土遺構遺物出土状況図、遺物上げ(№2～5)。SK07・08完掘平面図。SK09完掘写真・平面図、遺物上げ(№1)。SK10セクション図・写真。
- 7月18日、午前中は雨天中止。2区SIO1カマド天井石崩落状況写真。1号焼土遺構半截、スケール調査。
- 7月22日、2区SIO1カマド天井石崩落状況図・袖石、粘土範囲付け足し。1号焼土遺構セクション図・写真、遺物上げ(№7・8)。2号焼土遺構セクション図・写真。SK10完掘平面図。
- 7月23日、午前中「魚つかみ取り大会」、雨天のため午後3時で作業中止。
- 7月24日、2区調査区拡張。SIO1カマド完掘平面図・写真。P1・P2完掘平面図・写真。P1周辺に周縁帯。1号焼土遺構・2号焼土遺構完掘平面図・写真。SK10完掘写真。SK11～13は単層で完掘平面図。SK14・15は半截写真。SK16は半截途中。全体清掃開始。
- 7月25日、2区SK14～16断面図・写真。平安面全景撮影。午後から縄文面まで重機で掘削開始。
- 7月28～30日、シーサイドスクールで千葉へ。不在中、(株) 測研高林氏に2区縄文面の遺構確認を依頼。
- 7月31日、2区SK17～23セクション図。陥し穴2～3基、風倒木跡1基か。
- 8月1日、2区SK17～22セクション写真。SK24～31セクション図。SK24・25平面図。
- 8月4日、2区SK33～40セクション図・写真。SK33遺物出土状況図。
- 8月5日、2区SK32・41・46セクション図・写真。SK34玉出土(№1)。SK17～23、SK26～29、SK32～35、SK37～45完掘写真・断面図。
- 8月6日、2区SK36・46・47完掘写真・断面図。午後全体清掃、縄文面写真撮影。図面付け足し。
- 8月7日、撤収。

## b. 整理調査・報告書作成

整理調査は平成21年1月16日～平成25年1月31日にわたって実施された。発掘調査によって得られた遺物はテンバコで14箱分、現場で作成した図面類は69枚であった。整理調査は担当の他に作業員4名という体制であった。作業は複数遺跡の整理と併行して行われた。

遺物洗浄は平成21年1月16日～同年2月2日まで、注記作業は同年3月17日～3月24日までの間実施した。

遺物の接合作業は最小限のものを同年5月11日～8月10日まで行い、本格的な接合および石膏による復元作業は平成22年12月27日～平成23年2月25日までに実施した。この復元作業により復元実測可能な個体が20点以上あることが判明した。

遺物の実測・トレースは平成23年6月7日～平成24年4月26日までの調査や事業の合間に実施した。併せて写真撮影、遺物実測図版のデジタル編集を実施した。

遺構図版・写真図版のデジタル編集を平成24年5月7日～同年1月18日、併せて執筆作業は平成25年1月上旬～同年1月下旬にかけて行い、併せて保管用に資料・遺物の整理をして1月31日に全ての作業を完結した。

石器の石質鑑定は平成23年8月19日に飯島静男氏(群馬地質研究会)にお願いした。また剥片石器の実測・トレース業務を平成22年12月27日～平成23年2月25日にかけて(株)歴史の社に、実測もれの剥片石器の実測業務を平成24年10月25日～同年10月31日にかけて技研測量設計株式会社に委託した。

## 第2章 遺跡の立地と環境

### 第1節 遺跡の位置

三平1遺跡が所在する長野原町は群馬県の北西部、吾妻郡の南西隅に位置し、「鶴舞う形の群馬県」と上毛かるたに詠まれている鶴の尾部下端にあたる。北部は高間山（標高1,341m）・白根山（標高2,171m）の両山系から成り吾妻川流域沿いに東西に延びている。南部は浅間山（標高2,568m）の裾野に広がる浅間高原地帯を経て長野県に接している。三平1遺跡は北部の吾妻川流域地帯に属し、吾妻川左岸の河岸段丘上に立地する。遺跡の対岸には岩峰丸岩（標高1,124m）がそびえている。丸岩は南側を除く3方が100mにも達する垂直な岩崖に取り囲まれ、吾妻川方面から臨むと見事な節理とその巨大な円柱状の独特な景観は太古から当該地域のランドマークとしての要素を備えている。

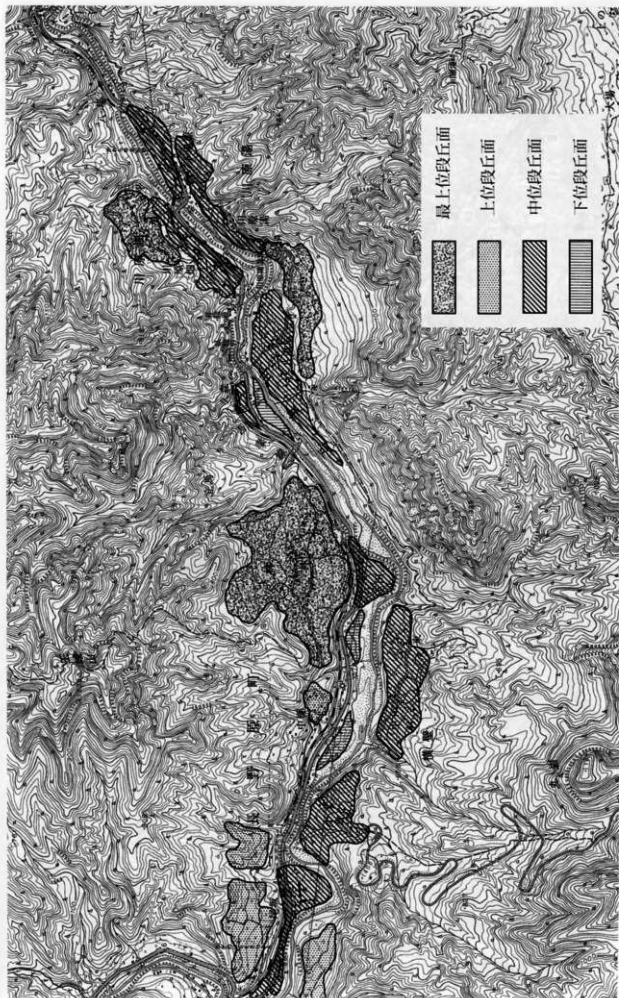
本遺跡の立地する段丘は吾妻川から下位・中位・上位・最上位の4段からなる河岸段丘の最上位段丘に相当し、吾妻川からの比高差は約80mを測る（第1図）。この段丘は約21,000年前に噴出した応桑泥流堆積物を削って形成されている。この上に関東ローム層中には約11,000年前に噴出したと考えられる浅間・草津黄色軽石層（As-YPk）が厚く堆積している。調査地点の標高は534m位である。

### 第2節 周辺の遺跡

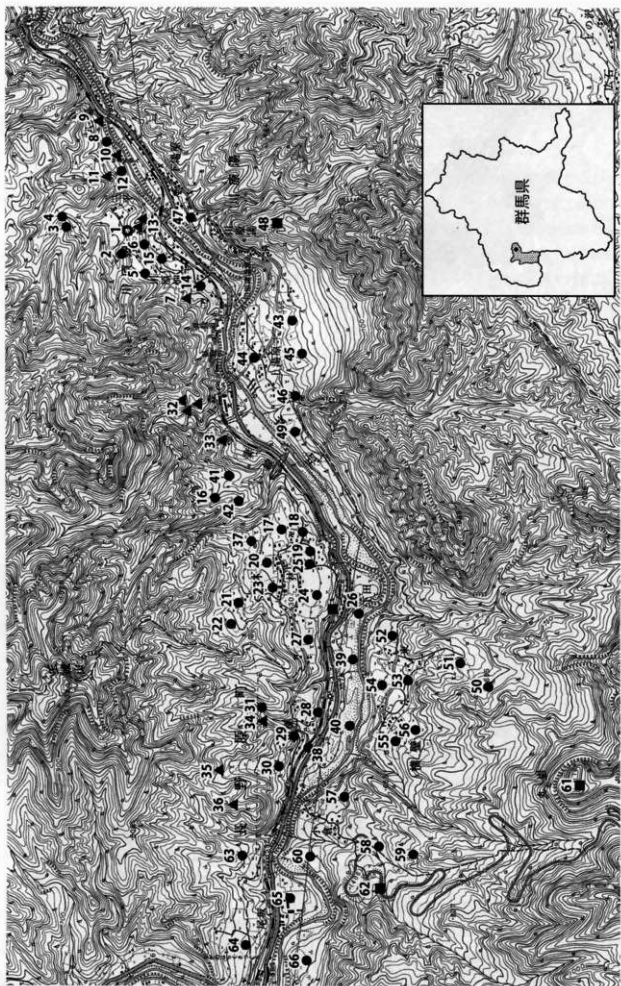
長野原町における遺跡分布状況は昭和48年に群馬県教育委員会刊行の『群馬県遺跡地図』に依っていたが詳細な遺跡の分布の把握は不十分であった。その後、町教育委員会は県教育委員会文化財保護課の指導のもと、昭和62年度から3ヶ年かけて、全町を対象とした遺跡詳細分布調査を実施し、199の遺跡包蔵地を確認した<sup>(1)</sup>。また平成6年度から八ツ場ダム建設事業に関連した工事用進入路や水没地域の工事に対応して（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団が継続して調査を実施しており、新たな包蔵地の発見や遺跡名の変更などの必要性から平成14年3月と平成16年4月に遺跡地図の改訂を実施した。その後も小さな変更を繰り返しているが、平成24年4月現在で220の包蔵地（指定史跡等を含む）が把握されている<sup>(2)</sup>。

本遺跡の位置する吾妻川流域地帯の東部地区はダム関連事業と直結している地域で、先述した（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団（平成24年4月に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団に名称変更）が常時数カ所の発掘調査を継続している。近年多かった水没地域住民による非水没地域への移転が一段落としてきて、町教育委員会で実施している町内遺跡調査の調査原因のうち水源地域対策特別措置法（以下、水特法）関連事業がかなりの割合を占めるようになってきている<sup>(3)</sup>。その矢先の政権交代による所謂「ダム本体中止声明」であった。具体的な方策は未確定であるが、水没地区住民の生活再建事業は継続的に行う意向から、今後も埋蔵文化財に係わる調整が重点的に必要な地域であることに変わりはない。

本遺跡を含む吾妻川流域地帯東部地区には多くの遺跡が分布している（第1・2図・第1表）。遺跡は基本的に吾妻川とその支流沿いの河岸段丘上に占地しているが近年丘陵上にも遺跡が発見されはじめ、これまで空白だった時期を埋める遺構も検出されている。ここでは調査を実施した遺跡を中心に当該地域の遺跡を概観したい。なお、長野原町の現時点での歴史観をなるべく記載する立場から、筆者が実見したり、調査担当者に聞き取った未報告の情報を多分に含んでいる。従って本報告時には多少異なる見解になるかもしれないのでご注意願いたい。



第1図 遺跡周辺の河岸段丘面分布図 (S = 1/25,000)



第2図 遺跡の位置と周辺の遺跡 (S = 1/25,000)

第1表 周辺の遺跡

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
1	三平I遺跡	3	集落跡	縄文・弥生・平安・近世	本報告	文献2.13.35.46.72.78.79
2	三平II遺跡	4	集落跡	縄文・平安	平成16年度調査(事)縄文草創期～前期の土器・石器を多量に出土。掘立柱建物跡7棟ほかを含む中世集落跡1カ所。	文献2.46.78
3	温井I遺跡	1	散布地	縄文・平安	縄文後期。	文献2
4	温井II遺跡	2	散布地	縄文	中期。	文献2
5	上ノ平I遺跡	5	集落跡	平安	平成18・19年度調査(事)縄文中期中葉～後期初頭住居跡16軒、陥し穴134基。平安住居跡20軒を検出。県内2例目となる皇朝十二歳の「貞観水災」が出土。	文献2.29.54.80.81
6	上ノ平II遺跡	6	散布地	不明	チャート片出土。	文献2
7	西宮岩陰	13	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2
8	石畑遺跡	210	散布地 その他	縄文・弥生・平安・近世	平成7・9・10年度調査(事)縄文前期包含層。弥生後期土坑。近世畑。	文献2.35.69.71.72
9	石畑I岩陰	9	墓その他	縄文	昭和53年度調査(県)縄文草創期～晩期：土器片、獣骨、人骨などを出土。	文献2.20.21.23.24.26
10	石畑II岩陰	10	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2
11	二社平岩陰	11	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2
12	二社平遺跡	209	散布地	縄文・弥生・平安・近世	平成8・10年度調査(事)弥生後期土器片。近世畑。	文献35.70.72
13	三ツ堂岩陰	12	その他	不明	岩陰遺跡。堂宇・石仏群は平成20年度に本移設。	文献2
14	西宮遺跡	7	散布地	縄文・近世	平成20年度調査(事)泥流埋没畑5区画以上。復旧溝10数本、ヤックラ。小屋と屋敷1棟を検出。	文献2.82
15	東宮遺跡	208	その他	近世	平成12年度調査(町)。7～9・19～21年度調査(事)天明記述で埋没した民家。それに伴う建物跡、畑跡等を検出。	文献4.35.64.66.69～71.81.82
16	立馬I遺跡	37	集落跡 墓その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成13・14・17年度調査(事)縄文早期前半住居跡2軒。包含層遺物多数。晩期住居跡1軒。弥生中期住居跡2軒。豊稲墓。平安住居跡3軒のほか。縄文～平安の陥穴を多数検出。	文献1.2.44.75.76.79
17	東京I遺跡	38	散布地	縄文・平安・近世	平成17・18・24年度調査(町)。20年度調査(事)縄文前期～中期後半の陥穴。土坑。平安住居跡。	文献2.10.11.63.82
18	東京II遺跡	39	散布地	縄文	平成20年度調査(事)縄文後期土器片。黒曜石片出土。	文献2.35.63.82
19	東京III遺跡	40	散布地	平安・近世	平成15・18年度調査(町)。20・21年度調査(事)近世居敷跡1カ所。土坑。ピット検出。	文献2.7.11.63.82
20	上原I遺跡	41	散布地	縄文・平安・近世	平成18・23・24年度調査(町)。9・24年度調査(事)縄文早期～前期初頭住居跡。中期後半住居跡。弥生前期末土坑。古墳前期住居跡。中期土坑。平安住居跡。陥穴等を検出。	文献2.11.35.71
21	上原II遺跡	42	散布地	平安	平成18・23年度調査(町)。16年度調査(事)縄文中期初頭竪穴状遺構。焼土遺構。土坑。平安陥穴。	文献2.11.78
22	上原III遺跡	43	散布地	平安	平成18・23年度調査(町)縄文中期後半包含層。弥生中期土坑。平安竈治工房。住居跡。焼土遺構。陥穴等。	文献2.11
23	上原IV遺跡	44	散布地	縄文・近世	平成14・18・20・24年度調査(町)。15年度調査(事)縄文中期初頭土坑。後期敷石住居跡。配石遺構。晩期～弥生包含層。古墳後期住居跡。平安住居跡。近世溝。下駄。曲物の礎。農具。石鉢。陶磁器が出土。	文献2.6.11.13.49.77
24	林中原I遺跡	45	集落跡 城郭跡	縄文・平安・中世・近世	昭和37年度(郡大)。平成14～22年度(町)。16・20・21年度調査(事)縄文中期後半～後期の拠点集落。縄文前期後葉住居・土坑。中近世「林城」。竪穴状遺構。区画溝。掘立柱建物群。	文献1.2.6.9～6.31.32.78.82.83
25	林中原II遺跡	46	散布地	縄文・弥生・中世近世	平成15～19・21・22年度(町)。16・20・21年度調査(事)縄文中期後半～後期の拠点集落。墓坑8基。弥生前期末～中期前半土坑・再葬墓か。中期前半住居跡4軒。中近世掘立柱建物群。	文献2.7.12.15.16.78.82.83
26	下田遺跡	47	集落跡 その他	縄文・近世	平成6・7・9年度調査(事)天明記述に埋没した民家。畑跡。	文献2.35.68.69.71 「限遺跡地図」No.3126 田ノ原(下田)遺跡
27	林宮原遺跡	48	集落跡	縄文・古墳・平安	平成14～16・18～20・24年度調査(町)。24年度調査(事)縄文中期～後期包含層。古墳後期住居跡1軒。平安住居跡11軒。土坑。中近世掘立柱建物群。	文献1.2.6.9～9.11～13.17 「限遺跡地図」No.3127 田ノ宮原遺跡(神社前遺跡)
28	中樞I遺跡	49	散布地	縄文・平安	平成18・23年度調査(町)。11年度調査(事)縄文早期包含層。平安住居跡4軒。土坑17基。黒曜石片。チャート片出土。	文献2.11.35.73 田ノ樞遺跡
29	榎木I遺跡	50	散布地	縄文・平安	平成21年度調査(事)平安住居跡4軒。かまど屋1軒。土坑62基。ピット264基。溝4条。焼土2基。集石4基。江戸礎石建物跡1棟等。	文献2.83
30	榎木II遺跡	51	集落跡	縄文・平安・中世・近世	平成12年度調査(町)。12・13・16・17年度調査(事)縄文早期前半(徳永系)住居跡31軒。前期住居跡3軒。中期初頭住居跡2軒。平安住居跡38軒。「三家」の墨書土器。銅字「孫」をもつ石製紡錘車出土。中世の掘立柱建物群検出。	文献2.4.35.50.57.74.75.78.79
31	二反沢遺跡	52	社寺 その他	中世・近世	平成12年度調査(事)中世の石垣を伴う土坑ほか。竈治関連遺物。近世の畑跡を検出。	文献2.42.74 田ノ乘院宮跡
32	久森I岩陰群	53	その他	不明	岩陰遺跡。岩陰3ヶ所にわたる。	文献2
33	久森II岩陰群	54	その他	不明	岩陰遺跡。	文献2

No.	遺跡名	町No.	種別	時代	概要	備考
34	滝沢観音岩跡	55	その他	不明	岩跡遺跡。「滝沢観音」の堂宇と石仏群。	文献2
35	蜂ヶ沢岩跡	56	その他	縄文	岩跡遺跡。打製石斧出土。	文献2
36	御嶽山岩跡	57	その他	不明		文献2
37	花畑遺跡	205	集落跡	縄文・平安	平成10年～12年度調査(事) 平安住居跡3軒、竈穴多数検出。	文献2.35,72～74
38	榎木田遺跡	202	散布地	縄文・弥生・平安・中世	平成10年度調査(事) 縄文前～後期、弥生中期：包含層。	文献35,72
39	下原遺跡	204	集落跡 その他	縄文・弥生・古墳・平安・中近世	平成12・13・15・16年度調査(事) 古墳後期住居跡1軒、平安住居跡1軒、中世の屋敷跡1カ所、中世から近世の埋跡3面を検出。	文献2.35,36,45,74,75,77,78
40	中瀬田遺跡	203	その他	近世	平成11～13・15年度調査(事) 天明記流に埋没した畑跡、および安永9年と考えられる埋没畑跡。	文献2.35,36,37,73～75,77
41	立馬目遺跡	213	集落跡	縄文・弥生・平安	平成14年度調査(事) 縄文中期初頭～後半住居跡11軒。縄文早期包含層遺物。縄文～平安陥穴多数検出。	文献41,76
42	立馬目遺跡	215	集落跡	縄文・平安	平成19年度調査(事) 縄文早期を中心とする集落跡。縄文住居跡5軒、竈穴遺構2基のほか集石、土坑など。平安土坑、竈穴多数。中近世の土坑、溝。	文献56,81
43	川原岡中層I遺跡	16	散布地	縄文	平成19年度調査(町) チャート片出土。	文献2.12 旧中原I遺跡
44	石川原遺跡	17	散布地	縄文	平成20年度調査(事) 縄文中期後半～後期を中心とする拠点集落跡。	文献2.82 北入遺跡(№20)と統合
45	川原岡中層II遺跡	18	散布地	縄文	平成17年度調査(町)	文献2.10 旧中原II遺跡
46	川原岡中層III遺跡	19	散布地	縄文・平安	縄文中期：チャート片出土。	文献2 旧中原III遺跡
47	西ノ上遺跡	212	その他	近世	平成18年度調査(町)、14年度調査(事) 天明記流に埋没した畑跡・道を検出。	文献11,37,76
48	金花山岩跡	207	城跡跡	中世	平成12年度調査(町・事) 明治期の「旧原高直因」に「トリテアト」の記載あり。	
49	川原岡南沼遺跡	206	散布地 その他	縄文・平安・近世	平成9・15・16年度調査(事) 縄文晩期の埋没2基。平安住居跡3軒。天明記流に埋没した畑跡。	文献35,39,71,77,78
50	上野I遺跡	21	散布地	縄文・平安		文献2
51	上野II遺跡	22	散布地	縄文・平安		文献2
52	横壁南沼遺跡	23	集落跡 墓その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成6・7年度調査(事) 縄文土坑数基。楕円形尖頭器1点採掘。平安住居跡1軒検出。	文献1.2,35,68,69 「旧跡跡地図」No.3118 旧勝沼遺跡(東平遺跡)
53	山根I遺跡	26	散布地	平安		文献1.2 「旧跡跡地図」No.3118 旧山根I遺跡(中村遺跡)
54	横壁中村遺跡	24	集落跡 墓その他 その他	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成8～18年度調査(事) 縄文中期後半～後期を中心とした拠点集落跡。平安住居跡も含めて250軒以上を検出。中近世竈穴柱建物建物跡、礎石建物、土坑墓、塚など多数検出。	文献2.5,36,38,40,43,47,52,53,59～62,65,70～80 旧上野III遺跡
55	山根II遺跡	29	集落跡	縄文・弥生・平安・近世	平成16・17年度調査(町)、10・13・18年度調査(事) 縄文中期後半住居跡3軒、土坑39基、中近世の溝1条ほか。	文献2.9,10,35,69,72,75,80
56	山根IV遺跡	30	散布地	縄文・平安	平成19年度調査(町) 縄文中期：チャート片出土。	文献2.12
57	西久保I遺跡	31	集落跡	縄文・弥生・平安・中世・近世	平成6・10・12年度調査(事) 縄文中期末葉の敷石住居跡、水溝遺構等。	文献2.35,68,72,74
58	西久保II遺跡	32	散布地	平安		文献2
59	西久保III遺跡	33	散布地	不明		文献2
60	西久保IV遺跡	216	その他	縄文・平安・近世	平成17年度調査(町)、12・21・23年度調査(事) 縄文後期前葉竈穴柱建物跡2棟、平安時代住居跡1軒・土遺構1基。天明記流に埋没した畑跡。記流の天際を確認。道路・溝・凹形平坦面。	文献10,74,83,85
61	丸岩城跡	34	城跡跡	中世	土塁や水堀が遺存。	文献1.2,19,22
62	柳沢城跡	35	城跡跡	旧石器・縄文・中世	平成4・5年度調査(町) 中世：郭跡、堀切、土居、礎石、腰曲輪、石垣遺構、溝、陶磁器、鉄製品、銅製品、石臼等を検出。	文献1.2,3,19,22,23,25
63	幸神遺跡	62	集落跡 その他	縄文・平安・近世	平成21年度調査(町)、8・9・14・17年度調査(事) 縄文中期中葉住居2軒、土坑、陥し穴。古代の可能性のある畑跡。	文献2.16,49,70,71,76,79
64	長野原一本松遺跡	63	集落跡	縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世	平成22年度調査(町)、平成6～20年度調査(事) 縄文中期後半～後期の住居跡を中心とする拠点集落跡。平安住居跡、中世竈穴柱建物跡等多数検出。	文献1.2,16,34,48,51,55,58,68～82 旧一本松遺跡
65	尾坂遺跡	201	その他	近世	平成23年度調査(町) 平成6・7・11～18・23年度調査(事) 天明記流に埋没した民家と竈壇、溝等を検出。畑下から縄文中期後半住居跡・後期土坑、弥生前期未再葬墓・土坑、平安住居跡、中世竈穴柱建物跡等。	文献35,67,68,69,73,80～85
66	久々戸遺跡	200	その他	縄文・近世	平成19年度調査(町)、9～12・14・15年度調査(事) 天明記流に埋没した畑跡、建物跡。縄文土器包含層。	文献1.2,23,33,36,37,68～74,76,77

## (1) 旧石器時代

これまでのところ長野原町では旧石器時代に遡る遺跡は確認されていない。柳沢城跡(62)で遺構外ながら細石器文化に伴うと考えられる珪質頁岩製のスクレイパーが出土しているのみである。吾妻川流域は前述したように応桑泥流や浅間・草津黄色軽石層(As-YPk)が厚く堆積しており、発掘調査では発見されにくい状況がある。吾妻妻地域はもとより吾妻郡内でも旧石器時代は高山村に所在する新田西沢遺跡<sup>(4)</sup>でしか確認されていないのが現状である。

## (2) 縄文時代

縄文時代になると遺跡数も膨大となる。吾妻川及びその支流沿岸の下位段丘面は低調だが主として中・上・最上位河岸段丘および丘陵部に集落が展開する。

### ①草創期～早期

現在のところ、長野原町で人々の生活が確認されているのは草創期末～早期初頭からである。該期の遺跡として石畑Ⅰ岩陰(9)がある。昭和53年に群馬県教育委員会により一部調査され、中期を除く草創期～晩期の土器片・獣骨・人骨などが出土している。特に草創期～早期の土器片には表裏縄文・燃糸文・押型文が認められる。横壁勝沼遺跡(52)は草創期の楡形尖頭器が採掘されている。近年、丘陵上での調査機会も増え、楡木Ⅱ遺跡(30)、立馬Ⅰ遺跡(16)、立馬Ⅲ遺跡(42)で早期の集落が検出されている。楡木Ⅱ遺跡では早期前半燃糸文期の住居跡が31軒検出され、遺構外で表裏縄文・押型文・沈線文・条痕文土器片も出土している。該期の住居跡検出数では県はもとより全国的にも有数である。また立馬Ⅰ遺跡では燃糸文期の住居跡の他、沈線文(田戸下層式)期の住居跡も検出され、遺構外では押型文・条痕文をはじめ晩期までの土器片が連続と出土している。立馬Ⅲ遺跡では子母口式や稲荷台式、沈線文土器などの住居跡が検出されている。さらに同時期の遺物は、調査事例の多い東部地区に偏っており、本遺跡のほか三平Ⅱ遺跡(2)、花畑遺跡(37)、幸神遺跡(63)、横壁中村遺跡(54)、長野原一本松遺跡(64)、西部地区では坪井遺跡<sup>(5)</sup>で確認されているのみである。それまでの岩陰での生活から早期前半燃糸文期になると丘陵上のオープンサイトでの集落に移行していくようである。また石畑Ⅰ岩陰に代表される岩陰遺跡は丘陵部の自然に迫り出した岩場を利用して居住・墓域とするものであるため、県内では分布・遺跡数ともに限定される。吾妻川流域はそのほとんどが河川や沢に沿う山岳傾斜地帯であることから岩陰遺跡の立地する条件を満たしているといえよう。岩陰遺跡は長野原町域で21遺跡34ヶ所確認されており、その大半がこの東部地区に集中している。この岩陰遺跡の多さは本町の原始古代の大きな特徴の一つでもある。

### ②前期

前期の遺跡も少ないが漸増の傾向にある。立地は丘陵上が多いが、河岸段丘へも集落が広がる傾向が見受けられる。前期前半の遺跡は東部地区より西部地区で顕著である。坪井遺跡で前期初頭(花積下層式期)の住居跡と土坑が検出され、土坑内で花積下層式と長野県で主体的な塚田式との共存が確認された<sup>(6)</sup>。碓坪遺跡では前期前葉(二ツ木式期)の住居跡<sup>(7)</sup>、長畝Ⅱ遺跡では前期前葉(関山式期)の土坑と前期前葉(黒浜式期)の住居跡土坑が検出されている<sup>(8)</sup>。東部地区では上原Ⅰ遺跡(20)で前期初頭の住居跡が9軒、楡木Ⅱ遺跡(30)で前期前葉(黒浜式期)の住居跡が検出されている他、横壁中村遺跡(54)では埋没河道で少量の破片が認められている。前期後半は本遺跡のほか楡木Ⅱ遺跡(30)、林中原Ⅰ遺跡(24)で前期後葉(諸磯式期)の住居跡、川原湯勝沼遺跡(49)で前期末葉の土坑が検出されている以外は遺構外の出土である。

### ③中期

中期の遺跡は他時期に比して最も多い。中期前半は県内でも極めて限られた検出事例で少ないが、丘陵上あるいは最上位段丘に占地しているようである。後半になると河岸段丘の平場を中心として積極的な居住区域を展開している。中期前半の集落は近年東部地区の丘陵上あるいは最上位段丘の遺跡で発見されはじめている。中期初頭(五領ヶ台式期)の遺跡は楡木Ⅱ遺跡(30)で住居跡3軒、上原Ⅱ遺跡(21)で屋外焼土遺構を伴う竪穴状遺構が3



基・土坑21基、上原IV遺跡(23)で上坑1基が確認されている<sup>(9)</sup>。中期前葉(阿玉台式期)の遺跡は立馬II遺跡(41)で五領ヶ台式期～阿玉台式期の住居跡11軒・土坑100基ほど、林中原I遺跡(24)で住居跡が1軒、幸神遺跡(63)で土坑が検出されている。横壁中村遺跡(54)では中期中葉(勝坂式期)の住居跡、西久保I遺跡(57)では同時期の土坑が確認されている。中期中葉(焼町類型期)の遺跡は幸神遺跡(63)で焼町土器の深鉢をがけ土器とした住居跡、林中原II遺跡(25)と横壁中村遺跡(54)で焼町土器を主体とする住居跡がそれぞれ1軒ずつ確認されている他、上ノ平I遺跡(5)では同時期の住居跡が12軒検出された。西部地区ではクヌギII遺跡<sup>(10)</sup>で中期中葉の埋設土器が検出されているのみで、山岸II遺跡<sup>(11)</sup>で少量の破片が認められたぐらいである。中期後半になると列石を伴う拠点集落が吾妻川流域地帯に分布を広げて出現する。長野原一本松遺跡(64)、横壁中村遺跡(54)を筆頭として近年の調査により石川原遺跡(44)、林中原I遺跡(24)、林中原II遺跡(25)が新たに加わり<sup>(12)</sup>、西部地区では坪井遺跡に代表される。遺跡を大規模に調査している前5者に共通するのは中期後半に引き続き、後期前半(～加曾利B式期)まで継続して集落が営まれていることである。また坪井遺跡は前2者に比して規模は小さいが、弧状石列1基、住居跡19軒(拡張住居含む)、土坑49基が検出されている。土器は大きく4系統(①加曾利E式土器<北関東系>、②曾利・唐草文系土器<信州系>、③「郷土」式土器<①と②の融合型式>、④橋倉II式土器<越後系>)が認められ、特に③の「郷土」式土器が該期の主体となる時期であり、環浅間山地域に分布し、小文化圏を形成していることが最近分かってきている<sup>(12)</sup>。この坪井遺跡出土土器の傾向は前4者出土土器、さらに県指定史跡「勘場木石器時代住居跡」<sup>(13)</sup>出土土器にも看取される。その他、向原遺跡<sup>(14)</sup>では中期末～後期初頭の敷石住居跡が検出されており、立地から拠点集落のひとつになる可能性が高い。最近の調査では坂尾遺跡(65)で中期後半の住居跡が6軒検出されており、うち3軒が敷石住居と確認され、敷石住居出現期の事例といえよう。

#### ④後期

後期の遺跡は規模は縮小するものの吾妻川流域の比較的広い範囲に分布する。ただし遺構の検出は後期前半までで後半は不明である。上記の中期後半の遺跡の他、西部地区では本町で初めて敷石住居跡を検出したクヌギII遺跡<sup>(15)</sup>、向原遺跡<sup>(16)</sup>、滝原III遺跡<sup>(17)</sup>、古屋敷遺跡<sup>(18)</sup>、東部地区では上ノ平I遺跡(5)、上原IV遺跡(23)、林中原I遺跡(24)に代表される。後期初頭(称名寺式期)～後期中葉(加曾利B式期)までの敷石住居跡、掘立柱建物跡は長野原一本松遺跡(64)、横壁中村遺跡(54)で多く検出されている。長野原一本松遺跡では壁に板材の痕跡を遺す柄鏡形敷石住居跡や方形周礫を明瞭に遺す柄鏡形敷石住居跡が確認されている。また横壁中村遺跡では主軸全長9mにも及ぶ人形の柄鏡形敷石住居跡や配石墓群が検出されている。その他、林中原I遺跡、上原IV遺跡、上ノ平I遺跡でも後期初頭～前葉(称名寺式期～堀之内式期)の敷石住居跡等が検出されている。後期後葉(高井東式期)の住居跡は横壁中村遺跡(54)で3軒検出されているのみである。後期終末(安行I・2式期)に関しては横壁中村遺跡(54)や立馬I遺跡(16)で土器片が出土しているがいずれも遺構外である。

#### ⑤晩期

晩期に関してはこれまで石畑I岩陰で土器片が出土している他、横壁中村遺跡(54)で晩期末葉(千綱式併行)の包含層が確認されているだけであった。遺構の検出は晩期前半は依然ないものの後半(特に末葉～弥生中期)に関しては最近の調査で増えつつある。立馬I遺跡(16)では晩期末葉の住居跡1軒、横壁中村遺跡(54)では晩期末葉の住居跡2軒、埋裏1基、上原IV遺跡(23)では土坑1基が検出されている。立馬I遺跡では南信松本盆地に分布する女鳥羽川式土器が出土している。さらに川原湯沼遺跡からは該期の土坑が数基検出され、その中の1基は壱柏再葬墓であることが判明している。同一土坑に2個体が埋置されており、ひとつが中沢氏のいう「水式突帯壺」<sup>(19)</sup>の上半部が逆位に、もう一方は浮線文系の半精製壺が正位の状態で出土している。この壱柏再葬墓は東日本でも最古級として注目されよう。その他、遺構外ではあるが久々戸遺跡(66)で水式土器の浅鉢、向原遺跡(31)で大洞A'式まで遡ると考えられる土器片も確認されている。



### (3) 弥生時代

弥生時代の遺跡は分布調査の時点で後期に属する3遺跡のみであったが、縄文時代晩期末葉から弥生中期前半までの資料が増えてきている。遺跡は丘陵上あるいは最上位段丘に立地する傾向が強く、縄文時代早期や中期前半と共通しているようである。東部地区では本遺跡のほか長野原一本松遺跡(64)で中期前半までと考えられる土坑1基、横壁中村遺跡(54)では埋葬(再葬墓か)1基が検出され、東海地方に分布する榎王式土器の壘が出土している。未報告ではあるが、林中原Ⅱ遺跡(25)では中期前半と考えられる住居跡4軒の他、前期末に遡る土坑壘(再葬墓か)、尾坂遺跡(65)でも前期末の再葬墓と思われる土坑や完形土器2個体を出土する土坑、貯蔵穴など、上原Ⅰ遺跡(20)では前期末の短頸壺を納めた土坑が検出されている。下原遺跡(39)では集石遺構から中期前半を中心とした遺物が認められた。西部地区では遺物出土量が少なく時期が判然としないものが多いが、坪井遺跡で中期初頭と考えられる住居跡1軒、土坑が6基<sup>(23)</sup>、向原遺跡では前期に遡るものも含めて中期前半までの土坑が7基検出されている<sup>(21)</sup>。遺構外では外輪原Ⅰ遺跡、上ノ平遺跡で中期前半までの資料が比較的多くまとまっている<sup>(22)</sup>。中期後半に関しては、立馬Ⅰ遺跡(16)で住居跡2軒と土器植壺2基を含む土坑が数基、後期に関しては、石畑遺跡(8)で土坑1基が確認されているのみである。分布調査時に居家以岩陰群、寺久保遺跡、新田原Ⅰ遺跡で土器片が表採されている他、立馬Ⅰ遺跡(16)では遺構外で、二社平遺跡(12)周辺で後期～古墳時代前期に比定される土器片が表採されている。

### (4) 古墳時代

これまで遺構外では他時期の遺物に混入するかたちで5世紀後半の土器片は坪井遺跡<sup>(23)</sup>、長野原一本松遺跡(64)、二社平遺跡(12)などで確認されてきたが、長野原町で古墳時代の集落として把握されている遺跡は皆無であった。平成15年度に最上位段丘面に立地する林宮原遺跡(27)で5世紀末～6世紀初頭の住居跡が1軒検出されたのが初例である。これに続いて平成16年度の調査で川原湯勝沼遺跡(49)で焼土を伴う土坑から同時期の土師器と遺構外で剣形模造品、下原遺跡(39)でも同時期の住居跡1軒の他、土師器(片)がまとまって出土している。最近の調査では上原Ⅳ遺跡(23)でも5世紀後半～6世紀初頭の住居跡が2軒検出されている。これらは吾妻川に直面した最上位・中位段丘面の自然流路あるいはその周辺で出土していることから水に関連した祭祀遺構の可能性が高い。これら4遺跡で検出された遺構は時期的にほぼ合致しており注目される。さらに上原Ⅰ遺跡(20)で前期と考えられる住居跡から台付壘や埴形土器が出土し、中期の高坏を包含する土坑も検出され、これまで空白であった時期の遺構検出事例が徐々にではあるが大規模調査の成果として増えてきている。

また昭和13年に刊行された『上毛古墳総覧』によれば、大津地区の「鉄塚」、与喜屋地区の「五輪塚」が前方後円墳と報告されている。また昭和11年刊行の『群馬県吾妻郡誌』では林地区の「御塚」が古墳とされ、合計3基が古墳とされている。「五輪塚」は現況で畑としてならされているが、「鉄塚」と「御塚」は円形の形状を保ち、現在は草地として利用されている。その他、「てづか(てづか)」や林地区中棚にある「砂塚」に関しては『長野原町誌』で「宮内地区の「てづか」は鉄塚の訛音ではあるまいか。鉄塚の地名には城跡や屋敷跡などに多いといわれ、砂塚との対照がおもしろい」とあり、古墳という認識ではないが同じ林地区に少なくとも「塚」と付くものが3基あるということが注目される。いずれも古墳とするには根拠が薄く、今後の調査に期待したい。

### (5) 奈良・平安時代

奈良時代に該当する遺跡は分布調査時の羽根尾Ⅱ遺跡のみで増えていない。これに対して平安時代の遺跡の分布は町内全域に及んでおり、縄文時代とともに本町で原始古代の中心をなす時期である。調査した遺跡を挙げれば、西部地区では、坪井遺跡<sup>(24)</sup>、向原遺跡<sup>(25)</sup>、長畝Ⅰ遺跡<sup>(26)</sup>、長畝Ⅱ遺跡<sup>(27)</sup>、山岸Ⅱ遺跡<sup>(28)</sup>、東部地区では本遺跡のほか上ノ平Ⅰ遺跡(5)、立馬Ⅰ遺跡(16)、東原Ⅰ遺跡(17)、上原Ⅰ遺跡(20)、上原Ⅲ遺跡(22)、上原Ⅳ遺跡(23)、林宮原遺跡(27)、中棚Ⅰ遺跡(28)、榎木Ⅰ遺跡(29)、榎木Ⅱ遺跡(30)、花畑遺跡(37)、下原遺跡(39)、川原湯勝沼遺跡(49)、横壁勝沼遺跡(52)、横壁中村遺跡(54)、長野原一本松遺跡(64)、尾坂

遺跡(65)などから住居跡や掘立柱建物跡、陥し穴などが検出され、該期集落として把握されている。この中で楡木Ⅱ遺跡では9世紀後半～10世紀前半の住居跡が38軒、竪穴遺構3基が検出され、「長」「三家」の墨書土器と刻字「称」をもつ石製紡錘車、上ノ平Ⅰ遺跡では住居跡が20軒検出され、県内2例目となる皇朝十二銭「貞觀永寶」が出土しており注目される。この他、未報告ではあるが、上原Ⅲ遺跡では鍛冶工房跡1軒・住居跡11軒・焼土遺構6基・陥穴29基など、中棚Ⅰ遺跡では住居跡4軒が検出され、そのうち全容が判明した2軒は一辺が6mを超える大形住居であった。このうちの1軒からは「赤」の墨書が大層に、その他3件からは「三家」の墨書が出土しておりその性格が注目される。

## (6) 中世

吾妻流域地帯には中世城跡が点在している。その立地は当時の道との関連性が強く、分岐点の丘陵上など交通の要衝に多い。西から羽根尾城跡<sup>(20)</sup>、長野原城跡<sup>(30)</sup>、丸岩城跡(61)、柳沢城跡(62)、金光山砦跡(48)などがあり、その他に林城跡(24)、林の烽火台<sup>(31)</sup>などといわれている箇所も存在する。これらはいずれも山城である。この中で丸岩城は「丸屋の要害」として『加沢記』にも記され、節理の発達した岩山の山頂に立地している。この丸岩城跡の北西麓に里城としての柳沢城跡が位置し、山城部と丘城部から成る本城を構えている。この柳沢城跡の一部が発掘調査されており、郭跡・堀切・土居・礎石建物・腰曲輪・石組遺構・溝・柵列などが検出されている。遺物のほとんどが礎石建物から出土しておりかつ豊富である。陶器・鉄製品・銅製品・石白などが出土しており、特に陶器類は常滑系大甕・古瀬戸三耳甕・古瀬戸菊皿・珠洲系陶器甕の他、輸入陶磁器である景德鎮窯梅瓶などが準完形で出土している。また最近の調査で林中原Ⅰ遺跡範囲内に林城跡が確認され、その範囲や構造が明らかになりつつある。金光山砦跡は明治期の絵図『川原湯真図』に「トリデアト」の記載があったことから平成12年度に町教委と事業団で踏査して堀切などを確認した。

近年は河岸段丘面の遺跡でも該期の遺構が検出されはじめており、集落として把握されるようになっていく。それらを列挙すると立馬Ⅰ遺跡(16)、林宮原遺跡(27)、楡木Ⅱ遺跡(30)、二反沢遺跡(31)、下原遺跡(39)、横壁中村遺跡(54)、西久保Ⅰ遺跡(57)、長野原一本松遺跡(64)、尾坂遺跡(65)となる。このうち、横壁中村遺跡と下原遺跡では石垣で区画された屋敷跡がそれぞれ1棟、長野原一本松遺跡では掘立柱建物群と竪穴状遺構、楡木Ⅱ遺跡でも掘立柱建物群、二反沢遺跡では区画跡のほか羽口や鉄サイなど鍛冶関連遺構などが検出されており注目される。

## (7) 近世

長野原町は浅間火山・白根火山の麓に位置し、古くから度重なる火山災害を被っていることが地層からも窺える。浅間火山の主な噴火活動を概観すれば、すでに9万年前には黒斑山は活動をはじめており、2.4～2.1万年前に黒斑山前噴を伴う噴火活動があった。その時発生した泥流は、応楽泥流・中之条泥流・前橋泥流と確認された地点ごとに異なる名称で呼ばれている。その後は仏岩火山の活動期で浅間板鼻黄色軽石(As-YP)降下をもたらした。1万年前頃から前掛山の活動が始まり、その噴火により縄文時代中期の浅間D軽石(As-D)、4世紀の浅間C軽石(As-C)、天仁元(1108)年の浅間B軽石(As-B)、天明3(1783)年の浅間A軽石(As-A)という4つの大きなテフラがもたらされた。これらは、浅間山の活動史を如実に物語る証であり、群馬県内の考古年代の指標にもなっている。その中でも天明3(1783)年の噴火は軽石降下後に襲った泥流(鎌原火砕流)により吾妻川・利根川流域沿いの町村に甚大な被害をもたらした。有史以来の記録的火山災害として知られている。この泥流によって埋没した嬭恋村の旧鎌原村が昭和54年から調査され、「延命寺観音堂の石段」、「十日ノ窪」など天明の大噴火における被災遺跡として注目を集めたが<sup>(32)</sup>、翌年に本町でも山間地域若者定住環境整備モデル事業として陸上自衛隊によるグラウンド造成中に口待供養塔・石臼・農具などが出土し、旧新井村跡の痕跡が確認された<sup>(33)</sup>。平成14年度には町立中央小学校の屋内体育館・プールの新築に伴って、当時の分限若小井助右衛門屋敷の一部が発見され、石垣・土蔵・礎石建物跡が調査されている<sup>(34)</sup>。また平成16年度には長野原市街地における下水道工事で建築部材・釜石・

鉄釜・石臼の他、「書面金剛塔」が泥流中から出土しており、旧長野原村が壊滅的状况であった一端を垣間見る発見があった<sup>(35)</sup>。

近年、ダム関連工事に伴う発掘調査により、これまで認識されていなかった下位・中位段丘で泥流に埋もれた遺跡が相次いで発見された。それらを列挙すると、嶋木Ⅰ遺跡<sup>(36)</sup>、東貝瀬Ⅲ遺跡<sup>(37)</sup>、町遺跡<sup>(38)</sup>、西宮遺跡(14)、東宮遺跡(15)、下田遺跡(26)、下原遺跡(39)、中棚Ⅱ遺跡(40)、石川原遺跡(44)、西ノ上遺跡(47)、川原湯勝沼遺跡(49)、横壁勝沼遺跡(52)、横壁中村遺跡(54)、西久保Ⅳ遺跡(60)、尾坂遺跡(65)、久々戸遺跡(66)などがあり、現在も継続調査中である。これらの遺跡では主として畑跡・ヤックラ・道・石垣・溝・井戸・覆屋構造物などが検出されている。現時点での成果として天明泥流に埋まった畑景観の復原や「ツカ」や平坦面から推定される「単位畑」の構造、さらには泥流とその逆級化構造のメカニズムなどに関して詳細な検討がなされている。また東宮遺跡、西宮遺跡、尾坂遺跡、下田遺跡などでは民家跡も検出されている。特に東宮遺跡は泥流に埋没した川原畑村を面的に調査した貴重な発見である。建物跡が14棟のほか畑20区画・道3条・溝6条・石垣10基・集石1基・土坑8基を検出した。通常遺存しない建築部材や漆器など植物遺存体の検出例が多く、当時の川原畑村の景観復原はもとより、近世建築学、民俗学など多角的な分析に寄与する部分が大いと考えられる。さらに隣接する西宮遺跡では埋没畑とともに南北方向に10数本の復旧溝が検出され、被災後の復旧の痕跡が本町ではじめて確認された。

また推定される泥流到達範囲外でも該期の遺構・遺物は確認されている。上原Ⅳ遺跡(23)、二反沢遺跡(31)、幸神遺跡(63)、長野原一本松遺跡(64)が該当する。このうち上原Ⅳ遺跡では溝(旧河川流路)を検出しているがそこから下駄や曲物の底・農具・石鉢・陶磁器など生活道具が出土している。

### 第3節 既応の調査

今回の調査は三平Ⅰ遺跡の第1次調査にあたる。本遺跡は長野原町教育委員会の他に公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団でA～D地点の調査が実施されている(第3図・第2表)。

A地点は平成10年度に川原畑地区工事用進入路建設工事に先立って実施された(文献35・80)。トレンチでの調査で遺構・遺物を検出するには至らなかった。

B地点は平成16・17年度に川原畑地区代替地造成に先立って実施された(文献46・78・79)。縄文時代前期後葉(諸磯式期)の住居跡2軒・土坑10基、平安時代掘立柱建物跡3棟・焼土遺構10基・土坑100基(うち陥し穴69基)が検出された。

C地点は平成22年度に湖面1号橋橋梁・橋台部建設に先立って実施された。トレンチ調査で遺構・遺物を検出するには至らなかった。



第3図 調査地点位置図 (S = 1/2,500)

第2表 三平1遺跡既往調査一覧

番号	調査年度	調査機関	原因 種類	調査面積 (開発面積)	概 要	備 考
1	平成20年度	長野原町教育委員会	個人専用住宅 本調査	490㎡ (692㎡)	本報告	文献13
A	平成10年度	財団法人群馬県埋蔵文化財 調査事業団	工事用進入路 確認調査	79㎡ (-m)	遺構なし 磨石出土	文献35・80
B	平成16・17 年度	〃	代替地造成 本調査	2,196㎡ (2,862㎡)	縄文前期後葉住居2・土坑10、平安朝立 柱建物3・焼土遺構10・土坑100	文献46・78・ 79
C	平成22年度	〃	橋梁橋台部 確認調査	243㎡ (2,484㎡)	遺構なし	-
D	平成24年度	公益財団法人群馬県埋蔵文 化財調査事業団	取り付け道路 本調査	3,120㎡ (3,628㎡)	平安住居3・陥穴19・土坑21、近世掘立 柱建物1ほか	未報告

D地点は平成24年度に湖面1号橋取り付け道路建設に先立って実施された。平安時代住居跡3軒・陥し穴19基を含む土坑40基、近世掘立柱建物跡1棟が検出された。

## 第4節 基本層序

本遺跡の基本層序は第5図のA地点で確認した。発掘調査での所見と併せると以下ようになる。

### 第I層 明灰褐色土

いわゆる表土で、上位は畑の耕作土である。軽石粒を多く含む。締まりは上位が弱く、下位はやや強い。

### 第II層 暗黄褐色土

ローム質土の2次堆積層である。斜面上位（北側）からの土砂崩落に伴う堆積層と考えられる。砂質で粘性は弱く、締まりはやや弱い。

### 第III層 暗褐色土

黄褐色軽石粒を含んでおり、上面（平安時代）の遺構確認面および遺物包含層に相当する。平安時代の遺構はこの層を掘り込んで構築されている。締まりは強い。全体的に茶褐色を呈しているが上位は黒色味が強い。

### 第IV層 暗黄褐色土

II層に類似したローム質土の2次堆積層である。

### 第V層 暗褐色土

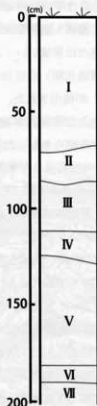
白色～黄褐色軽石粒を含んでおり、下面（縄文・弥生時代）の遺構確認面および遺物包含層に相当する。縄文・弥生時代の遺構はこの層を掘り込んで構築されている。締まり強い。

### 第VI層 明褐色土

いわゆる漸移層で、締まりは強い。

### 第VII層 黄褐色土

いわゆる関東ローム層でスコリアを少量含んでいる。粘性・締まりともに強い。



第4図 基本土層 (S = 1/20)

1. 長野県町教育委員会 1990 『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
2. 主に下位・中位段丘で発見された天明泥流に埋もれた遺跡を追加・範囲拡張した他、遺跡名の変更を実施した。その改訂版の詳細については「群馬県文化財情報システム」Web版 (<http://www2.wagamachi-guide.com/gunma/index.html>) で参照願いたい。本書では第2表および本章にできるだけ最新情報を記載した。
3. 長野県町教育委員会 2002～2012 『町内遺跡Ⅰ～Ⅹ』
4. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004 『新田西沢遺跡 新田平林遺跡』
5. 平成23年度に実施した坪井遺跡の第8次調査で縄文時代早期前半の土坑2基を検出したほか、包含層からも遺物が多く出土した。1層部の外反が強いものが多く、燃糸文よりも縄文施文のものが主体的で井草式併行と考えられる。現在同時並行で作成中の『町内遺跡ⅩⅡ』に収録予定である。
6. 長野県町教育委員会 2000 『坪井遺跡Ⅱ』  
笠懸野岩窟文化資料館 2004 『第39回企画展 竈の突った土器』
7. 長野県町教育委員会 2001 『森坪遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第8集
8. 長野県町教育委員会 1992 『長谷Ⅱ遺跡 坪井遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第3集
9. 平成18年度に実施した町営林土地改良事業に伴う試掘調査でも上原Ⅱ遺跡で土坑を検出したが、この試掘結果をもとに区内の埋蔵文化財の取り扱いや発掘調査区域を確定し、平成23年度～25年度の3年間を発掘調査、平成26年度に報告書刊行予定で事業を進行中である。平成23年度は上原Ⅱ遺跡・上原Ⅲ遺跡・中棚Ⅰ遺跡、平成24年度は上原Ⅰ遺跡・上原Ⅳ遺跡の発掘調査を実施した。
10. 長野県町教育委員会 1990 『クヌギⅡ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第2集
11. いずれも未報告。
12. 註6で触れているがそれ以後も何度か取り上げられている。  
長野県町教育委員会 2003 『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集  
群馬県立博物館 2004 『第77回企画展 新発見考古速報展 群馬発掘情報 石室の入り口を通り抜けること』  
関根慎一 2008 『浅間山を廻る縄文土器』『研究紀要26』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
13. 群馬県 1988 『群馬県史』資料編Ⅰ  
長野県町教育委員会 1989 『長野原町の文化財』  
上毛新聞社 1999 『群馬県遺跡大辞典』  
群馬県教育委員会 2001 『群馬の史跡(原始古代編)』
14. 長野県町教育委員会 1995 『向原遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第5集
15. 註10と同じ。  
笠懸野岩窟文化資料館 1999 『第25回企画展 群馬の注口土器展』
16. 註14と同じ。
17. 長野県町教育委員会 1998 『滝原Ⅲ遺跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第6集
18. 長野原町 1976 『長野原町誌』上巻
19. 中沢彦彦 1998 『「水1式」の細分と構造に関する試論』『長野県小諸市水遺跡発掘調査資料図説』第三冊 水遺跡発掘調査資料調査刊行会
20. 註5と同じ。
21. 註14と同じ。未報告資料が多くあり、今後資料紹介する予定である。
22. 富田孝彦 2000 『外輪原Ⅰ遺跡出土の弥生中期土器』『群馬県考古学手帳』10
23. 註6と同じ。
24. 註6と同じ。
25. 註14と同じ。
26. 註8と同じ。
27. 長野県町教育委員会 2004 『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
28. 平成24年度に熊川第一発電所引込変更工事に伴い発掘調査を実施した。平安住居1軒の他陥し穴3基、縄文時代前期末土坑1基が検出された。報告書は現在作成中である。
29. 註1および註18と同じ。その他文献18・19・22。
30. 註29と同じ。

31. 文献22。
32. 郷土教育委員会 1981 『鎌原遺跡発掘調査概報 浅間山噴火による埋没村落の研究』  
1994 『埋没村落 鎌原遺跡発掘調査概報（よみがえる延命寺）』
33. 長野県庁教育委員会 1989 『長野原町の文化財』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集  
群馬県立歴史博物館 1995 『第52回特別展 天明の浅間焼け』
34. 長野県庁教育委員会 2005 『小林家屋敷跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第12集  
かみつけの里博物館 2007 『第16回特別展 江ノ時代、浅間山大噴火』  
黒澤照弘・大西雅広 2009 『茨城駅、栃木駅、群馬県内の江戸後期における生産と流通』『第19回九州陶磁器学会 江戸後期における直民向け陶磁器の生産と流通（関東・東北・北海道編）』
35. 未報告。水特法関連事業に関しては別論により報告する予定である。なお、『青面金剛塔』は豊林寺参道に安置してある。
36. 平成16年度に個人寺用住宅建設に伴い発掘調査を実施した際に天明泥流に埋没した細跡を検出したのが最初である。その後、平成23・24年度にも試掘調査を実施し追認している。  
長野原町教育委員会 2005 『町内遺跡V』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
37. 平成24年度に町道長野原線建設に伴い試掘調査を実施した際に天明泥流に埋没した細跡を検出した。
38. 平成23・24年度に県道林長野原線建設に伴い発掘調査を実施し、天明泥流に埋没した建物跡1棟・畑跡7枚のほか、畑下の土坑4基・小竈跡等に関連した土器1や鉄サイ集中間所1カ所を検出した。文献85。

参考文献（第1・2表の文献番号に対応）

1. 長野原町 1976 『長野原町誌』上巻
2. 長野原町教育委員会 1990 『長野原町の遺跡—町内遺跡詳細分布調査—』長野原町埋蔵文化財調査報告第1集
3. 長野原町教育委員会 1995 『柳沢城跡』長野原町埋蔵文化財調査報告第4集
4. 長野原町教育委員会 2002 『町内遺跡Ⅰ』長野原町埋蔵文化財調査報告第9集
5. 長野原町教育委員会 2003 『町内遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第10集
6. 長野原町教育委員会 2003 『町内遺跡Ⅲ』長野原町埋蔵文化財調査報告第11集
7. 長野原町教育委員会 2004 『町内遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第13集
8. 長野原町教育委員会 2004 『林宮原遺跡Ⅱ』長野原町埋蔵文化財調査報告第14集
9. 長野原町教育委員会 2005 『町内遺跡V』長野原町埋蔵文化財調査報告第15集
10. 長野原町教育委員会 2006 『町内遺跡Ⅵ』長野原町埋蔵文化財調査報告第16集
11. 長野原町教育委員会 2007 『町内遺跡Ⅶ』長野原町埋蔵文化財調査報告第17集
12. 長野原町教育委員会 2009 『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第18集
13. 長野原町教育委員会 2010 『町内遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第19集
14. 長野原町教育委員会 2010 『林中原Ⅰ遺跡Ⅳ』長野原町埋蔵文化財調査報告第20集
15. 長野原町教育委員会 2011 『町内遺跡Ⅹ』長野原町埋蔵文化財調査報告第21集
16. 長野原町教育委員会 2012 『町内遺跡ⅩⅠ』長野原町埋蔵文化財調査報告第22集
17. 長野原町教育委員会 2012 『林宮原遺跡Ⅷ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集
18. 小池富治郎編 1936 『吾妻郡誌』吾妻教育学会
19. 山崎一・山田武夫 1972 『吾妻郡城域史』
20. 中塚之 1979 『石州遺跡概報』長野原町教育委員会・高崎鉄道管理局
21. 群馬県 1988 『群馬県史』資料編1
22. 群馬県教育委員会 1988 『群馬県の中世城跡跡』
23. 上毛新聞社 1999 『群馬県遺跡大辞典』
24. 常陸野宮宮文化資料館 2000 『第30回企画展 利根川流域の縄文草創期』
25. かみつけの里博物館 2000 『第6回特別展 銅について考える』
26. 原田昌幸 2007 『日本の美術 No495 縄文土器 草創期 早期』至文堂
27. 石田貞 2004 『群馬県北西部における陥し穴の構築時期をめぐって—長野原町の事例を中心として—』『研究紀要22』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
28. 藤巻幸明 2007 『縄文時代中期の住居内施設について—横塚中村遺跡発掘』『研究紀要25』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団
29. 山田悠弘 2009 『土ノ平遺跡31号住居跡出土土器の再検討』『研究紀要27』（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団

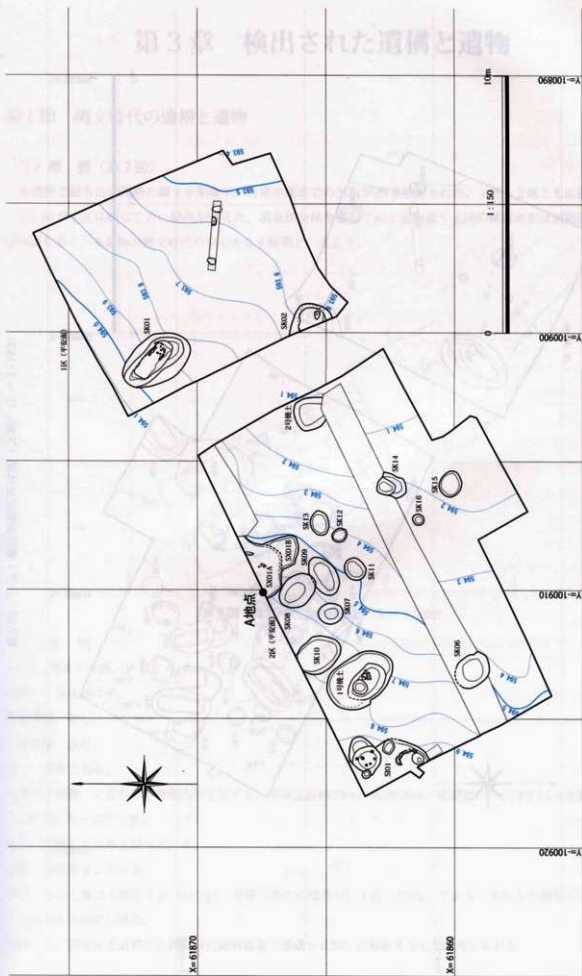
30. 橋本淳 2010 「中部地方における縄紋早期沈線紋土器の編年—ハッ場ダム関連遺跡出土資料の位置付け—」『研究紀要28. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団』
31. 鈴木徳雄 2012 「堀之内式土器研究の諸問題—堀之内式の概観と周辺諸型式」『第25回縄文セミナー—縄文後期土器研究の現状と課題—縄文セミナーの会』
32. 群馬大学教育学部編 2004 尾崎尚方雄博士 調査収集考古遺物・調査資料目録 雄山閣
33. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 「長野原久々戸遺跡」県道長野原草津口停車場線道路(橋梁)建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
34. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002 「長野原一本松遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第1集
35. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2002 「ハッ場ダム発掘調査集成(1)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第2集
36. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2003 「久々戸遺跡・中棚Ⅱ遺跡・下原遺跡・横壁中村遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第3集
37. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2004 「久々戸遺跡(2)・中棚Ⅱ遺跡(2)・西ノ上遺跡・上郷A遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第4集
38. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005 「横壁中村遺跡(2)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第5集
39. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2005 「川原湯沼沼遺跡(2)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第6集
40. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「横壁中村遺跡(3)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第7集
41. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「立馬Ⅱ遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第8集
42. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「上郷B遺跡 廣石A遺跡 二反沢遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
43. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「横壁中村遺跡(4)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第10集
44. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2006 「立馬Ⅰ遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第11集
45. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 「下原遺跡Ⅱ」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第12集
46. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 「三平Ⅰ・Ⅱ遺跡」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
47. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 「横壁中村遺跡(5)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第14集
48. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2007 「長野原一本松遺跡(2)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第15集
49. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 「幸神遺跡・上原Ⅳ遺跡・山根Ⅲ遺跡(2)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第17集
50. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 「榎木Ⅱ遺跡(1)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第18集
51. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 「長野原一本松遺跡(3)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第19集
52. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 「横壁中村遺跡(6)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第20集
53. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 「横壁中村遺跡(7)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第22集
54. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 「上ノ平Ⅰ遺跡(1)」ハッ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

## 報告書第23集

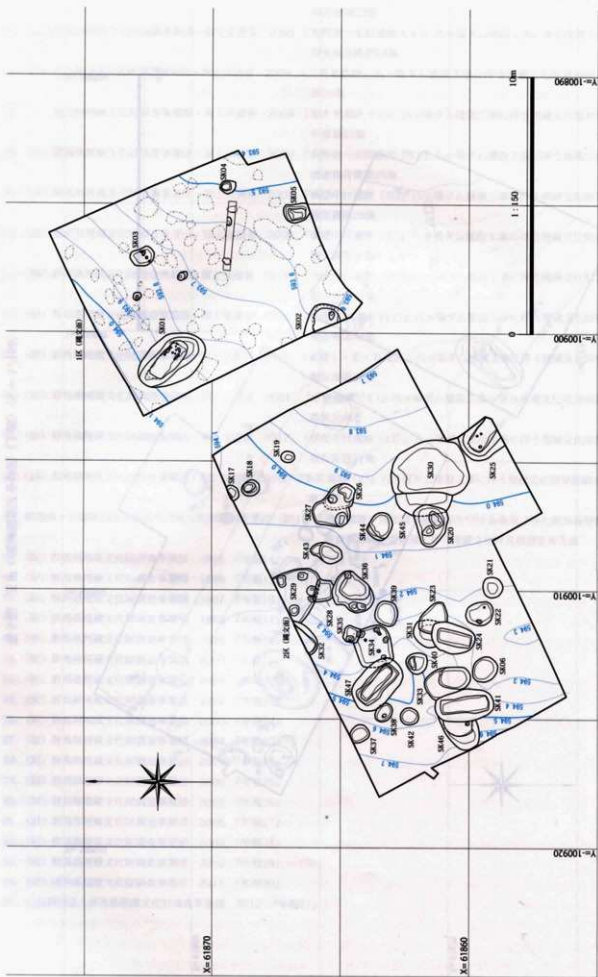
55. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2008 『長野原一本松遺跡(4)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第24集
56. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『立馬田遺跡』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第26集
57. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『榎木田遺跡(2)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第27集
58. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『長野原一本松遺跡(5)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第28集
59. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『横壁中村遺跡(8)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第29集
60. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2009 『横壁中村遺跡(9)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第30集
61. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010 『横壁中村遺跡(10)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第33集
62. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010 『横壁中村遺跡(11)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第34集
63. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2010 『東原1・Ⅱ・田遺跡』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第35集
64. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2011 『東宮遺跡(1)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第36集
65. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2012 『横壁中村遺跡(12)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第37集
66. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省 2012 『東宮遺跡(2)』ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第38集
67. 群馬県・公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『尾坂遺跡』社会資本整備総合交付金事業(活力創出基盤整備)長野原草津口駅舎整備に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
68. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1995 『年報14』
69. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1996 『年報15』
70. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1997 『年報16』
71. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998 『年報17』
72. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999 『年報18』
73. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2000 『年報19』
74. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2001 『年報20』
75. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2002 『年報21』
76. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2003 『年報22』
77. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2004 『年報23』
78. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2005 『年報24』
79. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2006 『年報25』
80. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2007 『年報26』
81. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2008 『年報27』
82. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2009 『年報28』
83. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2010 『年報29』
84. (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団 2011 『年報30』
85. 公益財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団 2012 『年報31』



第3章 検出された遺構と遺物



第5図 三平I遺跡調査区全体図〈上面〉(S=1/150)



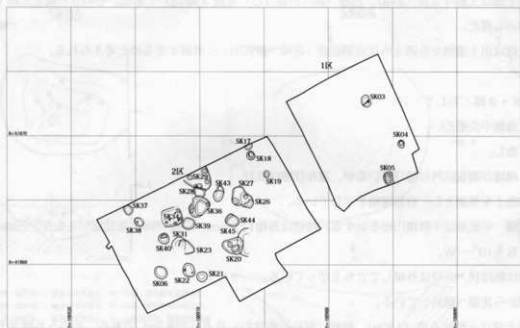
第6图 三平1遗址调查区全体图(下面)(S=1/150)

## 第3章 検出された遺構と遺物

### 第1節 縄文時代の遺構と遺物

#### (1) 概要 (第7図)

本遺跡で最も古い段階の縄文早期後半～後期中葉までの土坑が25基検出された。1区・2区ともに遺構は分布しているが1区は総じて古い傾向が窺えた。調査区全体を通して出土遺物量や土坑の帰属時期は前期後葉諸磯式期が最も多く、本遺跡の縄文時代の中心をなす時期といえよう。



第7図 縄文時代遺構配置図 (S = 1/300)

#### (2) 土坑

SK03 (第8・9図/PL5・19)

位置 1区北側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸93cm、短軸68cm、確認面からの深さ24cmを測る。

主軸方位 N-22°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片7点(213g)、石器(剥片石器含む)1点(150g)である。そのうち縄文土器5点、剥片石器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯b式期)に帰属するものと考えられる。

SK04 (第8・9図/PL5・19)

位置 1区南東側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸66cm、短軸50cm、確認面からの深さ58cmを測る。

主軸方位 N-16°-W。

壁面 北壁は下半が丸くオーバーハングするが上半は外傾して立ち上がっている。南壁は外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片5点(24g)、石器(剥片石器含む)6点(382g)である。そのうち縄文土器1点、礫石器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期初頭(花積下層式期)に帰属するものと考えられる。

SK05 (第8・9図/PL5・19)

位置 1区南側中央壁沿い。

重複関係 なし。

遺存状態 南端が調査区外に延びているが、遺存状態は良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸111+cm、短軸70cm、確認面からの深さ29cmを測る。

主軸方位 N-19°-W。

壁面 北壁は階段状、南壁は外傾して立ち上がっている。

底面 南側から北側へ傾斜している。

遺物 総出土量は土器片6点(440g)、石器(剥片石器含む)9点(258.6g)である。そのうち縄文土器1点を図示し得た。

備考 土坑は出土遺物から縄文時代早期末に帰属するものと考えられる。

SK06 (第8・9図/PL5・19)

位置 2区西側南寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 北側が擾乱により消失しているが、全体的に遺存状態は良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸148+cm、短軸115cm、確認面からの深さ40cmを測る。

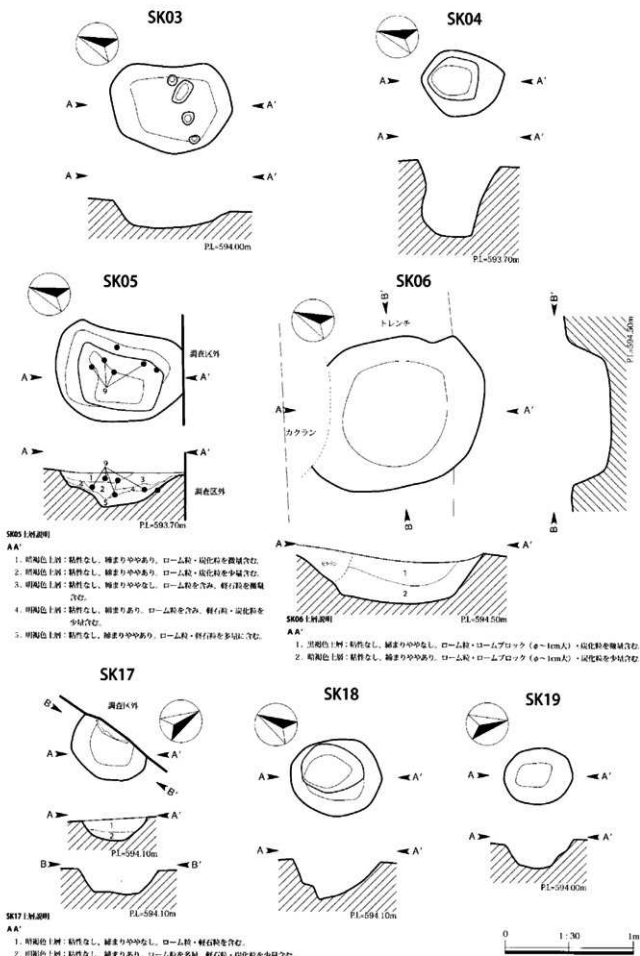
主軸方位 N-42°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

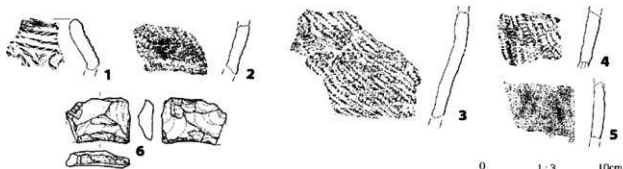
遺物 総出土量は土器片17点(181g)、石器(剥片石器含む)3点(50.4g)である。そのうち縄文土器6点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期前半(二ツ木・関山式期~黒浜・有尾式期)に帰属するものと考えら

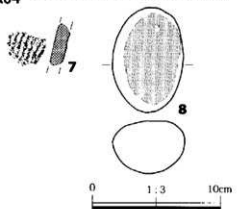


第8図 SK03~06・17~19実測図 (S = 1/30)

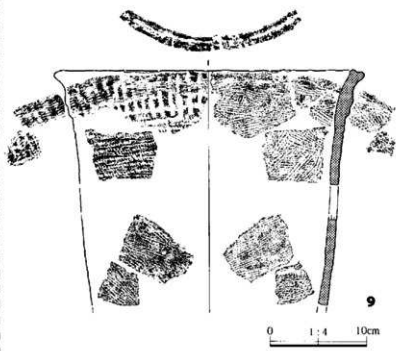
SK03



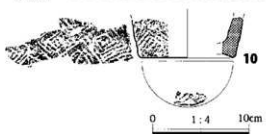
SK04



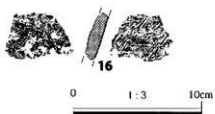
SK05



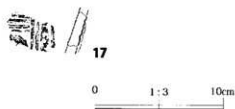
SK06



SK17



SK18



第9図 縄文土坑出土遺物実測図1

れる。

SK17 (第8・9図/PL5・6・19)

位置 2区東側北壁沿い。

重複関係 なし。

遺存状態 北側が調査区外に延びており、約3分の2の検出である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は円形を呈すると思われる。規模は長軸63cm、短軸39+cm、確認面からの深さ20cmを測る。

主軸方位 ー。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 若干起伏があるがほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片1点(20g)のみで縄文土器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代早期後半に帰属するものと考えられる。

SK18 (第8・9図/PL6・19)

位置 2区東側北寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。暗褐色土層で粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を含み、炭化粒を少量含んでいる。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸72cm、短軸60cm、確認面からの深さ31cmを測る。

主軸方位 N-28°-W。

壁面 北壁は階段状、南壁は外傾して立ち上がっている。

底面 南東から北西へ傾斜している。

遺物 総出土量は土器片3点(21g)、石器(剥片石器含む)2点(842.1g)である。そのうち縄文土器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期初頭(五領ヶ台式期)に帰属するものと考えられる。

SK19 (第8・11図/PL6・19)

位置 2区東側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。暗褐色土層で粘性なし、締まりややあり。ローム粒を含み、軽石粒・炭化粒を少量含んでいる。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸54cm、短軸42cm、確認面からの深さ23cmを測る。

主軸方位 N-10°-E。

壁面 北壁は階段状、南壁は外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片1点(18g)、石器(剥片石器含む)1点(124g)である。縄文土器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

SK20・45

SK20 (第10・11図/PL6・15・19)

位置 1区北側中央。

重複関係 SK16・45と重複し、SK16に切られ、SK45を切っている。

遺存状態 東側をSK45に切られ、約3分の2の検出である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈すると思われる。規模は長軸147+cm、短軸126cm、確認面からの深さ39cmを測る。

主軸方位 N-77°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片11点(96g)、石器(剥片石器含む)7点(1,030g)である。そのうち縄文土器4点、剥片石器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

SK45 (第10・11図/PL6・15・19)

位置 2区南側中央。

重複関係 確認面ではSK20・30と重複し、これらに切られている。上位確認面ではSK14が構築されている。

遺存状態 約2分の1の検出である。

覆土 単層である。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸219cm、短軸91+cm、確認面からの深さ42cmを測る。

主軸方位 N-2°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片11点(67g)、石器(剥片石器含む)8点(1,416g)である。そのうち縄文土器2点、剥片石器2点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

SK21 (第10・11図/PL6・19)

位置 2区西側南寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は円形を呈する。規模は長軸81cm、短軸75cm、確認面からの深さ33cmを測る。

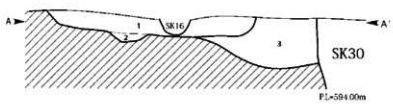
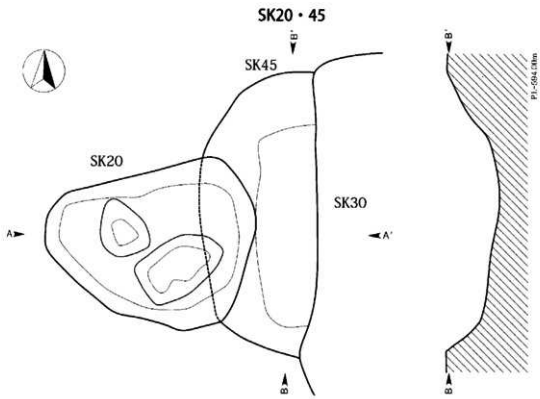
主軸方位 N-55°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片5点(114g)、石器(剥片石器含む)6点(396g)である。縄文土器1点、剥片石器1

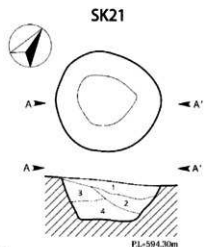




SK20・45上層説明

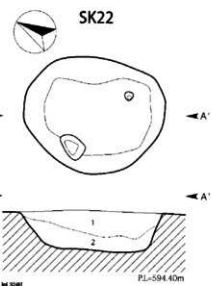
AA'

1. 埴間色上層：黏性なし、締まりやや中なり。ローム状・軽石状を含まず、炭化粒を少量含む。
2. 埴間色上層：黏性なし、締まりやや中なり。ローム状・軽石状・炭化粒を少量含む（以てSK20）。
3. 埴間色上層：黏性なし、締まりやや中なり。ローム状を少量、軽石状を微量含む（以てSK45）。



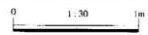
SK21上層説明  
AA'

1. 埴間色上層：黏性なし、締まりあり。ローム状・軽石状を微量含む。
2. 埴間色上層：黏性なし、締まりあり。ローム状を少量、軽石状を微量含む。
3. 埴間色上層：黏性なし、締まりやや中なり。ローム状を含まず、軽石状を少量含む。
4. 埴間色上層：黏性なし、締まりあり。ローム状を含まず、軽石状を微量含む。



SK22上層説明  
AA'

1. 埴間色上層：黏性なし、締まりやや中なり。ローム状・軽石状・炭化粒を含まず。
2. 埴間色上層：黏性なし、締まりあり。ローム状をやや多く含む。軽石状・炭化粒を少量含む。



第10図 SK20・45・21・22実測図 (S = 1/30)

点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代中期中葉（勝坂3式期）に帰属するものと考えられる。

SK22（第10・11図／P L 6・7・19）

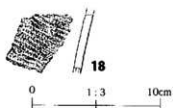
位置 2区西側南寄り。

重複関係 なし。

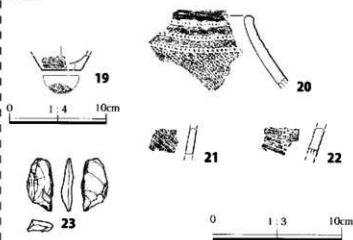
遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

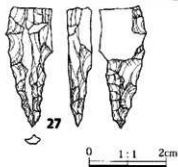
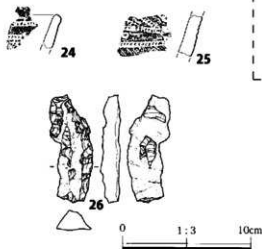
SK19



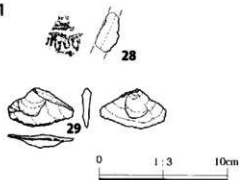
SK20



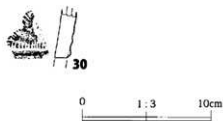
SK45



SK21



SK22



第11図 縄文土坑出土遺物実測図2

**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸108cm、短軸90cm、確認面からの深さ30cmを測る。

**主軸方位** N-31°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片13点(339g)、石器(剥片石器含む)4点(171g)である。そのうち縄文土器1点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代中期中葉(勝坂3式期)に帰属するものと考えられる。

## SK23・31

SK23(第12・13図/PL7・20)

**位置** 2区西側中央。

**重複関係** SK24・31と重複し、SK31を切り、SK24に切られている。

**遺存状態** 良好。

**覆土** 掘り方中央に柱痕跡が確認され、直径約20cmの太さを示している。

**平面形と規模** 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸142cm、短軸110cm、確認面からの深さ22cmを測る。

**主軸方位** N-71°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片1点(5g)のみである。SK24の流れ込み遺物も加えて、縄文土器2点、剥片石器1点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

SK31(第12・13図/PL7・20)

**位置** 2区西側中央。

**重複関係** SK23・24と重複し、両方に切られている。

**遺存状態** SK24に切られ、全体の3分の1を消失している。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸98+cm、短軸107cm、確認面からの深さ63cmを測る。

**主軸方位** N-13°-E。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片19点(950g)、石器(剥片石器含む)16点(708g)である。縄文土器1点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代前期前葉(二ツ木・岡山式期)に帰属するものと考えられる。

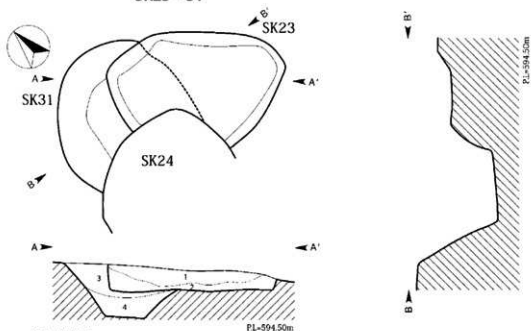
## SK26・27

SK26(第12・13図/PL7・20)

**位置** 2区東側中央。

**重複関係** SK27を切る。

### SK23・31

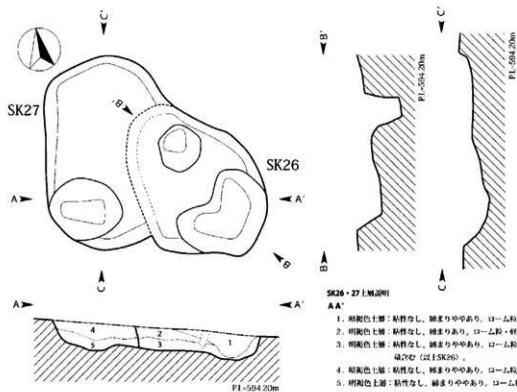


SK23・31上層説明

A A'

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）を散見含み、軽石粒を少量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし、締まりやや中なし。ローム粒を少量含み、軽石粒を散見含む。（以上SK23）
3. 黄褐色土層：粘性なし、締まりあり。ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）・軽石粒を含む。
4. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を散見含む。（以上SK31）

### SK26・27



SK26・27上層説明

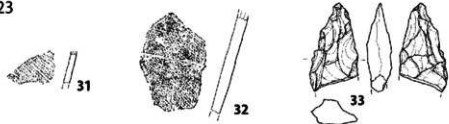
A A'

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりやや中あり。ローム粒・軽石粒を少量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒を含む。
3. 明褐色土層：粘性なし、締まりやや中あり。ローム粒・軽石粒を含む、炭化粒を散見含む（以上SK26）。
4. 暗褐色土層：粘性なし、締まりやや中あり。ローム粒を散見、軽石粒を少量含む。
5. 明褐色土層：粘性なし、締まりやや中あり。ローム粒を含む、軽石粒を散見含む（以上SK27）。



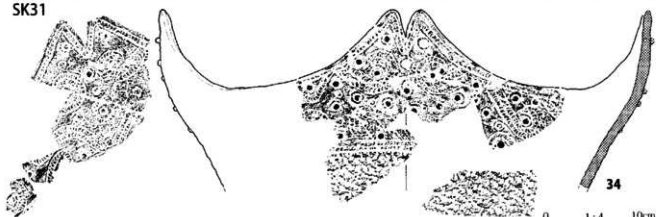
第12図 SK23・31・26・27実測図（S = 1/30）

SK23



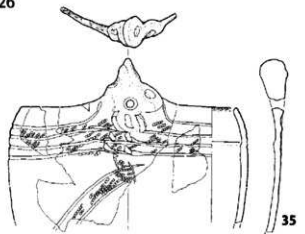
0 1:3 10cm

SK31



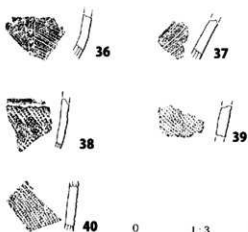
0 1:4 10cm

SK26



0 1:4 10cm

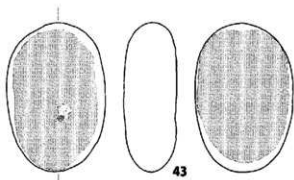
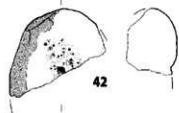
SK27



0 1:3 10cm



0 1:1 2cm



0 1:3 10cm

第13図 縄文土坑出土遺物実測図3

**遺存状態** 良好。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸132cm、短軸95cm、確認面からの深さ33cmを測る。

**主軸方位** N-31°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** 北側から南側へ傾斜している。北側にビットが検出され、平面形は不整円形を呈し、直径30cm、底面からの深さ26cmを測る。

**遺物** 総出土量は土器片11点(211g)、石器(剥片石器含む)11点(1,252g)である。そのうち縄文土器1点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代後期中葉(加曾利b1~b2式期)に帰属するものと考えられる。

#### SK27 (第12・13図/P L 7・20)

**位置** 2区東側中央。

**重複関係** SK26に切られる。

**遺存状態** 良好。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸150cm、短軸96cm、確認面からの深さ24cmを測る。

**主軸方位** N-8°-E。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** 北側はほぼ平坦であるが南側に深さ12cmの落ち込みが確認されている。

**遺物** 総出土量は土器片9点(135g)、石器(剥片石器含む)4点(1,150g)である。そのうち縄文土器5点、剥片石器1点、礫石器2点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

#### SK28・29

##### SK28 (第14・16図/P L 7・20)

**位置** 1区北側中央。

**重複関係** 確認面ではSK29・36と重複し、SK29を切り、SK36に切られている。また上位確認面ではSK08・09が構築されている。

**遺存状態** 良好。

**覆土** 単層である。

**平面形と規模** 平面形は隅丸方形を呈すると思われる。規模は長軸63cm、短軸87cm、確認面からの深さ17cmを測る。

**主軸方位** N-3°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片3点(50g)、石器(剥片石器含む)3点(42g)である。そのうち縄文土器3点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

SK29 (第14・16号/PL7)

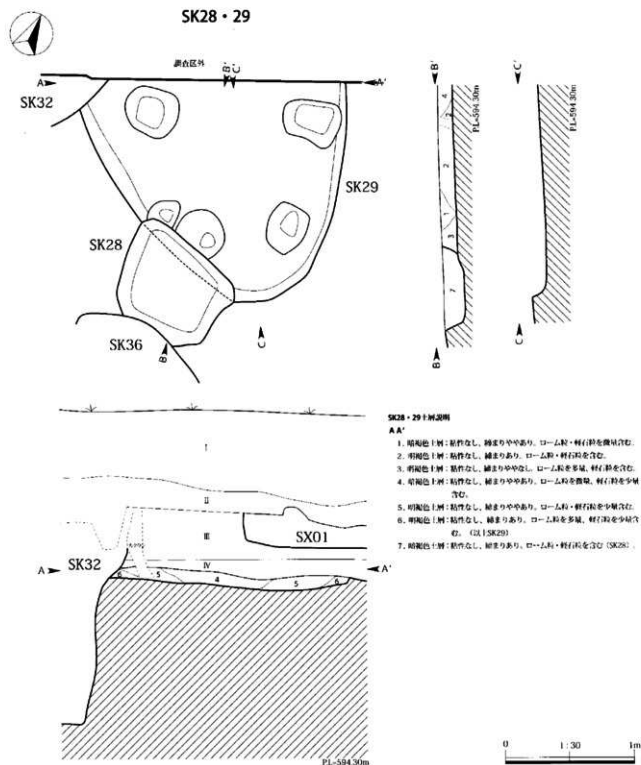
位置 2区北側中央壁沿い。

重複関係 確認面ではSK28・32と重複し、両方に切られている。上位確認面ではSK08・SX01が構築されている。

遺存状態 北半分が調査区外に延びており、約2分の1の検出である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸171+cm、短軸202+cm、確認面からの深さ12



第14図 SK28・29実測図 (1/30)

cmを測る。

**主軸方位** N-32°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦であるがピットが5基確認されている。

**遺物** 総出土量は土器片13点(96g)、石器(剥片石器含む)20点(546.2g)である。そのうち縄文土器4点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

#### SK34 (第15・16図/P L 8・20・21)

**位置** 2区北側中央西寄り。

**重複関係** 確認面ではSK35・47と重複し両方に切られている。上位確認面では1号焼土遺構が構築されている。

**遺存状態** 良好。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸162cm、短軸141cm、確認面からの深さ29cmを測る。

**主軸方位** N-75°-E。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** 皿状を呈している。

**遺物** 総出土量は土器片27点(306g)、石器(剥片石器含む)27点(2,165.6g)である。SK46・1号焼土遺構の流れ込み遺物も加えて、縄文土器20点、剥片石器2点、礫石器2点、その他の石器1点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

#### SK36 (第15・18図/P L 8・21)

**位置** 2区北側中央。

**重複関係** 確認面ではSK28を切っている。上位確認面ではSK07・09が構築されている。

**遺存状態** 良好。

**覆土**

**平面形と規模** 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸170cm、短軸120cm、確認面からの深さ21cmを測る。

**主軸方位** N-42°-E。

**壁面** 階段状に立ち上がっている。

**底面** 皿状を呈している。

**遺物** 総出土量は土器片14点(276g)、石器(剥片石器含む)9点(442.5g)である。そのうち縄文土器1点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から縄文時代後期に帰属するものと考えられる。

#### SK37 (第15・18図/P L 8・21)

**位置** 2区北西隅。

**重複関係** なし。

**遺存状態** 北壁の一部が調査区外に延びているが遺存状態は良好。



**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

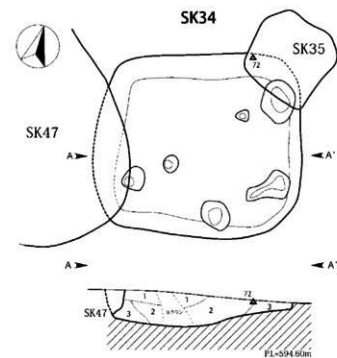
**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸76+cm、短軸64cm、確認面からの深さ27cmを測る。

**主軸方位** N-30°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

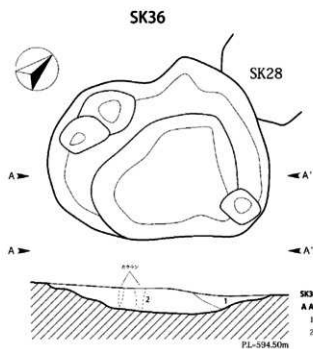
**遺物** 総出土量は土器片11点(105g)、石器(剥片石器含む)6点(295g)である。そのうち縄文土器3点を図示した。



**SK34 土層説明**

**A A'**

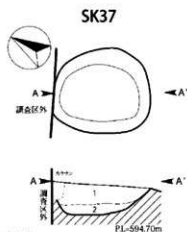
1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム粒・ロームブロック(φ=5mm以下)を少量、軽石殻を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム粒を多量、軽石殻・炭化粒を微量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム粒・ロームブロック(φ=5mm以下)を多量に含む。



**SK36 土層説明**

**A A'**

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややなし、ローム粒・軽石殻を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム粒を少量、軽石殻を微量含む。



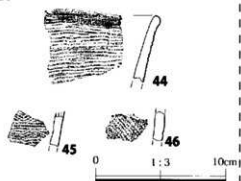
**SK37 土層説明**

**A A'**

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム粒・軽石殻を少量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム粒を少量、軽石殻を微量含む。

第15図 SK34・36・37実測図(1/30)

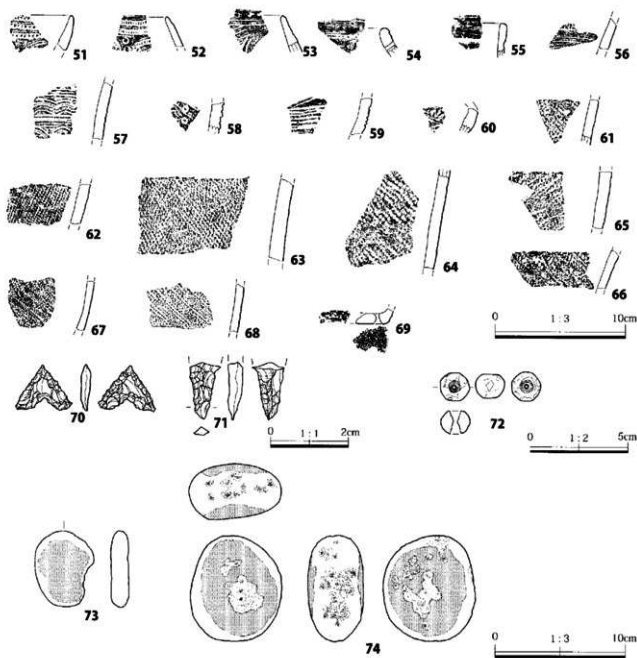
SK28



SK29



SK34



第16图 縄文土坑出土遺物実測図4

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉（諸磯a式期）に帰属するものと考えられる。

SK38（第17・18図／P L 8・21）

位置 1区北側中央。

重複関係 SK47に切られる。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸79cm、短軸61cm、確認面からの深さ18cmを測る。

主軸方位 N-60°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片7点（106g）、石器（剥片石器含む）2点（12.3g）である。そのうち縄文土器2点を図示した。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉（諸磯a式期）に帰属するものと考えられる。

SK39（第17図／P L 9）

位置 2区北側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は胴の張る隅丸方形を呈する。規模は長軸92cm、短軸88cm、確認面からの深さ13cmを測る。

主軸方位 N-77°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片2点（5g）であるが、図示するには至らなかった。

SK40（第17図／P L 9）

位置 2区西側中央。

重複関係 なし。上位確認面では1号焼土遺構が構築されている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整形を呈する。規模は長軸86cm、短軸81cm、確認面からの深さ26cmを測る。

主軸方位 N-38°-W。

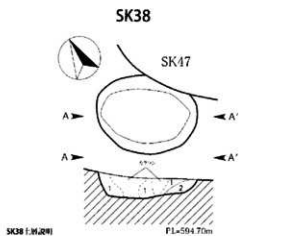
壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 北側にピットが認められる。

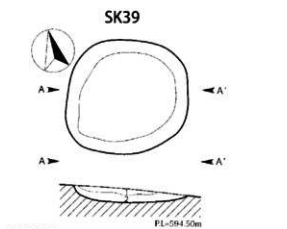
遺物 総出土量は石器（剥片石器含む）1点（1.5g）のみで、図示するには至らなかった。

SK43（第17・18図／P L 9・21）

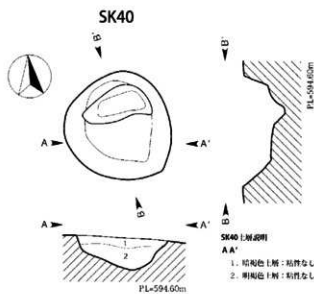
位置 2区北側中央。



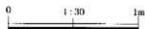
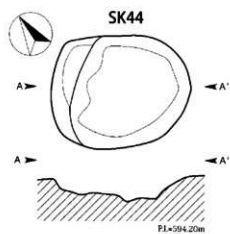
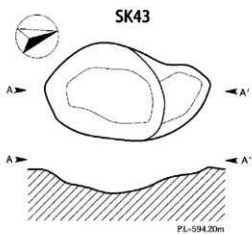
1. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム粒を多く含む、軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム粒・軽石粒を微量含む。



1. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム粒・軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム粒を多量、軽石粒を微量含む。



1. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム粒を少量、軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム粒を多量、軽石粒（ $\phi=5\text{mm}$ 以下）を少量含む。

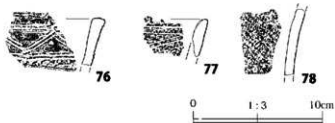


第17図 SK38～40・43・44実測図 (1/30)

SK36



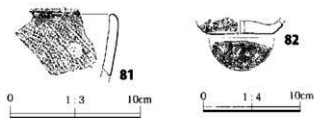
SK37



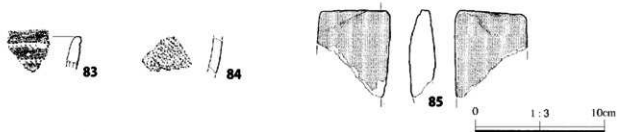
SK38



SK43



SK44



第18図 縄文土坑出土遺物実測図5

重複関係 なし。上位確認面ではSK09・SX01が構築されている。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。暗褐色土層で粘性なし、締まりややなし。ローム粒を少量、軽石粒を微量含む。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸126cm、短軸74cm、確認面からの深さ20cmを測る。

主軸方位 N-12°-E。

壁面 階段状に立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片6点(88g)である。そのうち縄文土器2点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

SK44 (第17・18図/PL9・21)

位置 2区中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。暗褐色土層で粘性なし、締まりややなし。ローム粒を少量、軽石粒を微量含む。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸108cm、短軸89cm、確認面からの深さ20cmを測る。

主軸方位 N-57°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凸凹している。

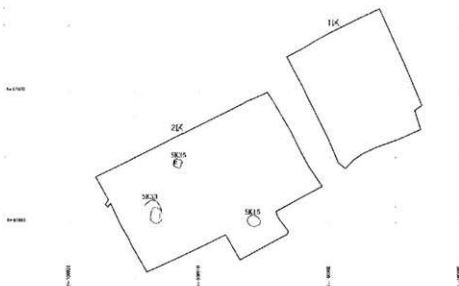
遺物 総出土量は上器片6点(41.1g)、石器(剥片石器含む)1点(84g)である。そのうち縄文土器2点、礫石器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から縄文時代前期後葉(諸磯a式期)に帰属するものと考えられる。

## 第2節 弥生時代の遺構と遺物

### (1) 概要(第19図)

本遺跡で検出された弥生時代の遺構は土坑3基のみで、調査区は2区に偏在している。また平安時代の陥し穴に流れ込むかたちで遺物の出土が認められている。概ね縄文時代晩期末～弥生時代中期前半に時期が限定され、土坑の帰属時期は弥生時代中期初頭～中期前半である。



第19図 弥生時代遺構配置図 (S = 1/300)

## (2) 土 坑

SK15 (第20・21図/PL9・21)

位置 2区南側中央。

重複関係 なし。下位確認面でSK30が検出されている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は円形を呈する。規模は長軸102cm、短軸87cm、確認面からの深さ31cmを測る。

主軸方位 N-80°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片2点(19g)である。そのうち弥生土器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から弥生時代中期前半に帰属するものと考えられる。

SK33 (第20・21図/PL9・10・21)

位置 2区西側中央。

重複関係 SK41に切られる。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸179cm、短軸110+cm、確認面からの深さ53cmを測る。

主軸方位 N-23°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 2段に掘り込まれており、皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片20点(323g)、石器(剥片石器含む)24点(601g)である。弥生土器2点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から弥生時代中期初頭に帰属するものと考えられる。

SK35 (第20・21図/PL8・21)

位置 2区北側中央。

重複関係 確認面でSK34と重複しこれを切っている。上位確認面ではSK10が構築されている。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。

平面形と規模 平面形は隅丸方形を呈する。規模は長軸62cm、短軸58cm、確認面からの深さ15cmを測る。

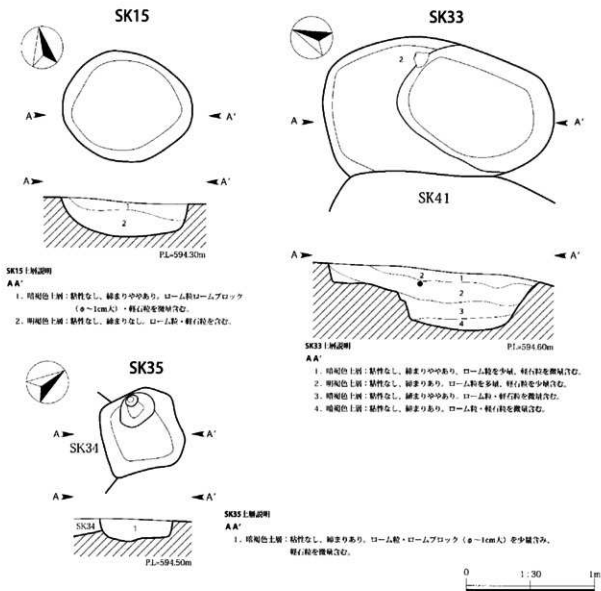
主軸方位 N-70°-W。

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

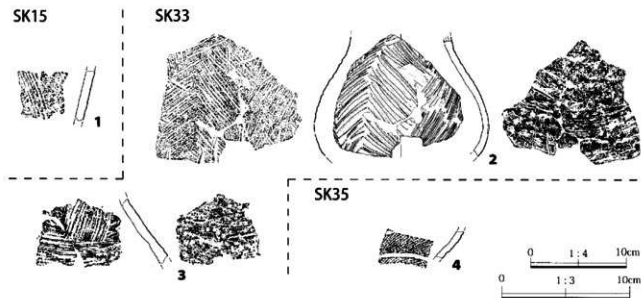
底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は土器片2点(9.2g)、石器(剥片石器含む)1点(6.6g)である。そのうち弥生土器1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から弥生時代中期前半に帰属するものと考えられる。



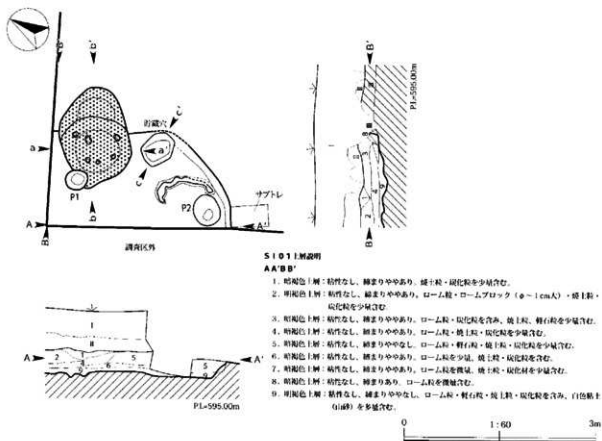
第20図 SK15・33・35実測図 (1/30)



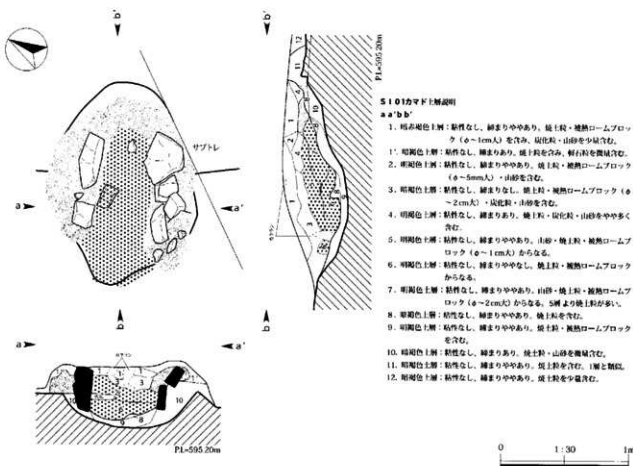
第21図 弥生土坑出土遺物実測図



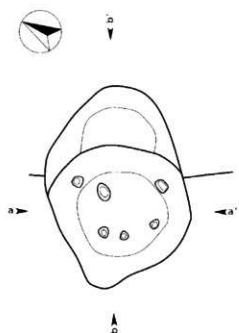




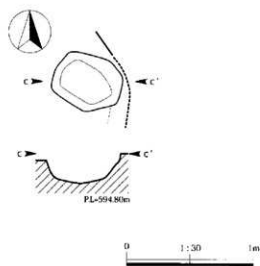
第23図 S101実測図 (1/60)



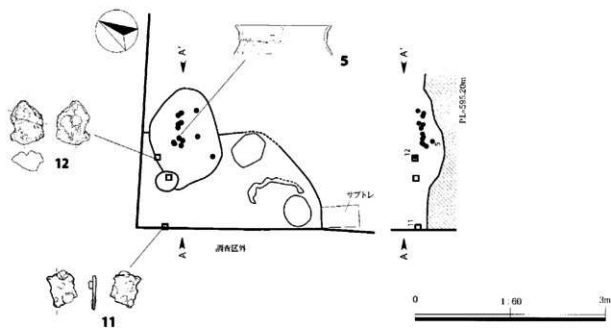
第24図 S101実測図カマダ (1/30)



第25図 SI01カマド掘り方実測図 (1/30)



第26図 SI01貯蔵穴実測図 (1/30)



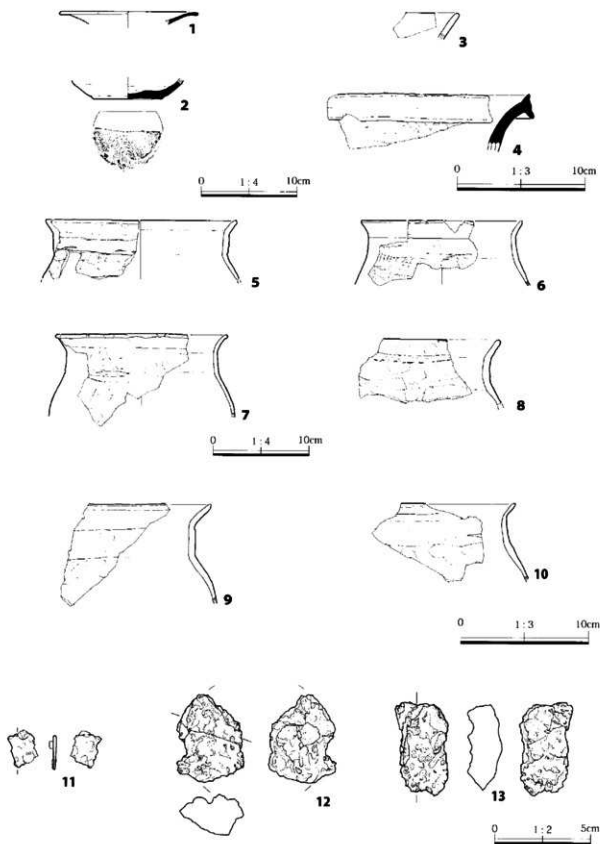
第27図 SI01遺物出土状況図 (1/60)

られる。平面形は円形～楕円形を基調とする。それぞれの規模を第3表に示す。

**カマド** 東壁に位置し、遺存状態は良好である。板状石と白色粘土混の山砂を材材としている。規模は全長158cm、最大幅117cmを測る。煙道部は壁面から70cm突き出す形態を採っている。火床面は22cm掘り込まれ約10cmの厚さを有している。

**その他の施設** 東南コーナーに貯蔵穴が確認されている。平面形は楕円形を呈し、規模は長軸58cm、短軸45cm、床面からの深さ25cmを測る。特に遺物が出土していない。また貯蔵穴とP2の間に周堤帯が確認されている。周堤帯は長さ96cm、幅10～19cm、高さ4～13cmを測り、P2を囲むように配置されている。

**遺物検出状況** 遺物はカマドで集中して検出された。



第28図 SI01出土遺物実測図

**遺物** 総出土量は土器片643点(3,405g)(うち土師器・須恵器片615点(2,799g))、石器(剥片石器含む)68点(2,422.4g)、鉄滓9点(93.8g)である。そのうち土師器7点(内黒杯1点・甕6点)、須恵器5点(杯4点・壺1点)、鉄片1点、鉄滓2点を図示し得た。

**備考** 本住居跡は本調査区で検出された唯一の住居で、構築時期は出土遺物から9世紀後半(第3四半期)に比定される。

### (3) 焼土遺構

#### 1号焼土遺構(第29~31図/P L 12・13・22)

**位置** 2区北側中央。

**重複関係** SK47の上位に位置し、西壁の掘り込み面が一致することからSK47の埋没後あるいは埋没途中に二次掘削したものと考えられる。

**遺存状態** 良好。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸85cm、短軸75cm、確認面からの深さ55cmを測る。

**主軸方位** N-35°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** 2段に掘り込まれており、皿状を呈している。

**遺物** 総出土量は土器片228点(1,038.3g)(うち土師器・須恵器片185点(768g))、石器(剥片石器含む)64点(2,568.4g)、鉄滓4点(154.2g)、炭化材3点(7.1g)である。そのうち須恵器1点、土師器2点、鉄滓2点、金床石1点を図示し得た。

**備考** 本遺構は陥し穴と考えられるSK47の上に構築されており、鉄滓や金床石などの出土遺物から小鍛冶に関連した性格をもつものと考えられる。構築時期に関しては土師器甕(第31図2)がSI01と接合関係を有することが確認されており、9世紀後半(第3四半期)に比定される。

#### 2号焼土遺構(第32・33図/P L 13・22)

**位置** 2区東側隅。

**重複関係** なし。

**遺存状態** トレンチにより南側の一部を消失しているが、遺存状態は良好。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸131cm、短軸124cm、確認面からの深さ33cmを測る。

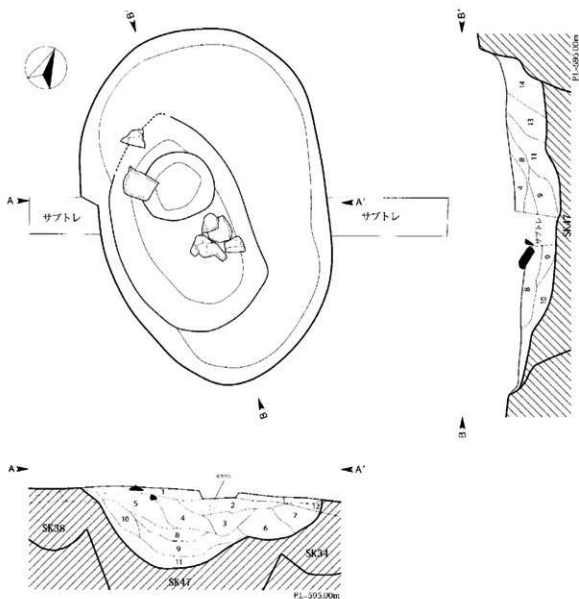
**主軸方位** N-19°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** 皿状を呈している。

**遺物** 総出土量は土器片39点(203g)(うち土師器・須恵器片21点(74g))、石器(剥片石器含む)31点(1,214g)、鉄滓2点(44g)である。そのうち須恵器1点、土師器1点、鉄滓1点を図示し得た。

**備考** 須恵器杯(第33図1)と鉄滓(同図3)は本遺構の覆土から出土していないが同一確認面で出土していることから出土遺物として取り扱った。本遺構は出土遺物から1号焼土遺構と同様に小鍛冶に関連した性格をもつものと考えられる。構築時期に関しては出土遺物から9世紀後半(第3四半期)に比定される。

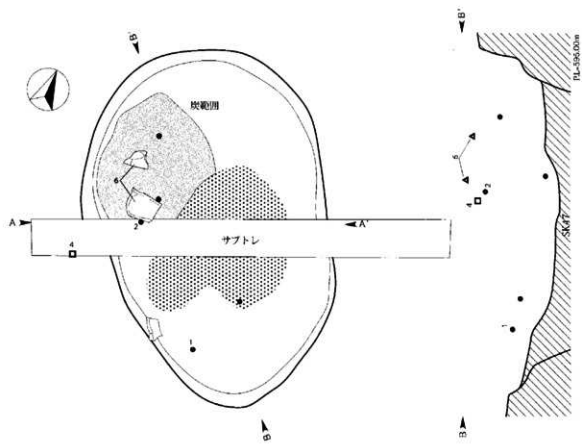


1号焼土遺構1層説明

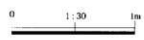
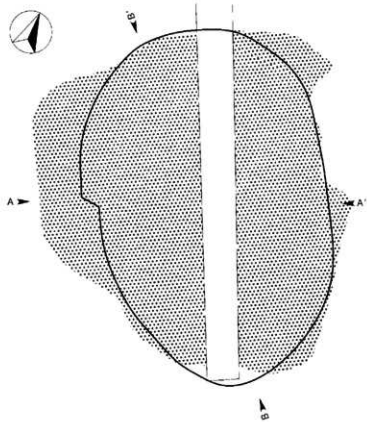
AA' BB'

1. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻・軽石殻を微量含む。焼土殻・炭化殻を少量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻・軽石殻を多数。焼土殻・炭化材・自然土を少量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム殻・軽石殻・焼土殻を少量。炭化殻を含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻・軽石殻を微量。炭化殻を含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻・ロームブロック (φ~1cm) ・軽石殻 (φ~1cm) を少量。焼土殻・炭化殻を微量含む。
6. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻・ロームブロック・軽石殻を多数。焼土殻・炭化殻を少量含む。
7. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻を微量含む。
8. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻・ロームブロック・軽石殻を含む。炭化殻を多数。焼土殻を微量含む。
9. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム殻・軽石殻・焼土殻を少量。炭化材を少量含む。
10. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム殻を多数。軽石殻・焼土殻・炭化殻を含む。
11. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム殻・軽石殻 (φ~1cm) を含む。炭化材を少量含む。
12. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻・軽石殻・炭化殻を微量含む。
13. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム殻・焼土殻を少量含む。
14. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム殻・焼土殻・炭化殻を微量。軽石殻を少量含む。

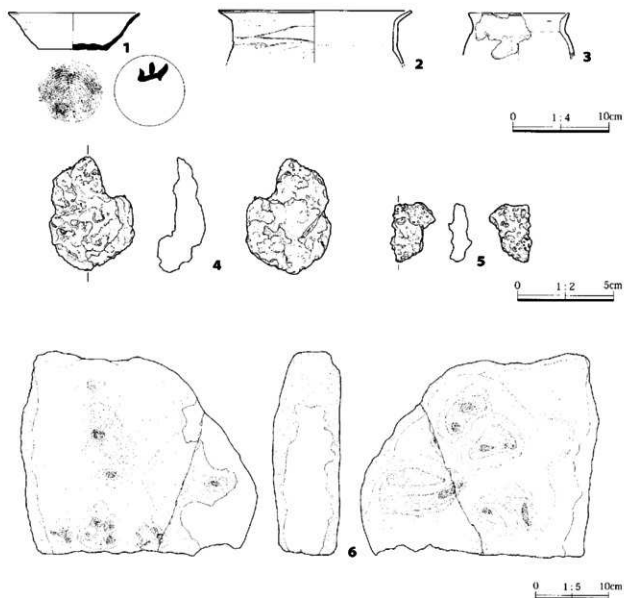
第29図 1号焼土遺構実測図 (1/30)



(検出面)



第30図 1号焼土遺構遺物出土状況図 (1/30)



第31図 1号焼土遺構出土遺物実測図

#### (4) 土坑

SK07 (第34・35図/P L 13・22)

位置 2区北側中央。

重複関係 確認面での重複はないが、SK36の上に構築されている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸96cm、短軸81cm、確認面からの深さ66cmを測る。

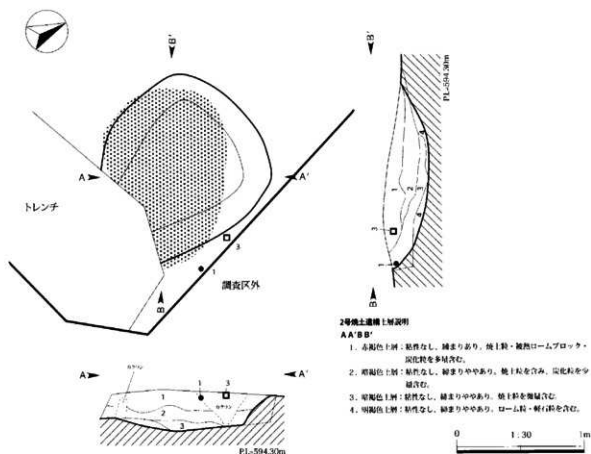
主軸方位 N-2°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

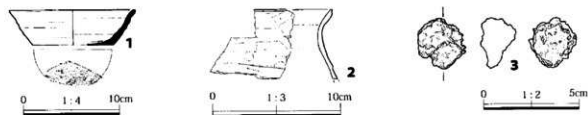
底面 やや凸凹している。

遺物 総出土量は土器片17点(70g)(うち土師器・須恵器片9点(20g))、石器(剥片石器含む)2点





第32図 2号焼土遺構 実測図 (1/30)



第33図 2号焼土遺構出土遺物実測図

(802g)、鉄滓1点(42g)である。そのうち鉄滓1点を図示し得た。

備考 本土坑は出土遺物から小鍛冶に関連した性格をもつものと考えられる。

SK08 (第34・35図/P.L.13・14・22)

位置 2区北側中央。

重複関係 確認面ではSK09に切られる。SK28・29の上に構築されている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸156cm+α、短軸120cm、確認面からの深さ48cmを測る。

主軸方位 N-30°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** 皿状を呈している。

**遺物** 総出土量は土器片13点(45.4g)(うち土師器・須恵器片7点(13g))、石器(剥片石器含む)34点(1.653g)、鉄滓1点(281g)である。そのうち須恵器1点、鉄滓1点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から小鍛冶に関連した性格をもつものと考えられる。また本土坑の構築時期は出土遺物から10世紀初頭に比定される。

#### SK09(第34・35図/P L 14・22)

**位置** 2区北側中央。

**重複関係** 確認面ではSK08を切る。SK28・36・43の上に構築されている。

**遺存状態** 良好。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸162cm、短軸99cm、確認面からの深さ45cmを測る。

**主軸方位** N-57°-E。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** 一部皿状を呈するがほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片14点(116.8g)(うち土師器・須恵器片6点(67g))、石器(剥片石器含む)1点(0.7g)、鉄滓1点(182g)である。須恵器1点、鉄滓1点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から小鍛冶に関連した性格をもつものと考えられる。

#### SK10(第34・35図/P L 14・23)

**位置** 2区北側中央。

**重複関係** 確認面での重複は認められなかったが下位確認面でSK32と重複することが判明し、これに切られている。またSK35の上に構築されている。

**遺存状態** 北壁の一部が調査区外に伸びているが、全体的に遺存状態は良好。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸174+cm、短軸135cm、確認面からの深さ36cmを測る。

**主軸方位** N-26°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片24点(232g)(うち土師器・須恵器片3点(8g))、石器(剥片石器含む)47点(1.471g)、鉄滓2点(126g)である。そのうち鉄滓2点を図示し得た。

**備考** 本土坑は出土遺物から小鍛冶に関連した性格をもつものと考えられる。

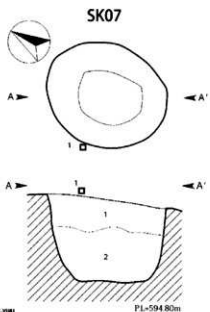
#### SK11(第36図/P L 14)

**位置** 2区北側中央。

**重複関係** なし。

**遺存状態** 良好。

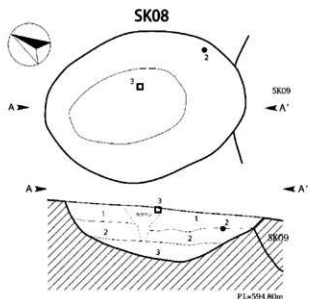
**覆土** 単層である。暗褐色上層で粘性なし、締まりややあり。ローム粒を少量、軽石粒を微量含んでいる。



SK07 土坑説明

AA'

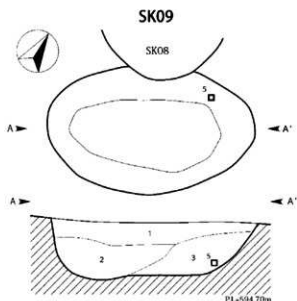
1. 平面図上層：粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒を多量、炭化粒を含む。
2. 断面図上層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を微量、炭化粒を含む。



SK08 土坑説明

AA'

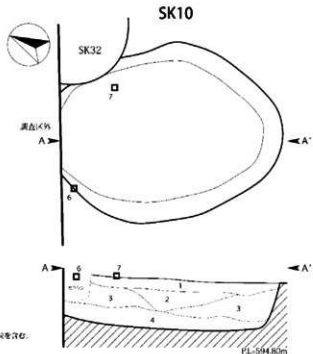
1. 平面図上層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒・炭化粒を多量含む。
2. 断面図上層：粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒・炭化粒を少量含む。
3. 断面図下層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を微量含む。



SK09 土坑説明

AA'

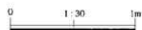
1. 平面図上層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒(φ=1cm以下)・炭化粒を含む。
2. 断面図上層：粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒を微量含む。
3. 断面図下層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を含み、軽石粒を微量含む。



SK10 土坑説明

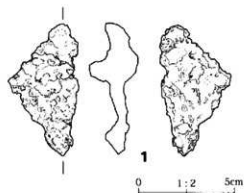
AA'

1. 平面図上層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・軽石粒・炭化粒を少量含む。
2. 断面図上層：粘性なし、締まりややなし。ローム粒・軽石粒を微量含む。
3. 断面図下層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒を含む。
4. 断面図上層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・軽石粒をやや多く含む。

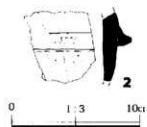


第34図 SK07~10実測図 (1/30)

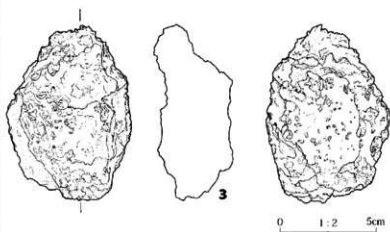
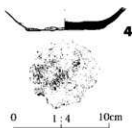
SK07



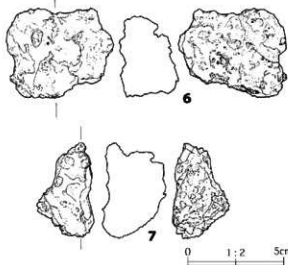
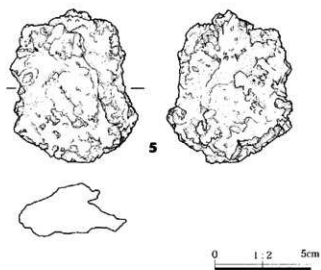
SK08



SK09



SK10



第35図 平安土坑出土遺物実測図1

**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸90cm、短軸75cm、確認面からの深さ36cmを測る。

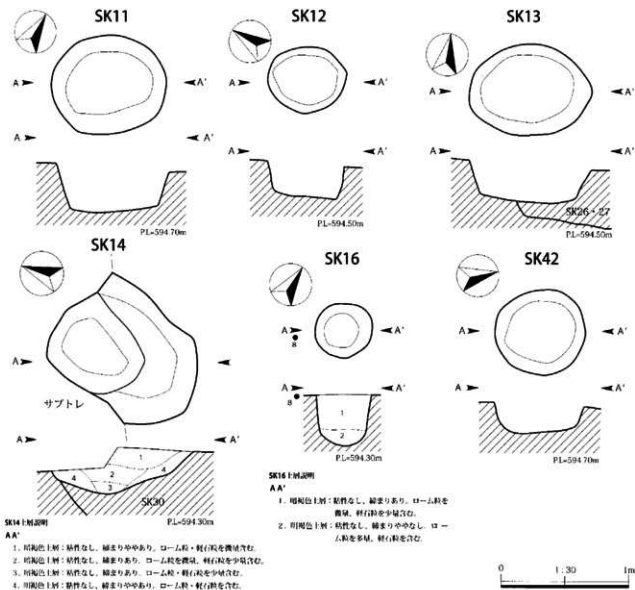
**主軸方位** N-57°-E。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。北東側から南西側に傾斜している。

**遺物** 総出土量は土器片5点(20g)のみで図示するには至らなかった。

**備考** 本土坑は上位平安面で確認されているので平安時代あるいはそれ以降の所産と考えられる。



第36図 SK11～14・16・42実測図 (1/30)

SK12 (第36図/P.L.15)

位置 2区北側中央。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。暗褐色土層で粘性なし、締まりややあり。

ローム粒を少量、軽石粒を微量含んでいる。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸68cm、短軸51cm、確認面からの深さ38cmを測る。

主軸方位 N-24°-W。

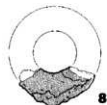
壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。北側から南側に傾斜している。

遺物 なし。

備考 本土坑もSK11と同様に上位平安面で確認されているので平安時代あるいはそれ以降の所産と考えられる。

SK16



第37図 平安土坑出土遺物実測図2

SK13 (第36図/P L15)

位置 2区北側中央。

重複関係 確認面での重複はないがSK27の上に構築されている。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。暗褐色土層に粘性なし、締まりややあり。ローム粒を少量、軽石粒を微量含んでいる。

平面形と規模 平面形は楕円形を呈する。規模は長軸98cm、短軸72cm、確認面からの深さ34cmを測る。

主軸方位 N-80°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦で西側から東側へ緩やかに傾斜している。

遺物 総出土量は土器片2点(14g)(うち土師器・須恵器片1点(4g))であるが、図示するには至らなかった。

SK14 (第36図/P L15)

位置 2区南側中央。

重複関係 確認面では認められなかったがSK30・45の上に構築されている。

遺存状態 トレンチでの検出だったため、北側の掘り込み面を消失しているが、遺存状態は良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は不整形円形を呈する。規模は長軸114cm、短軸78cm、確認面からの深さ38cmを測る。

主軸方位 N-27°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片7点(27g)(うち土師器・須恵器片2点(3g))、石器(剥片石器含む)9点(174g)であるが図示するには至らなかった。

SK16 (第36・37図/P L15・22)

位置 2区南側中央。

重複関係 確認面での重複は認められなかったが、SK20の上に構築されており、断面でSK20を切っているのが確認された。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は円形を呈する。規模は長軸45cm、短軸42cm、確認面からの深さ39cmを測る。

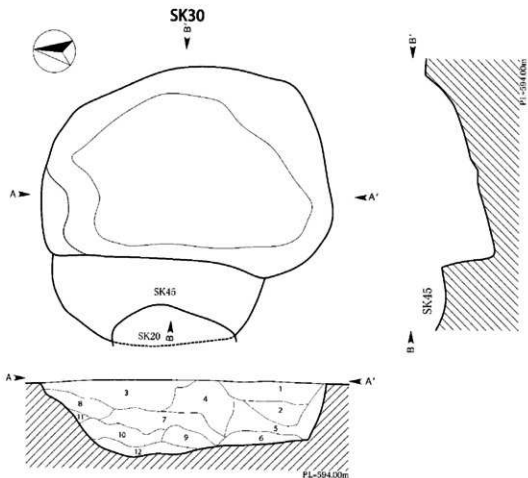
主軸方位 N-80°-W。

壁面 やや外傾して立ち上がっている。

底面 皿状を呈している。

遺物 総出土量は土器片1点(4g)、石器(剥片石器含む)1点(56g)、羽口片1点(45g)である。そのうち羽口片1点を図示し得た。

備考 羽口片は本土坑からの出土ではないが、同一確認面で検出されたことから本土坑出土遺物として取り扱った。

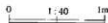


SK30 1 解説図

AA'

1. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒を含み、軽石粒を少量含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）を含み、軽石粒を少量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{cm}$ ）と軽石粒（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）を含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややなし。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 5\text{mm}$ ）を含み、軽石粒を少量含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）と、軽石粒を含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。全体の50～60%がローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）からなる。
7. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{mm}$ ）を多数、軽石粒を含む。
8. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）を含み、軽石粒を少量含む。
9. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。全体の90%がローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{cm}$ ）からなる。
10. 暗褐色土層：粘性なし、締まりなし。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 4\text{cm}$ ）を含み、黒色ブロックがまばらに入る。
11. 暗褐色土層：粘性なし、締まりあり。ローム粒を微量含む。
12. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり。ローム粒・ロームブロックからなる。

第38図 SK30実測図 (1/40)



SK30 (第38図/P L 15)

位置 2区南側中央。

重複関係 確認面ではSK45と重複し、これを切っている。上面でSK14・15が構築されている。

遺存状態 良好。

覆土 大部分がロームブロックを含む層位で占められている。

平面形と規模 平面形は不整楕円形を呈する。規模は長軸450cm、短軸200+cm、確認面からの深さ77cmを測る。

主軸方位 N-33°-W。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 凸凹しており、東側から西側へ傾斜している。

遺物 総出土量は土器片16点（139g）、鉄製品1点（24.7g）であるが図示するには至らなかった。

備考 本土坑は遺構確認面では陥し穴の可能性が高いと考えたが、平断面形態・堆積土層から風倒木痕と判断した。

SK42 (第36図/P L 16)

位置 2区西側中央北寄り。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 単層である。

平面形と規模 平面形は円形を呈する。規模は長軸72cm、短軸68cm、確認面からの深さ24cmを測る。

主軸方位 N-15°-E。

壁面 外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 なし。

(5) 陥し穴

SK01 (第39図/P L 16)

位置 1区北東側。

重複関係 なし。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示しているが、最終埋没土である1~3層は明褐色土である。

平面形と規模 平面形は上面が楕円形、下面が隅丸長方形を呈する。規模は長軸282cm、短軸175cm、確認面からの深さ162cmを測る。

主軸方位 N-29°-W (上面)・N-50°-W (下面)。

壁面 底面付近はハングし、葉研状に外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦であるが、南東側に斜交ピットや溝状の掘り込みが検出されている。

遺物 総出土量は土器片26点(281g)、石器(剥片石器含む)47点(3,926.6g)であるが、図示するには至らなかった。

備考 本土坑は平断面形態、堆積土層から陥し穴と判断した。

SK02 (第40図/P L 16)

位置 1区南西隅。

重複関係 なし。

遺存状態 西側が調査区外に延びており、約3分の1の検出である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示しているが、最終埋没土である1・2層は明褐色土である。

平面形と規模 平面形は隅丸長方形に近い楕円形を呈すると思われる。規模は長軸136+cm、短軸140+cm、確認面からの深さ152cmを測る。

主軸方位 N-81°-W。

壁面 底面付近はハングし、壁は葉研状に外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦であるが東端に斜交ピットが検出されている。

遺物 総出土量は土器片3点(21g)、石器(剥片石器含む)4点(219g)であるが、図示するには至らなかった。

備考 本土坑は平断面形態、堆積土層から陥し穴と判断した。

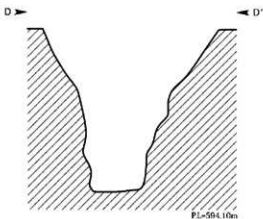
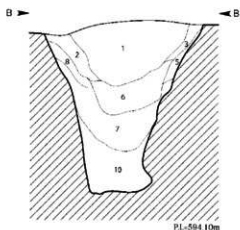
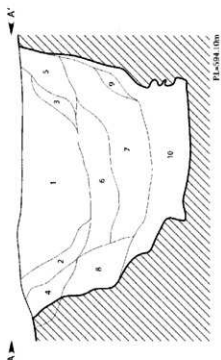
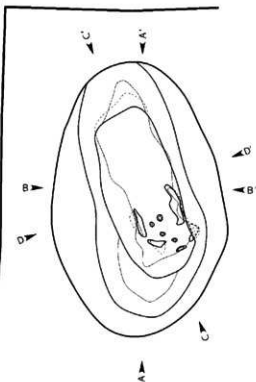




SK01

調査区画

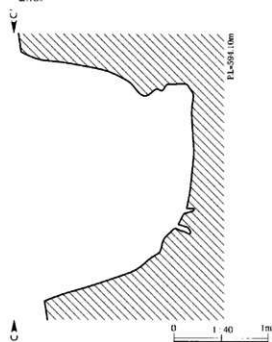
調査区画



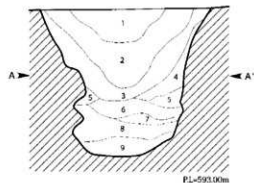
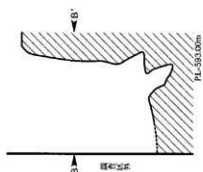
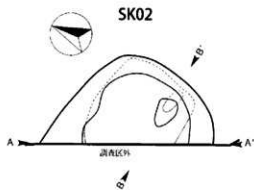
SK01土層説明

AA'BB'

1. 埋戻土層：粘性なし、締まりややあり、ローム状・軽石層（ $\phi$ -1cm大）を多量含む、炭化粒を含む。
2. 埋戻土層：粘性なし、締まりややあり、ローム状・軽石層（ $\phi$ -1cm大）を含む。
3. 埋戻土層：粘性なし、締まりややあり、ローム状・軽石層（ $\phi$ -1cm大）を少量含む。
4. 埋戻土層：粘性なし、締まりあり、ローム状を少量含む。
5. 埋戻土層：粘性なし、締まりややあり、ローム状を少量含む、軽石層を少量含む。
6. 埋戻土層：粘性なし、締まりややあり、ローム状・軽石層を少量含む、炭化粒を含む。
7. 埋戻土層：粘性なし、締まりややあり、ローム状・軽石層を少量含む、軽石層（ $\phi$ -1cm大）を炭化粒を含む。
8. 埋戻土層：粘性なし、締まりややあり、ローム状・軽石層を少量含む、軽石層（ $\phi$ -1cm大）を炭化粒を含む。
9. 埋戻土層：粘性なし、締まりややあり、ローム状を多量に含む。
10. 埋戻土層：粘性なし、締まりあり、ローム状・軽石層（ $\phi$ -1cm大）を含む、炭化粒を少量含む。



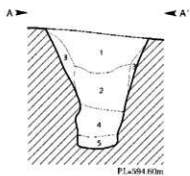
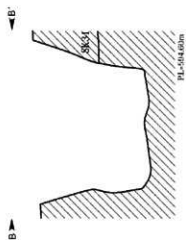
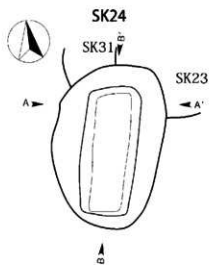
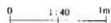
第39図 SK01実測図 (1/40)



#### SK02上層説明

##### AA'

1. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石粒（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 人）・炭化粒を含有。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石粒（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 人）・炭化粒を多量に含有。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒を含有。
4. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒を多量に含有。（二次崩壊土）
5. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。その70%がローム粒から成る。（二次崩壊土）
6. 暗褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒を多量。炭化粒を少量含有。
7. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 人）を少量含有。
8. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 人）・炭化粒を含有。
9. 明褐色土層：粘性あり。締まりあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 人）・軽石粒・炭化粒を多量に含有。



#### SK24上層説明

##### AA'

1. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 人）・軽石粒を多量。炭化粒を含有。
2. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒を含有。軽石粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 人）を少量含有。
3. 明褐色土層：粘性なし。締まりあり。ローム粒・軽石粒を多量含有。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒・軽石粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 人）を少量含有。
5. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石粒を含有。



第40図 SK02・24実測図 (1/40)

SK24 (第40図/P L 17)

位置 2区西側中央。

重複関係 確認面でSK23・31と重複し、これらを切っている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示しているが、最終埋没上である1層はロームブロックを多量に含んだ明褐色土である。

平面形と規模 平面形は上面が不整形円形、下面が長方形を呈する。規模は長軸170cm、短軸114cm、確認面からの深さ120cmを測る。

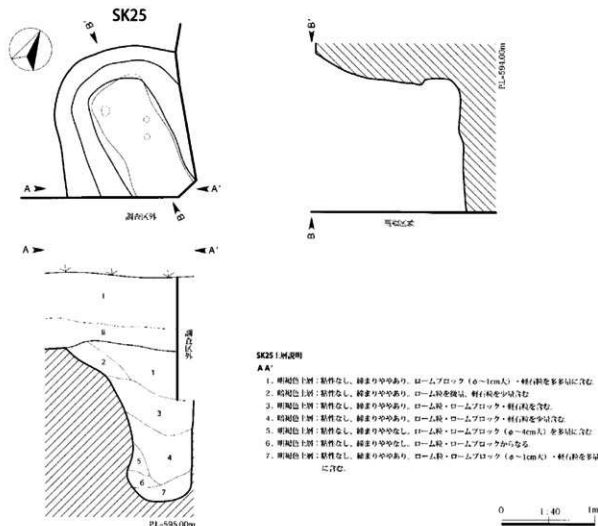
主軸方位 N-13°-E。

壁面 底面付近は一部ハングしており、薬研状に外傾して立ち上がっている。

底面 やや起伏がある。

遺物 総出土量は土器片7点(94.5g)(うち土師器・須恵器片1点(0.5g))、石器(剥片石器含む)5点(118g)であるが、図示するには至らなかった。

備考 本土坑は平断面形態、堆積上層から陥し穴と判断した。



第41図 SK25実測図(1/40)

## SK25 (第41・42図/P L 17・23)

## SK25

位置 2区南側中央壁沿い。

重複関係 なし。

遺存状態 南東側が調査区外に延びており、約2分の1の検出である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示しているが、最終埋没上の1層はロームブロックを多量に含んだ明褐色土である。

平面形と規模 平面形は上面が楕円形、下面が隅丸長方形を呈すると思われる。規模は長軸148+cm、短軸150+cm、確認面からの深さ156cmを測る。

主軸方位 N-53°-W。

壁面 底面付近はハングしており、壁は葉研状に外傾して立ち上がっている。

底面 多少の起伏はあるもののほぼ平坦である。底面にピットが検出されている。

遺物 総出土量は土器片15点(187g)(うち上師器・須恵器片5点(17g))、石器(剥片石器含む)15点(784g)である。そのうち須恵器1点を図示し得た。

備考 本土坑は平断面形態、堆積土層から陥し穴と判断した。



第42図 SK25出土遺物実測図

## SK32 (第43図/P L 17)

位置 2区北側中央壁沿い。

重複関係 確認面ではSK29と重複し、これを切っている。断面で上面に構築されているSK10を切っていることが確認された。

遺存状態 北側が調査区外へ延びており約3分の1の検出である。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

平面形と規模 平面形は上面が楕円形、下面が隅丸長方形を呈すると思われる。規模は長軸141+cm、短軸77+cm、確認面からの深さ126cmを測る。

主軸方位 N-44°-E。

壁面 南壁は垂直気味に、東壁は葉研状にやや外傾して立ち上がっている。

底面 ほぼ平坦である。

遺物 総出土量は土器片10点(43g)(うち上師器・須恵器片7点(18g))、石器(剥片石器含む)3点(54g)であるが、図示するには至らなかった。

備考 本土坑は平断面形態、堆積土層から陥し穴と判断した。

## SK41 (第43図/P L 17)

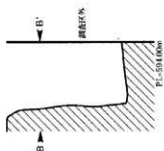
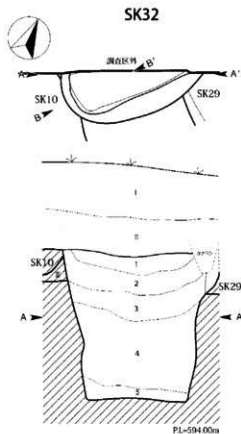
位置 2区西側中央。

重複関係 確認面ではSK33・46と重複し、これらを切っている。

遺存状態 良好。

覆土 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示しているが、最終埋没土である1層はロームブロックを含む明褐色土である。

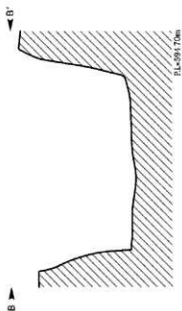
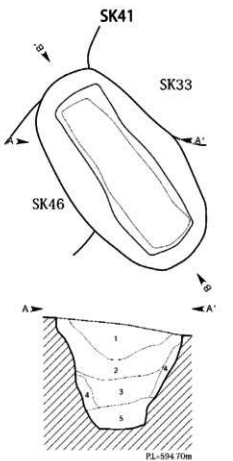
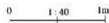
平面形と規模 平面形は上面が楕円形、下面が長方形を呈する。規模は長軸228cm、短軸126cm、確認面からの深さ122cmを測る。



**SK32土層説明**

**AA'**

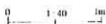
1. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 入）・炭化粒を含み、軽石粒を微量含む。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{cm}$ 入）を多量、軽石粒を含む。
3. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石粒・炭化粒を少量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 入）を微量、軽石粒を含む。
5. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{cm}$ 入）を多量に含む。



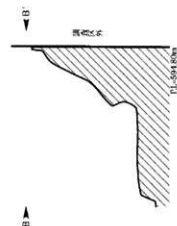
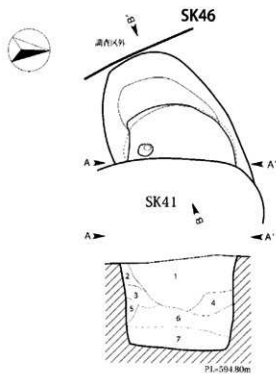
**SK41土層説明**

**AA'**

1. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ 入）・軽石粒（ $\phi \sim 2\text{cm}$ 入）を多量に含む。
2. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・軽石粒を少量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒を含み、軽石粒を少量含む。
4. 明褐色土層：粘性なし。締まりややなし。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 5\text{mm}$ 入）を多量、軽石粒を微量含む。
5. 明褐色土層：粘性なし。締まりややあり。ローム粒・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{cm}$ 入）・軽石粒を多量に含む。

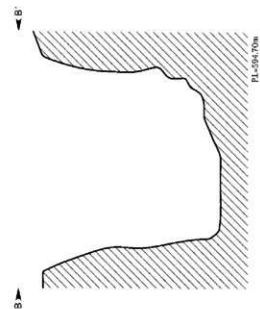
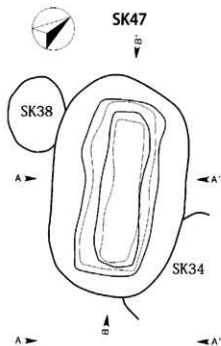


第43図 SK32・41実測図 (1/40)



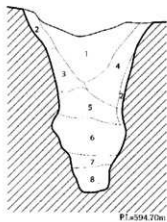
SK46 I 地説明  
A A'

1. 明褐色土層：粘性なし、締まりあり、ローム殻・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{cm}$ ）を多量、軽石砂を含む。
2. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）を少量、軽石砂を微量含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・ロームブロック（ $\phi \sim 2\text{cm}$ ）を含む、軽石砂を微量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）・軽石砂を少量含む。
5. 明褐色土層：粘性なし、締まりややなし、ローム殻・ロームブロックからなる。
6. 明褐色土層：粘性なし、締まりややなし、ローム殻・ロームブロックを含む、軽石砂を少量含む。
7. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・ロームブロック・軽石砂を少量含む。



SK47 I 地説明  
A A'

1. 明褐色土層：粘性なし、締まりややなし、ローム殻・軽石砂を多量に含む。
2. 明褐色土層：粘性なし、締まりややなし、ローム殻・軽石砂を含む。
3. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・ロームブロック・軽石砂を少量含む。
4. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻を含む、ロームブロック・軽石砂を少量含む。
5. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・軽石砂を微量含む。
6. 暗褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{cm}$ ）を少量、軽石砂を微量含む。
7. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・ロームブロック（ $\phi \sim 1\text{cm}$ ）を含む、軽石砂を微量含む。
8. 明褐色土層：粘性なし、締まりややあり、ローム殻・ロームブロック（ $\phi \sim 3\text{cm}$ ）・軽石砂を多量に含む。



Pl. 50/470m

第44図 SK46・47実測図 (1/40)

0 1.40 1m

**主軸方位** N-7°-W。

**壁面** 東西壁は葉研状に、南北壁は外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片17点(201g)、石器(剥片石器含む)6点(697.4g)であるが、図示するには至らなかった。

**備考**

SK46 (第44図/P L 17)

**位置** 2区西側中央壁寄り。

**重複関係** SK41に切られる。

**遺存状態** 約3分の2遺存している。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は楕円形を呈すると思われる。規模は長軸173cm、短軸126cm、確認面からの深さ100cmを測る。

**主軸方位** N-70°-E。

**壁面** 長軸方向は底面付近がフラスコ状にハングし外傾して立ち上がっている。短軸方向は直立気味にやや外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片7点(132g)、石器(剥片石器含む)15点(3,005g)であるが、図示するには至らなかった。

**備考** 本土坑は平断面形態、堆積土層から陥し穴と判断した。

SK47 (第44図/P L 17)

**位置** 2区西側北寄り。

**重複関係** 確認面ではSK34・38と重複し、これらを切っている。また1号焼土遺構とは平面的に重なり、本土坑が埋没したかあるいはその過程で二次掘削したものと考えられる。

**遺存状態** 良好。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は上面が楕円形、下面が長方形を呈する。規模は長軸227cm、短軸141cm、確認面からの深さ188cmを測る。

**主軸方位** N-48°-W。

**壁面** 底面よりやや上でハングしており、短軸方向は葉研状、長軸方向は外傾して立ち上がっている。

**底面** 北側半分は凸凹しているが南側半分はほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片42点(714g)、石器(剥片石器含む)19点(2,552g)であるが、図示するには至らなかった。

**備考** 本土坑は平断面形態、堆積土層から陥し穴と判断した。

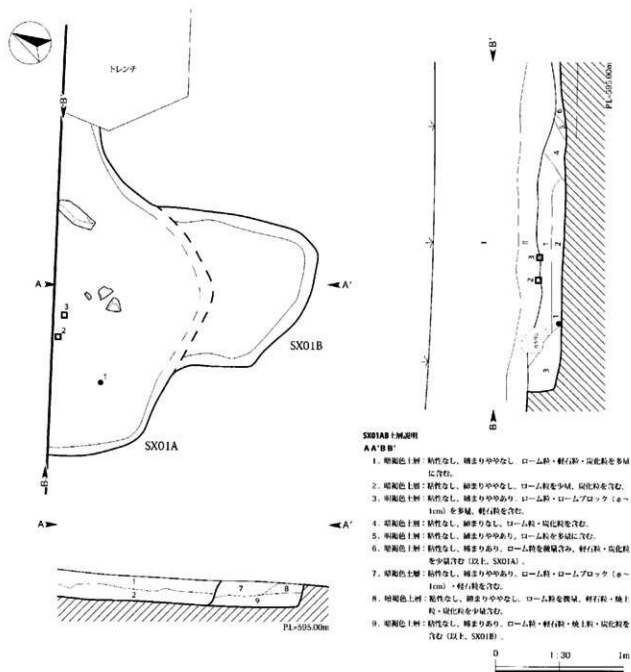
## (5) 不明遺構

SX01AB

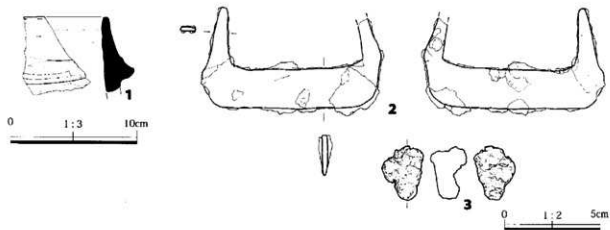
SX01A (第45・46図/P L 18・23)

**位置** 2区北側中央壁沿い。

**重複関係** 確認面ではSX01Bと重複し、SX01Bを切っている。またSK29の上に構築されている。



第45図 SX01AB 実測図 (1/30)



第46図 SX01A 出土遺物実測図



**遺存状態** 大部分が調査区外に伸びており、部分検出である。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は不整な隅丸（長）方形を呈すると考えられる。規模は東西軸方向で255cm+、南北軸方向で148cm+、確認面からの深さは20cmを測る。

**主軸方位** ほぼ真北。東西軸はN-90°-E。

**壁面** やや外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** 総出土量は土器片39点（190.5g）（うち土師器・須恵器片30点（125g））、石器（剥片石器含む）60点（3,047g）、鉄製品1点（41g）、鉄滓1点（19.7g）である。そのうち須恵器1点、鉄製品1点、鉄滓1点を図示し得た。

**備考** 本遺構は当初住居跡と考えていたが、カマドをはじめとする諸施設や柱穴等、住居跡と判断する材料が見当たらなかったため不明遺構とした。調査区外の東壁にカマドが付帯するような平面形態が見取れることから住居跡である可能性が高い。また構築時期に関しては出土遺物から10世紀初頭に比定される。

#### SX01B（第45図／P L 18）

**位置** 2区北側中央壁沿い。

**重複関係** 確認面ではSX01Aと重複し、SX01Aに切られている。またSK43の上に構築されている。

**遺存状態** SX01Aにきられており、約2分の1の検出である。

**覆土** 暗褐色土を基調とし、自然堆積を示している。

**平面形と規模** 平面形は不整楕円形を呈すると思われる。規模は長軸127cm+、短軸120cm、確認面からの深さ20cmを測る。

**主軸方位** N-23°-W。

**壁面** 外傾して立ち上がっている。

**底面** ほぼ平坦である。

**遺物** なし。

**備考** 本遺構はSX01Aと深さが一緒で断面で切り合いを確認するまでは同一遺構と考えていた。土坑と考えた方が妥当であろう。

## 第4節 遺構外出土遺物

ここでは調査区表土及び遺構内の流れ込み遺物、トレンチ出土遺物を一括して取り扱う。遺構外出土遺物は平安時代のものがほとんどだが、縄文時代前期前半土器片を1点含んでおり、周辺に当該期の集落の存在を推測させる。

### 1. 土器

以下のⅧ群に大別する。

第1群 縄文時代早期の上器を一括する（第47図1～第48図47）。

第1類 押型文土器（第47図1～5）

a種 山形押型文を施すもの（第47図1～4）。

1・2と3・4はそれぞれ同一個体。前者は細く鋭角な山形を密に施すのに対して、後者は山・谷部に丸みをもち疎らな施文である。

b種 楕円押型文・平行押型文を組み合わせて施すもの(第47図5)。

1点だけの出土であるが、3条の平行線の条間に楕円文を配している。類例は意外と少ない。

## 第2類 沈線文土器(第47図6~20)

a種 貝殻腹縁文を施すもの(第47図6~18)。

本調査区で13点出土している。貝殻腹縁文のみ施文のもの(9・10)と沈線区画内に貝殻腹縁文を配するもの(9・10以外)に大きく分けることができ、さらに後者は沈線区画に対して斜位に配すもの(7・8・11~15)と沈線と平行に配するもの(6・16~18)に分けることができる。沈線は基本的には貝殻を使って施文しているものが多く認められ(11・12など)、V字状あるいは重三角状の区画文を構成している。

b種 ヘラ描沈線を施すもの(第47図19・20)。

a種以外の沈線文をここに入れた。2点のみで19は斜位・横位沈線、20は弧状沈線を施している。

## 第3類 条痕文土器(第47図21~第48図47)

a種 外面あるいは内外面に条痕文を施すもの(第47図21~41)。

粗い条痕のものや細密のもの、内面はナデあるいは摩耗してものまでバラエティーがあるが斜位~横位を全面に施している。c種の体部片を含んでいる。

b種 外面に横位爪形文を重畳させるもの(第48図42)。

1点のみの出土である。爪あるいはハマグリなどヒダのない貝殻で細かく丁寧に施されており、東海の影響を受けている可能性がある。

c種 a種のうち、口縁部外面に絡条体圧痕を施すもの(第48図43~47)。

横位・縦位・斜位(X字状)などバラエティーがある。

## 第II群 縄文時代前期の土器を一括する(第48図48~第51図192)。

### 第1類 花積下層式(第48図48~59)

0段多条縄文を多用して縦位羽状構成のもの(48~55)、横位羽状構成のもの(56~58)、燃糸側面圧を施すもの(59)に分けることができる。

### 第2類 ニツ木・閉山式(第48図60~65)

口縁部文様帯は瘤状突起と平行沈線文、体部は多段短足ループ文という構成である。

### 第3類 黒浜・有尾式(第48図66~75)

口縁部文様帯は平行沈線文による菱形状モチーフあるいは横位施文、無節縄文を用いていること特徴的である。体部文様はバラエティーがあるため第4類にまとめた。

### 第4類 前期前半土器(第48図76~第49図101)

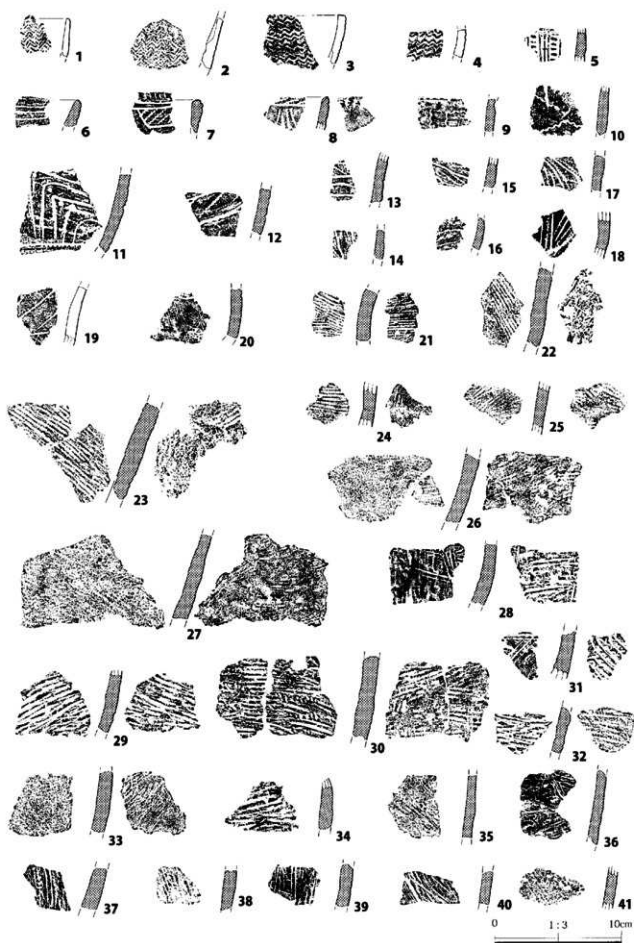
第2・3類に分類できないものをここに入れた。斜縄文、横位羽状構成、菱形羽状構成(82・86・90・100など)、絡線文(結節回転縄文)を施すもの(92~99)に分けることができる。

### 第5類 諸磯a式(第49図102~第51図182)

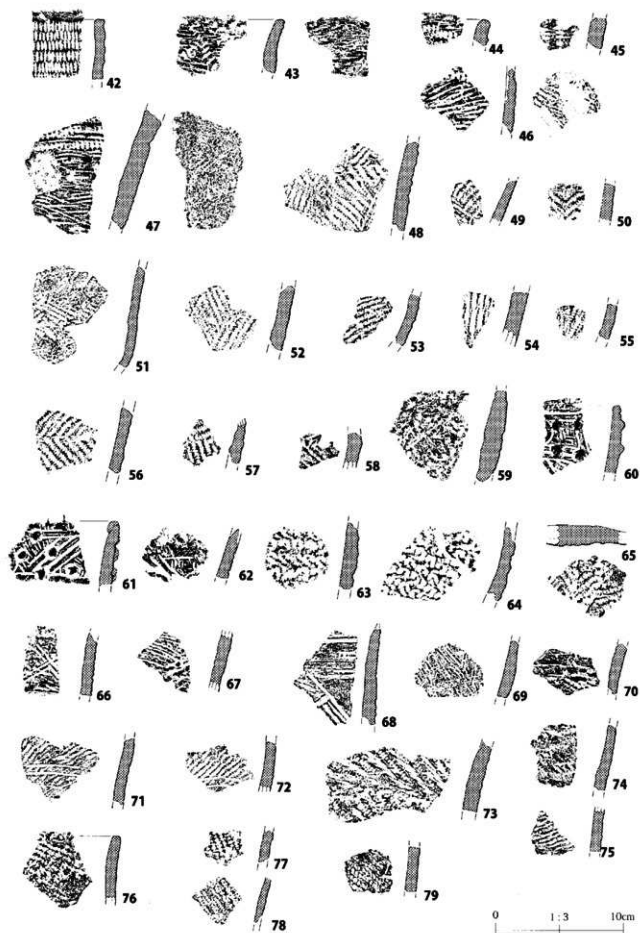
半截竹管による連続爪形文、平行沈線文と円形刺突文を組み合わせて肋骨文や米字文を構成しているものが大半である。中には歯齒状T具による押し引き連続刺突施文のもの(106)も見受けられる。

### 第6類 諸磯b式(第51図183~191)

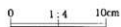
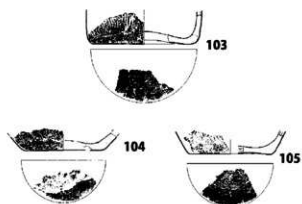
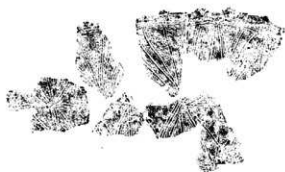
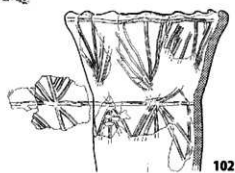
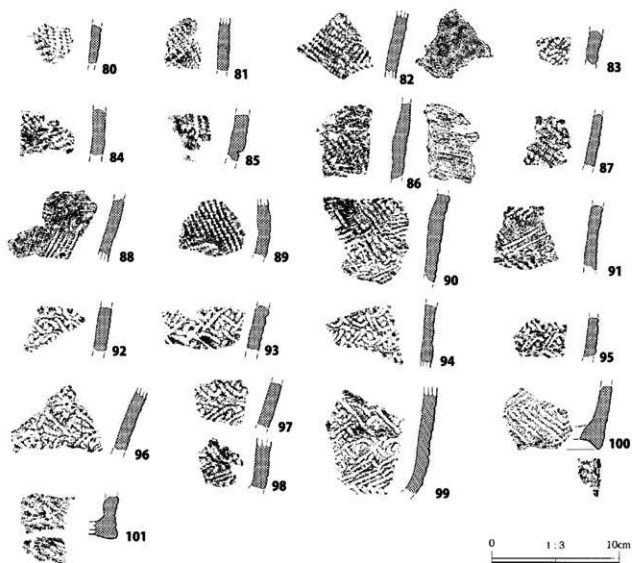
数は少ないが、有刻浮線文を貼付するもの(183~185)や平行沈線文を重ねて施文するもの



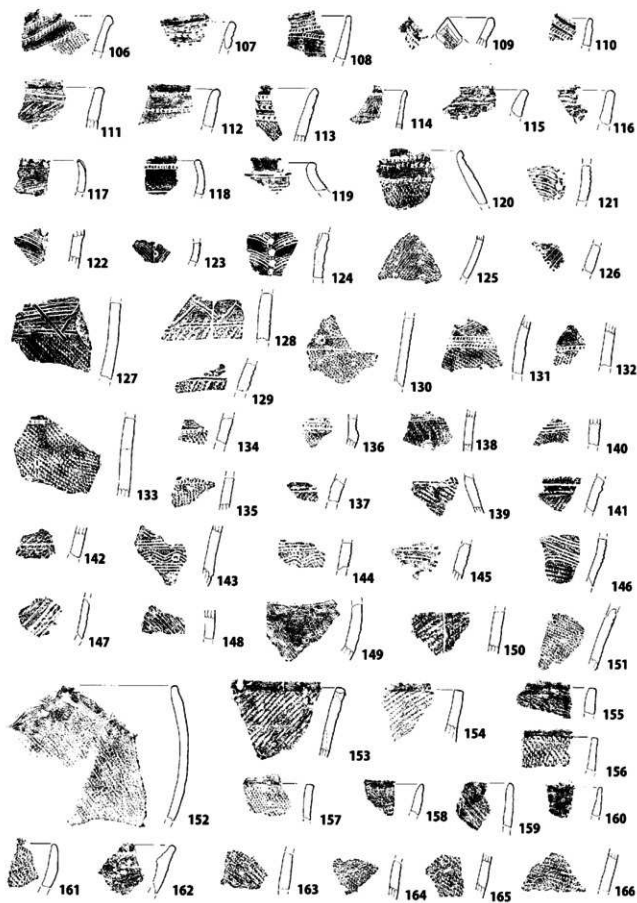
第47图 遺構外出土遺物実測図1



第48図 遺構外出土遺物実測図2

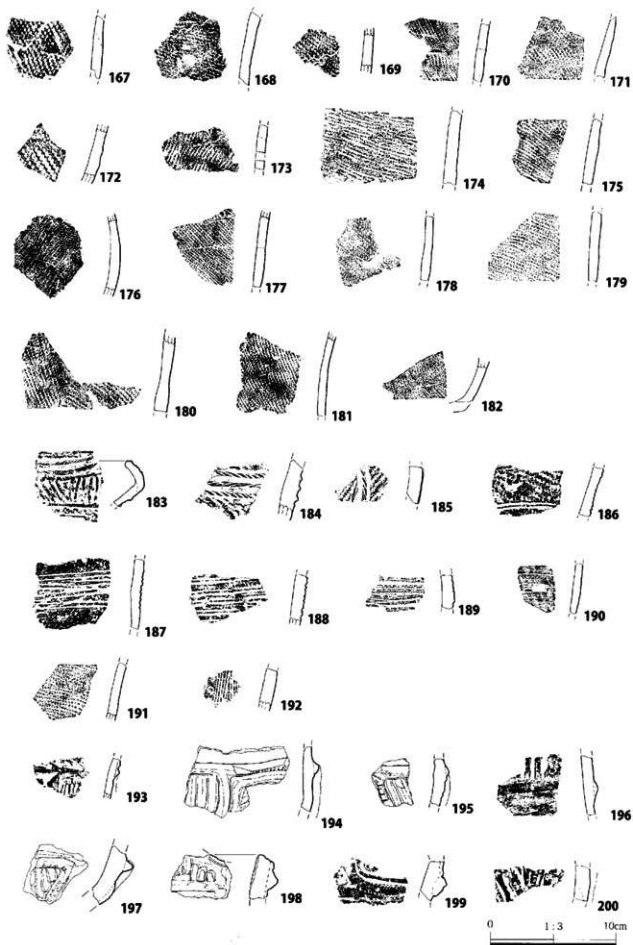


第49回 遺構外出土遺物実測図3

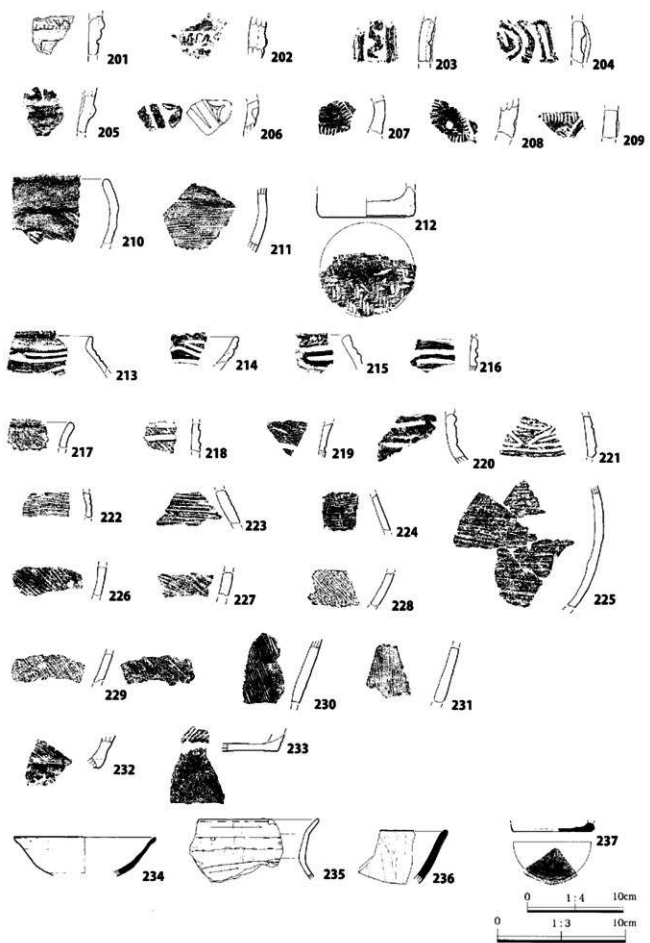


0 1:3 10cm

第50図 遺構外出土遺物実測図4

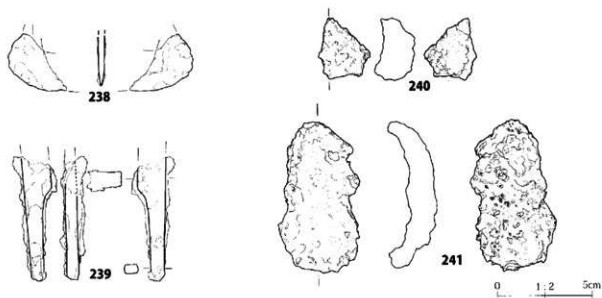


第51图 通桥外出土遗物实测图5



第52図 遺構外出土遺物実測図6





第53図 遺構外出土遺物実測図7

(186～190)に分けることができる。

第7類 諸磯c式 (第51図192)

数点出土しているが1点のみ掲載した。縦位条線と円形刺突文を施文している。

第III群 縄文時代中期の土器を一括する (第51図193～第52図209)。

193が勝坂1式、194～209が勝坂3式に比定される。

第IV群 縄文時代後期土器を一括する (第52図210～212)。

210は称名寺式併行の加曾利E式系土器、211は体部に横位条線を施す鉢か、212は底面に刺痕を残す底部である。

第V群 弥生時代前期末～中期前半の土器を一括する (第52図213～233)。

浮線文あるいは沈線を用いて工字文あるいは変形工字文を施す鉢あるいは浅鉢 (213～216)、細かい斜位条痕を地文とし幅広沈線を施文する甕 (217～219・230・231)、条痕は粗密あるが胴部に横位、胴部に斜位条痕を施し、幅広沈線で変形工字文などを施文する壺 (220～229) が認められる。器種の特  
定は曖昧である。

第VI群 平安時代の土師器・須恵器を一括する (第52図234・235)。

第VII群 中世以降の陶磁器を一括する (第52図236・237)。

## 2. 金属製品

(1) 鉄製品 (第53図238・239)

238は芋引金具の刃部片である。刃部と差し込み部の間に段を有するのが特徴的で、SX01出土例 (第46図2) と共通する。239は厚みがあり、鑿や鉋など刃物の基部と考えられる。目釘が認められる。

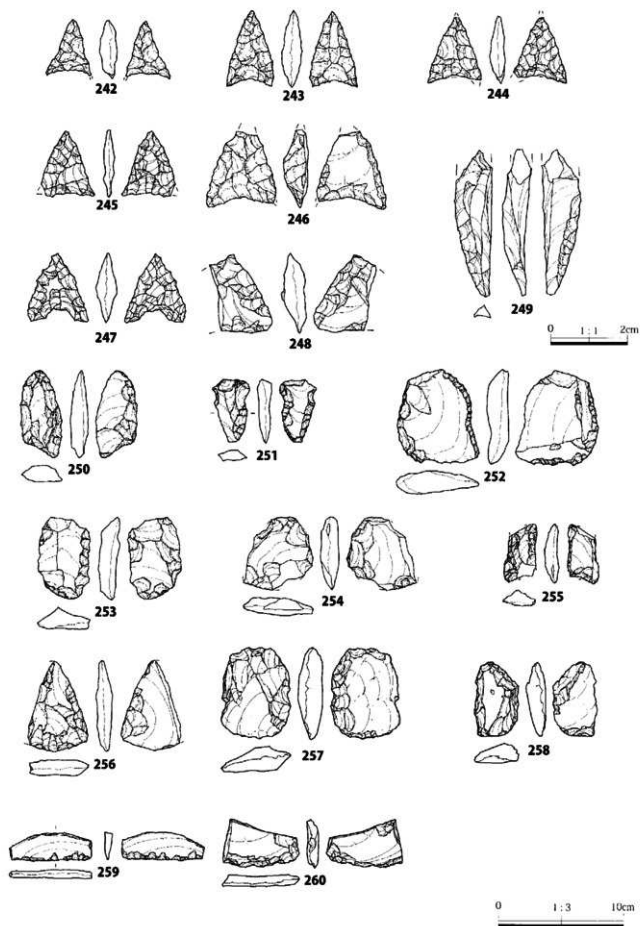
(2) 鉄滓 (第53図240・241)

本調査区では遺構内外から多数の鉄滓が出土している。240・241とも碗状を呈している。

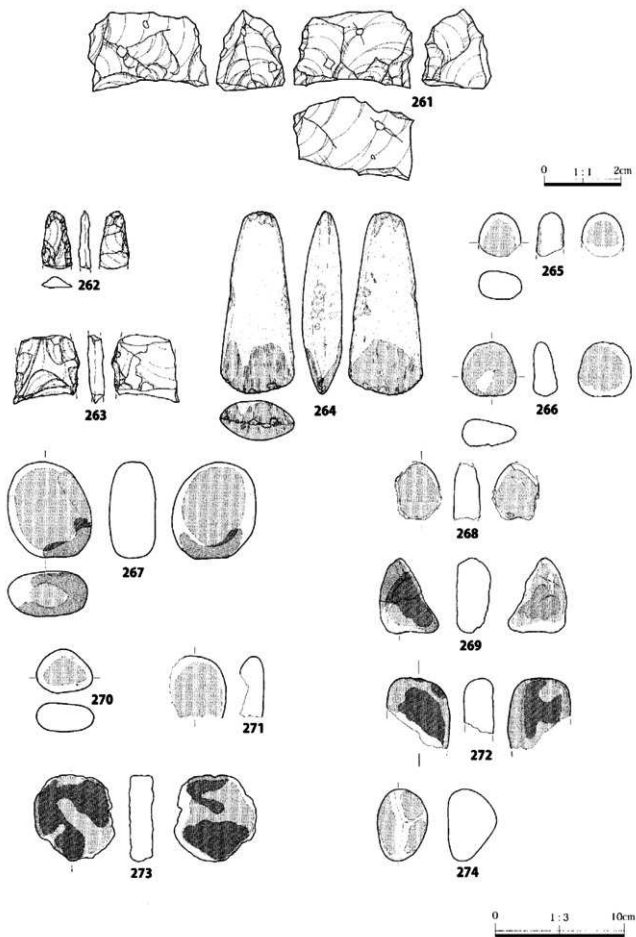
## 3. 石器

(1) 剥片石器類

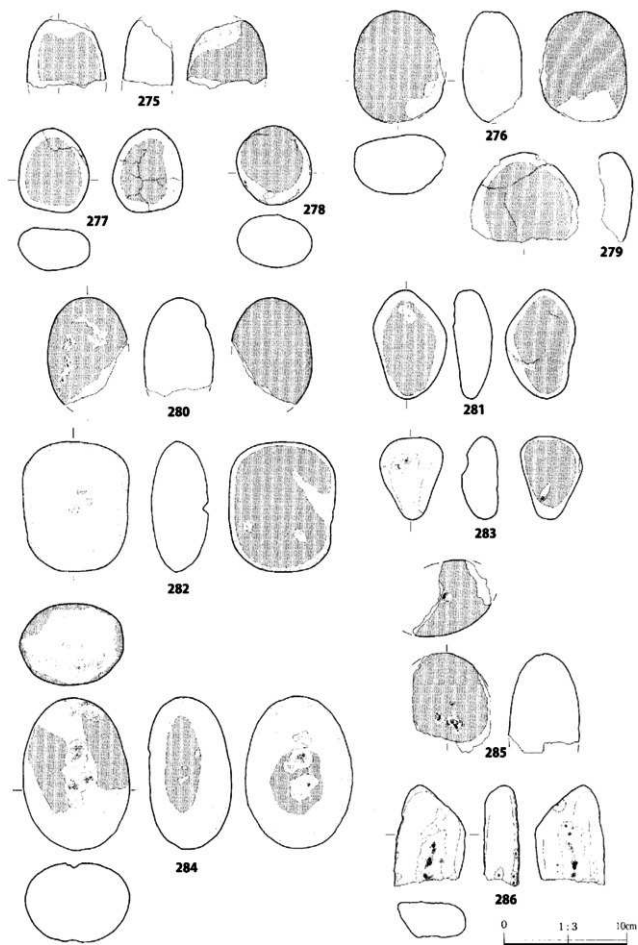
- a. 石鏃 (第54図242~248)  
 凹基長形 (242~244) あるいは三角 (245~247) で占められる。242はいわゆる飛行機鏃。248は未成品。
- b. 削器 (第54図249)  
 1点のみで石鏃の未成品の可能性がある。
- c. 尖頭器 (第54図250)  
 1点のみである。平衡面形・調整の在り方から、尖頭器の最終形態と考えられる。
- d. 石匙 (第54図251)  
 1点のみで、縦型で対峙部に抉りを持っており、威信材 (非実用品) の可能性がある。
- e. 搔器 (スクレイパー) (第54図252~260)  
 9点出土している。ラウンドスクレイパー (252~258) とエンドスクレイパー (259・260) に分けることができる。
- f. 石核 (第55図261)
- (2) 打製石斧類 (第55図262・263)  
 2点認められた。262はスクレイパーの可能性もある。
- (3) その他の石器 (第55図264)  
 磨製石斧1点である。
- (4) 礫石器類 (第55図265~第57図293)
- a. 磨石 (第55図265~第56図279)
- b. 凹石 (第56図286・第57図287)
- c. 蔽石 (第57図291)
- d. 複合石器 (第56図280~285・第57図288~290)  
 上記 a~c は単独での使用は少なく、組み合わせて使われた痕跡が圧倒的に多い。特に磨石をベースにしているものが多く、磨石+凹石 (280~285)、磨石+蔽石 (289・290) がほとんどで凹石+蔽石 (288) が1点だけ認められた。
- e. 石皿 (第57図292・293)



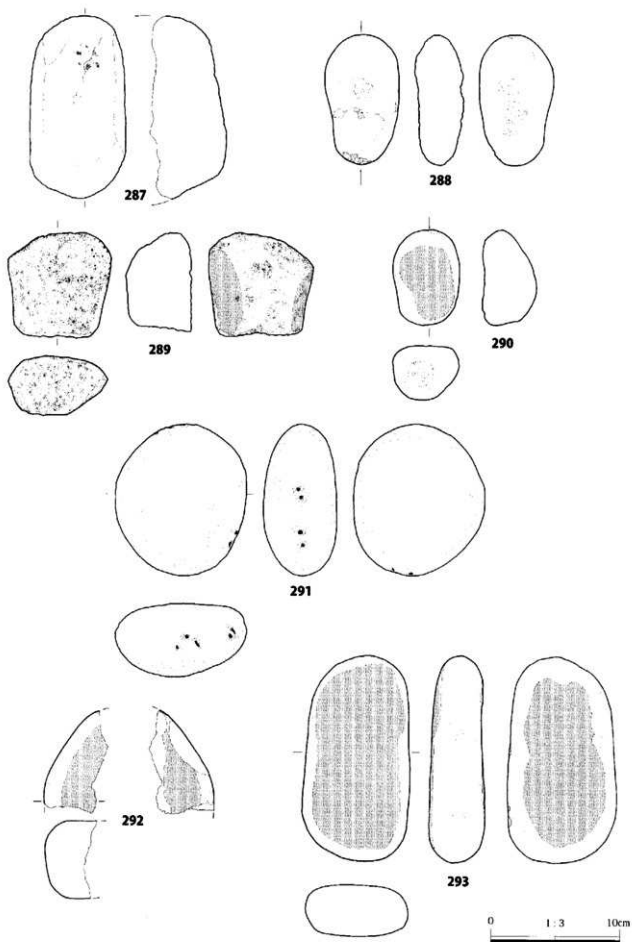
第54图 遺構外出土遺物実測図8



第55図 遺構外出土遺物実測図9



第56图 遺構外出土遺物実測図10



第57図 遺構外出土遺物実測図11

## 第4章 自然科学分析

### 1. 三平 I 遺跡出土炭化材の樹種同定

小林克也 (パレオ・ラボ)

#### (1) はじめに

吾妻川の左岸段丘上に位置する三平 I 遺跡で、製鉄関連と考えられる焼土遺構より出土した炭化材について、樹種同定を行なった。

#### (2) 試料と方法

試料は、平安時代 (9世紀後半) の1号焼土遺構から出土した炭化材2点である。各試料について、残存半径と残存年輪数の計測を行なった。残存半径は試料で残存する半径を直接計測し、残存年輪数は残存半径内の年輪数を計測した。

炭化材の樹種同定では、まず試料を乾燥させ、材の横断面 (木口)、接線断面 (板目)、放射断面 (柁目) について、カミソリと手で割断面を作製し、整形して試料台にカーボンテープで固定した。その後、イオンスパッタにて金蒸着を施し、走査型電子顕微鏡 (日本電子 (株) 製 JSM-5900LV) にて検鏡および写真撮影を行なった。

#### (3) 結果

同定の結果、いずれも広葉樹のエノキ属であった。年輪数の計測では、試料 No.1は残存半径2.1cm内に16年輪、試料 No.2は残存半径2.3cm内に18年輪がみられた。同定結果を第4表に示す。

第4表 三平 I 遺跡出土炭化材の樹種同定結果

試料 No	遺構名	樹種	残存半径 (cm)	残存年輪数	時期
1	1号焼土遺構	エノキ属	2.1	16	平安時代
2		エノキ属	2.3	18	

次に、同定された材の特徴を記載し、図版に走査型電子顕微鏡写真を示す。

#### ①エノキ属 Celtis ニレ科 図版1 1a-1c (No.1)、2a-2c (No.2)

年輪のはじめに大型の道管が1~3列並び、晩材部では徐々に径を減じた道管が多数複合し、接線および斜線方向に配列する環孔材である。軸方向柔組織は周囲状となる。道管は単穿孔を有し、小道管の内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端1~3列が直立する異性で、幅1~6列となる。また、放射組織には鞘細胞がみられる。

エノキ属にはエノキやシダレエノキなどがあり、代表的なエノキは本州から九州にかけての温帯から暖帯に分布する落葉高木の広葉樹である。材はやや硬いが、現在ではまともって生育することはなく、薪炭材などに利用される程度である。

#### (4) 考察

平安時代(9世紀後半)の1号焼土遺構から出土した炭化材2点は、いずれもエノキ属であった。1号焼土遺構は製鉄関連と考えられる遺構で、出土した材は、製鉄に利用される炭の製品(以下炭製品と呼ぶ)や、炭製品を焼成するための燃料材であった可能性が考えられる。エノキ属はやや硬く、薪炭材として利用される場合の多い樹種である(伊東ほか, 2011)。

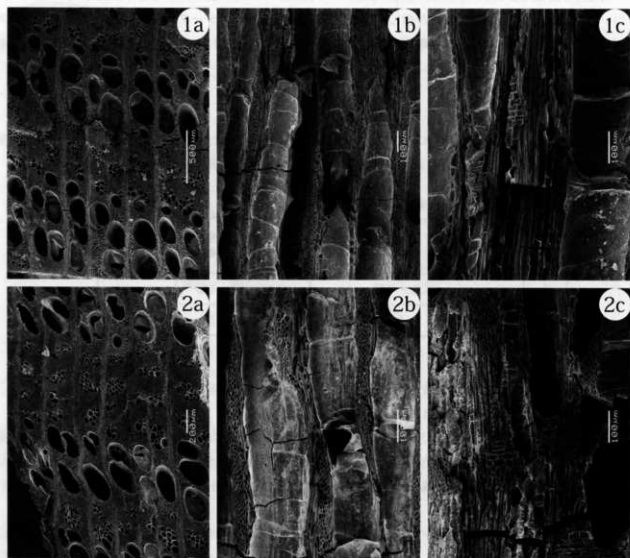
群馬県内では、前橋市に所在する今井三騎堂遺跡の古代の炭窯跡から、コナラ属クヌギ節(以下クヌギ節と呼ぶ)の炭化材が極めて多く産出している(植田・松葉, 2005)。今井三騎堂遺跡の炭窯は地下式の竈窯で、大量の炭製品が焼成されていた。クヌギ節は、炭製品にすると硬質になり、製鉄の際に好んで利用される樹種で(樋口, 1993)、今井三騎堂遺跡では薪炭材として好んで選択されていた可能性がある。今回の三平I遺跡では、エノキ属など薪炭材として優品でない樹種も薪炭材として利用されていた可能性などが考えられる。

#### 引用文献

樋口清之(1993)ものと人間の文化史 71・木炭, 286p, 法政大学出版局。

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌, 238p, 青海社。

植田弥生・松葉礼子(2005)今井三騎堂遺跡、今井見切塚遺跡出土炭化材の樹種同定。群馬県埋蔵文化財調査事業団編「今井三騎堂遺跡・今井見切塚遺跡 一歴史時代編一」:261-290, 群馬県企業局・群馬県埋蔵文化財調査事業団。



1a-1c.エノキ属(No.1)、2a-2c.エノキ属(No.2)

a: 横断面、b: 接線断面、c: 放射断面

第58図 三平I遺跡出土炭化材の操作型電子顕微鏡写真



## 第5章 調査の成果と課題

### はじめに

今回の調査は個人専用住宅建設に先立つもので削平される箇所490㎡の調査であった。遺構確認面は2面確認され、上面が平安時代、下面が縄文・弥生時代の文化層であった。すべて黒色土層中での調査であったため、遺構把握が通常より困難で、平安時代の遺構でも上面では確認できずに下面で初めて検出されるものが多くあった。地山の関東ローム層は縄文面下80cm程で陥し穴の掘り下げ途中に確認された。調査区は1区と2区に分けて調査したが、粗密はあるもののほぼ全面で遺構が検出された。弥生時代の遺構は2区に偏在していたが、平安・縄文は両地区に跨がるかたちで分布していた。ここでは今回の調査における所見を述べてまとめたい。

### 1. 検出遺構について

#### 【縄文時代】

縄文時代の検出遺構は早期後半～後期中葉までの土坑25基である。その内訳は、早期後半1基（4%）、早期末1基（4%）、前期初頭1基（4%）、前期前葉2基（8%）、前期後葉13基（52%）、中期初頭1基（4%）、中期中葉2基（8%）、後期1基（4%）、後期中葉1基（4%）、時期不明2基（8%）である。前期後葉（諸磯式期）の遺構数が突出しており、本調査区で縄文時代における活動の中心時期であることが分かる。この傾向は既往調査での分析結果とほぼ一致し<sup>(1)</sup>、これまで本遺跡では中期中葉までの検出であったが後期中葉までその活動時期が広がった。本地域で大規模集落が営まれる中期後半～後期前葉にかけては本遺跡では空白時期となることが追認された。本調査区では土坑のみの検出に留まったが、既往調査で前期後葉の住居跡2軒が検出されている。

#### 【弥生時代】

弥生時代中期前半の土坑3基が検出された。これまで遺構外での弥生中期土器が確認されていたが、遺構の検出は今回初めてとなる。遺物出土量が少ないこともあるが、中期初頭に比定される1基以外は中期前半とした。

#### 【平安時代】

平安時代の検出遺構は竪穴式住居跡1軒、焼土遺構2基、土坑8基、陥し穴8基、不明遺構1基である。これまでの報告事例では掘立柱建物跡が検出されているが、竪穴式住居跡の検出は本調査区で初めてとなる。第2章第3節で触れた通り、今年度の調査で新たに3軒の住居跡が検出されている。また事実記載でも触れたが、不明遺構としたSX01Aは住居跡になる可能性が高い。これを加えた住居跡の諸属性を第9表に示した。いずれも部分検出で不確定要素を多分に残している。いずれも東カマドと考えられ、時期はS101が9世紀第3四半期、SX01が10世紀第1四半期に比定され、この間で他の当該期遺構も収まるものと考えられる。焼土遺構は2基とも下部に掘り込みを行っており、1号焼土遺構は陥し穴であるSK47の埋没後の窪地あるいは2次掘削により構築されている。1号焼土遺構では炭化材・焼土が多量に検出されており、金床石や鉄滓、2号焼土遺構でも鉄滓が出土しており、小鍛冶関連施設と考えてよいであろう。土坑は上記住居・焼土遺構の周辺に分布しており、SK07～10では鉄滓、SK16では羽片がそれぞれ出土していることから小鍛冶に関連した性格をもつものと考えられる。陥し穴は平面形で上位形状が楕円形、下位形状が（隅丸）長方形を早するもので占められているが、SK02・46は上位・下位形状とも楕円形を早する類であろう。底面に斜行ピットなどが確認されたのはSK01・02・46の3基である。

### 2. 出土遺物について

#### 【縄文時代】

遺構出土遺物では前期後葉諸磯a式が多いが、器形復元できたSK05出土土器（第9図9）とSK31出土土器

第5表 三平Ⅰ遺跡住居跡諸属性

〈 〉推定値 ( ) 残存値

遺構名	長軸方向	規模 (m)				主柱		カマド		馬具				遺物				時期
		長軸長	短軸長	礎柱高	面積 (㎡)	配置	位置	構築方法	馬具	付帯施設	灰輪	墨書	羽釜	鉄製品	鉄滓			
SI01	N-65-E	(2.89)	(2.07)	0.28	(4.0)	4本?	東	石・粘土	○	貯蔵穴	○	×?	×	○	○	○	9世紀第3	
SX01A	N-90-E	(2.55)	(1.48)	0.20	(1.9)	—	東か	—	×	?	×	×	×	○	○	10世紀第1		

第6表 三平Ⅰ遺跡出土墨書土器一覽

No.	出土遺構(埋没番号)	器種	文字記入部位・方向	釈文	備考
1	1号焼土(第31図1)	須恵器・杯	底部外面	山	

(第13図34)が注目される。前者は早期末葉絡糸体圧痕文土器で口縁部を肥厚させて口唇部・口縁部外面に縦位・横位の押圧痕が施されている。後者は前期前葉二ツ木式～関山式の過渡的段階の土器で、口縁部文様帯には瘤状突起を貼付し、平行沈線により藪手文が施されている。その他、遺構外出土遺物で楕円文と平行文を組み合わせた押印文土器(第47図5)は類型が北信にほぼ限定されて出土しているものである<sup>(2)</sup>。その他に貝殻腹縁文を施した土器群(同図6～18)が一定量出土している。これらは田戸上層式にほぼ併行するものと捉えられ、中部地方との密接な関係を示すものと考えられる<sup>(3)</sup>。

#### 【弥生時代】

弥生土器に関しては遺構内からの出土は少ないが、前期末～中期前半にかけて遺構外で一定量の上器片が出土している。遺構内出土遺物ではSK33出土の太頭壺(第21図2)が注目される。器形は肩部の張りが弱く、下膨れとなっているが、肩部～胴中部にかけて3～4条一単位の条痕を縦位羽状に施文している。この土器は「中部高地系突帯文壺形土器」<sup>(4)</sup>の系譜上にあり、その祖型は東海系条痕文土器の中にも認められる。共伴している条痕壺の肩部片(同図3)からも岩瀬山式併行と考えられ、中期初頭に位置づけられよう。

#### 【平安時代】

土師器・須恵器に関しては、内黒土器・コ字甕(ロクロ甕)・鉢などが土師器で、その他が須恵器という捉え方が妥当である。須恵器は還元焰焼成に比して酸化焰焼成のものが主体である。内黒土器はSI01で1点出土したのみである。羽釜はSK08とSX01Aで出土しており、いずれも月夜野型羽釜<sup>(5)</sup>である。墨書土器は第6表に示したが、1点1例が出土している。底部外面に「山」と一文字墨書で、吉祥的な文言と解釈される<sup>(6)</sup>。

鉄製品に関してはSI01で鎌などの製品の破片と考えられる鉄片(第28図11)、SX01Aで芋引金具(第46図2)が出土しているほか、芋引金具の刃部片(第53図238)・鑿などの茎部(同図239)が遺構外で出土している。芋引金具は林宮原遺跡で県内初例として報告したが<sup>(7)</sup>、本遺跡出土例を加えると現時点で合計3点となる。本遺跡出土例の特徴として刃部と差し込み部の間に段を有するということが新知見として指摘できよう。その他に各遺構から鉄滓が目立って出土しており、前述したSK16出土の羽口片や1号焼土遺構出土の金床石など鍛冶関連遺物が揃っており、集落内で小鍛冶を行っていたことが明確となった。

### 3. まとめ

検出された遺構と遺物に関してましまりなく述べてきたが、今回の調査で縄文・弥生・平安の各時代において長野県域との共通性が見いだされ、本地域の原始古代遺跡の特徴を追認することができたことが大きな成果といえるだろう。特に平安時代の集落での生業に係わるキーワードとして「小鍛冶」・「麻」がより鮮明となってきたといえよう。

本地域はハツダムあるいはそれに関連した生活再建事業により、遺跡の調査事例は今後も増加することが予想される。今後はこれらを個々の遺跡ごとで完結させるのではなく、体系的に捉えていく作業が必要不可欠となっていくであろう。

## 注

- (1) 藤巻幸男 2007 「Ⅴ まどめ Ⅰ 縄文時代の三平Ⅰ・Ⅱ遺跡」「三平Ⅰ・Ⅱ遺跡」ハツ場ダム建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書第13集 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団・国土交通省
- (2) 宮ノ神遺跡(上水内郡信濃町)や上林中道南遺跡(下高井郡山ノ内町)などで同様の貫形押型土器が出土している  
山ノ内町誌刊行会 1973 『山ノ内町誌』  
長野県山ノ内町教育委員会 1996 『上林中道南遺跡Ⅲ』
- (3) 橋本 淳 2010 「中部地方における縄紋早期沈線紋土器の編年—ハツ場ダム関連遺跡出土資料の位置付け—」『研究紀要28』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (4) 設楽博巳 1985 「関東地方の〈条痕文系〉土器」『〈条痕文系土器〉をめぐる諸問題』  
1995 「東日本における弥生時代の始まり」『展望考古学』考古学研究会
- (5) 中沢 哲 1984 「月夜野型羽釜について」『理文月報』No.40 (財)群馬県埋蔵文化財調査事業団
- (6) 群馬県教育委員会1989・1992 『群馬県出土の墨書・刻書土器集成(1)・(2)』
- (7) 長野原町教育委員会 2011 『林宮原遺跡Ⅲ』長野原町埋蔵文化財調査報告第23集



## SK19 出土遺物観察表

発掘調査 No.	品名	品類	位置 (東経・北緯)	層	年代	形状	材質	色澤 (表面・内面)	重量 (g)	備考
11-18	銅文土器・印鉢	銅文土器	(46.0) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 内面 外面 赤黒・青黒	—	SK19

## SK20 出土遺物観察表

発掘調査 No.	品名	品類	位置 (東経・北緯)	層	年代	形状	材質	色澤 (表面・内面)	重量 (g)	備考
11-19	銅文土器・印鉢	銅文土器	(2.0) / (〜) / (〜) >	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK20
11-20	銅文土器・印鉢	銅文土器	(5.6) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK20
11-21	銅文土器・印鉢	銅文土器	(2.0) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK20
11-22	銅文土器・印鉢	銅文土器	(2.2) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK20
11-23	銅文土器・印鉢	銅文土器	長 (4.1) / 幅 (2.0) / 厚 (0.9)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK20

## SK45 出土遺物観察表

発掘調査 No.	品名	品類	位置 (東経・北緯)	層	年代	形状	材質	色澤 (表面・内面)	重量 (g)	備考
11-24	銅文土器・印鉢	銅文土器	(2.0) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK45
11-25	銅文土器・印鉢	銅文土器	(3.2) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK45
11-26	銅文土器・印鉢	銅文土器	長 (3.7) / 幅 (3.4) / 厚 (1.5)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK44
11-27	銅文土器・印鉢	銅文土器	長 (3.8) / 幅 (3.7) / 厚 (1.7)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK45

## SK21 出土遺物観察表

発掘調査 No.	品名	品類	位置 (東経・北緯)	層	年代	形状	材質	色澤 (表面・内面)	重量 (g)	備考
11-28	銅文土器・印鉢	銅文土器	(3.1) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK21
11-29	銅文土器・印鉢	銅文土器	長 (3.0) / 幅 (3.6) / 厚 (1.0)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK21

## SK22 出土遺物観察表

発掘調査 No.	品名	品類	位置 (東経・北緯)	層	年代	形状	材質	色澤 (表面・内面)	重量 (g)	備考
11-30	銅文土器・印鉢	銅文土器	(6.0) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK22

## SK23 出土遺物観察表

発掘調査 No.	品名	品類	位置 (東経・北緯)	層	年代	形状	材質	色澤 (表面・内面)	重量 (g)	備考
13-31	銅文土器・印鉢	銅文土器	(2.2) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK23
13-32	銅文土器・印鉢	銅文土器	(7.8) / (〜) / (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK23
13-33	銅文土器・印鉢	銅文土器	長 (6.8) / 幅 (3.7) / 厚 (1.9)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK23

## SK31 出土遺物観察表

発掘調査 No.	品名	品類	位置 (東経・北緯)	層	年代	形状	材質	色澤 (表面・内面)	重量 (g)	備考
13-34	銅文土器・印鉢	銅文土器	(1.8) / (〜) / (2.0) > (〜)	19	古墳	内面は丸扁之、外面は楕圓ナリ。	銅質	色澤 内面 赤黒 外面 赤黒・青黒	—	SK31



16-60	20	漢文上經・目錄	$(1.8) / - / - / -$	列前1頁，內含卷目表，內含編年序。	良好	角頁行・行底	紙質良好 (硬紙)	紙上
16-61	20	漢文上經・目錄	$(3.5) / - / - / -$	列前1頁，漢文卷目表，內含編年序。	良好	頁行	紙質良好 (硬紙)	5834
16-62	20	漢文上經・目錄	$(3.1) / - / - / -$	列前1頁，漢文卷目表，內含編年序。	良好	角頁行・行行・行底	五紙	5834
16-63	20	漢文上經・目錄	$(6.3) / - / - / -$	列前1頁，漢文卷目表，內含編年序。	良好	角頁行・行底	精裝紙・膠裝・紙夾	5847
16-64	20	漢文上經・目錄	$(7.7) / - / - / -$	列前1頁，漢文卷目表，內含編年序。	良好	角頁行	粗紙・五紙	5847
16-65	20	漢文上經・目錄	$(4.4) / - / - / -$	列前1頁，漢文卷目表，內含編年序。	良好	角頁行・行底	紙質良好 (硬紙)	5847
16-66	20	漢文上經・目錄	$(3.0) / - / - / -$	列前1頁，漢文卷目表，內含編年序。	良好	角頁行・行行・行底	紙質良好 (硬紙)	5834
16-67	20	漢文上經・目錄	$(3.5) / - / - / -$	列前1頁，漢文卷目表，內含編年序。	良好	角頁行	紙質良好 (硬紙)	5847
16-68	20	漢文上經・目錄	$(3.7) / - / - / -$	列前1頁，漢文卷目表，內含編年序。	良好	角頁行	黃紙・五紙	5847
16-69	20	漢文上經・目錄	$(11.2) / - / - / -$	卷前1頁，目錄後，內含編年序。	—	裏行	文。	紙上
16-70	21	卷目表・目錄	$(1.2) / 16.15 / 29.03$	卷前0.5頁，目錄後。	—	裏行	—	紙上
16-71	21	卷目表・目錄	$(1.4) / 16.08 / 29.03$	卷前0.5頁，目錄後。	—	裏行	—	5834
16-72	21	卷目表・目錄	$(1.1) / 12.15 / 29.11$	卷前4頁，目錄後。	—	裏行	—	5834
16-73	21	卷目表・目錄	$(8.5) / 16.47 / 29.14$	卷前5頁，目錄後。	—	裏行	—	5834
16-74	21	卷目表・目錄	$(1.2) / 16.12 / 29.43$	卷前3頁，目錄後。	—	裏行	—	5834

### SK36 出土遺物點表

発出地 No.	品名	数量	形状・寸法	注記	出所	出土位置	出土時期	出土層
18-75	21	漢文上經・目錄	$(1.4) / - / - / - < 11.3 >$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行・行底	紙質良好 (硬紙)	5836

### SK37 出土遺物點表

発出地 No.	品名	数量	形状・寸法	注記	出所	出土位置	出土時期	出土層
18-76	21	漢文上經・目錄	$(3.6) / - / - / -$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行	紙質良好 (硬紙)	5837
18-77	21	漢文上經・目錄	$(2.9) / - / - / -$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行・行行・行底	紙質良好 (硬紙)	5837
18-78	21	漢文上經・目錄	$(5.1) / - / - / -$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行	紙質良好 (硬紙)	5837

### SK38 出土遺物點表

発出地 No.	品名	数量	形状・寸法	注記	出所	出土位置	出土時期	出土層
18-79	21	漢文上經・目錄	$(2.5) / - / - / -$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行	紙質良好 (硬紙)	5838
18-80	21	漢文上經・目錄	$(10.0) / - / - / -$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行・行行	紙質良好 (硬紙)	5838

### SK43 出土遺物點表

発出地 No.	品名	数量	形状・寸法	注記	出所	出土位置	出土時期	出土層
18-81	21	漢文上經・目錄	$(4.7) / - / - / -$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行・行底・行行	紙質良好 (硬紙)	5843
18-82	21	漢文上經・目錄	$(1.3) / - / - / - < 6.8 >$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行・行底	紙質良好 (硬紙)	5843

### SK44 出土遺物點表

発出地 No.	品名	数量	形状・寸法	注記	出所	出土位置	出土時期	出土層
18-83	21	漢文上經・目錄	$(2.5) / - / - / -$	列前1頁，內含卷目表。	良好	角頁行・行底	紙質良好 (硬紙)	5844

1848	21	織文付・縁紙	(20) / - / -	外周に黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配し、内周は縞文より赤・黄・白の縞文を配す。	目付	石巻・宮内・小磯 角田・新田・石巻	赤・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	織文付・縁紙	50x44
1849	21	織文付・縁紙	14.67 / 14.67 / 20	縞文を配す。	-	-	-	織文付・縁紙	50x44

## SK15 出土遺物観察表

21.1	21	赤土・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	(3.8) / - / -	外周に黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	目付	石巻・宮内・小磯 角田・新田・石巻	赤・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	織文付・縁紙	50x44
------	----	-------------------------	---------------	-------------------------	----	----------------------	------------------------	--------	-------

## SK33 出土遺物観察表

21.2	21	赤土・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	(1.27) / - / -	外周に黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	目付	石巻・宮内・小磯 角田・新田・石巻	赤・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	織文付・縁紙	50x44
21.3	21	赤土・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	(3.8) / - / -	外周に黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	目付	石巻・宮内・小磯 角田・新田・石巻	赤・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	織文付・縁紙	50x44

## SK35 出土遺物観察表

21.4	21	赤土・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	(2.1) / - / -	外周に黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	目付	石巻・宮内・小磯 角田・新田・石巻	赤・黒・黄・赤・緑・紫・白・青の縞文を配す。	織文付・縁紙	50x44
------	----	-------------------------	---------------	-------------------------	----	----------------------	------------------------	--------	-------

## S01 出土遺物観察表

20.1	21	織文・縁紙	(1.2) / < 14.6 / > / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.2	21	織文・縁紙	(2.2) / - / < 7.3 / >	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.3	21	織文・縁紙	(2.1) / - / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.4	21	織文・縁紙	(4.4) / - / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.5	21	織文・縁紙	(6.1) / < 20.0 / > / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.6	21	織文・縁紙	(6.7) / < 16.7 / > / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.7	21	織文・縁紙	(8.0) / < 18.0 / > / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.8	21	織文・縁紙	(5.1) / - / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.9	21	織文・縁紙	(7.8) / - / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.10	21	織文・縁紙	(6.1) / - / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.11	21	織文・縁紙	14.5 / 14.5 / 19.0	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.12	21	織文・縁紙	14.5 / 14.5 / 19.0	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
20.13	21	織文・縁紙	14.7 / 14.7 / 19.1.8	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44

## 1号焼土遺物出土遺物観察表

30.1	22	織文・縁紙	3.8 / - / 10.6 / > / 6.9	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
30.2	22	織文・縁紙	(5.4) / < 20.2 / > / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44
30.3	22	織文・縁紙	(4.8) / < 10.4 / > / -	口が口型形、内周縁と口が口型子。内周縁は縞文を配す。(口縁)	縞文・縁紙	角田・新田	縞文・縁紙	50x44



品名	規格	寸法	材質	寸法	質量	備考
31.4	22	鋼製品・取付	長 11.0 / 幅 4.15 / 厚 2.5	鋼製品・取付	質量 360g	品名 (内装) 内装
31.5	22	鋼製品・取付	長 13.0 / 幅 2.5 / 厚 4.2	鋼製品・取付	質量 481g	品名
31.6	22	鋼製品・取付	長 20.7 / 幅 3.0 / 厚 6.9	鋼製品・取付	質量 1010g	品名 (内装) 内装

## 2号沸土遺構出土遺物観察表

品名	規格	寸法	材質	寸法	質量	備考
33.1	22	銅製品・取付	3.0 / < 13.1 / < 8.4 >	銅製品・取付	質量 1.0g	品名 (内装) 内装
33.2	22	銅製品・取付	(5.4) / - / -	銅製品・取付	質量 1.0g	品名 (内装) 内装
33.3	22	銅製品・取付	長 (2.3) / 幅 (2.4) / 厚 1.9	銅製品・取付	質量 101g	品名 (内装) 内装

## SK07 出土遺物観察表

品名	規格	寸法	材質	寸法	質量	備考
35.1	22	鋼製品・取付	長 6.8 / 幅 3.7 / 厚 2.5	鋼製品・取付	質量 42.5g	品名 (内装) 内装

## SK08 出土遺物観察表

品名	規格	寸法	材質	寸法	質量	備考
35.2	22	銅製品・取付	(3.30) / - / -	銅製品・取付	質量 1.0g	品名 (内装) 内装
35.3	22	鋼製品・取付	長 9.2 / 幅 0.4 / 厚 4.1	鋼製品・取付	質量 279g	品名 (内装) 内装

## SK09 出土遺物観察表

品名	規格	寸法	材質	寸法	質量	備考
35.4	22	銅製品・取付	(3.2) / - / 7.1	銅製品・取付	質量 1.0g	品名 (内装) 内装
35.5	22	鋼製品・取付	長 7.9 / 幅 0.6 / 厚 2.7	鋼製品・取付	質量 176g	品名 (内装) 内装

## SK10 出土遺物観察表

品名	規格	寸法	材質	寸法	質量	備考
35.6	23	鋼製品・取付	長 (4.5) / 幅 5.6 / 厚 3.0	鋼製品・取付	質量 78.4g	品名 (内装) 内装
35.7	23	鋼製品・取付	長 (1.9) / 幅 (3.0) / 厚 3.3	鋼製品・取付	質量 46.0g	品名 (内装) 内装

## SK16 出土遺物観察表

品名	規格	寸法	材質	寸法	質量	備考
37.8	22	鋼製品・取付	長 (5.4) / 幅 < 7.2 > / 厚 -	鋼製品・取付	質量 3.6m	品名 (内装) 内装

## SK25 出土遺物観察表

品名	規格	寸法	材質	寸法	質量	備考
42.1	23	銅製品・取付	(1.5) / - / < 6.13 >	銅製品・取付	質量 1.0g	品名 (内装) 内装











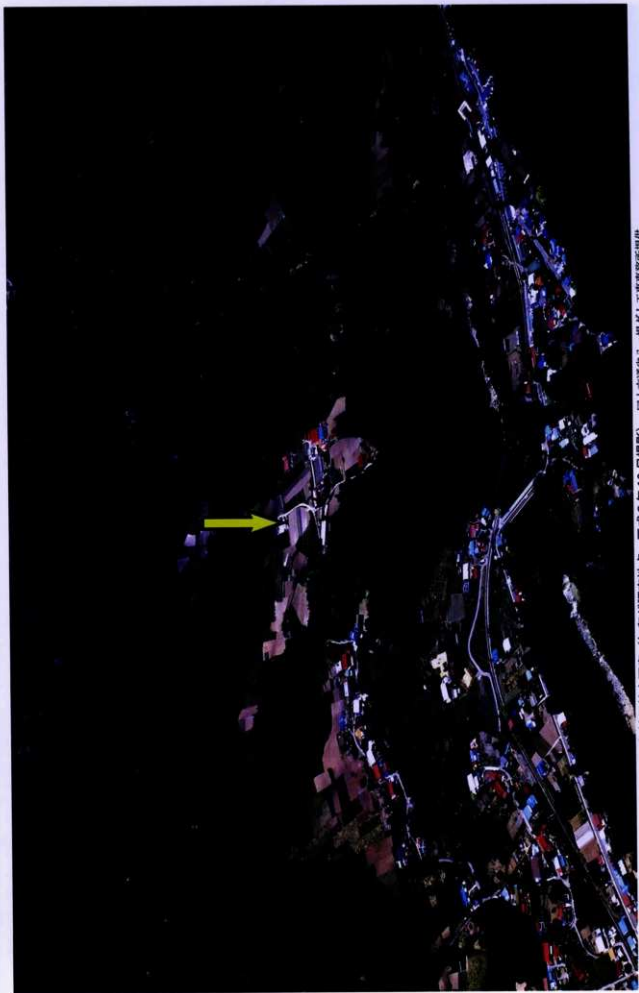
53-258	28	新築品・中古引当	長 12.5 / 幅 3.5 / 厚 0.3	中層 6階、中層と上層の間の階に2階を有する。	-	-	55%増、20%減。	21K
53-259	28	新築品・中古	長 16.0 / 幅 11.0 / 厚 11.0	中層 22階、中層の専有部。	-	-	増減なし	5K30
53-260	28	新築品・中古	長 9.2 / 幅 2.6 / 厚 2.6	中層 21階、	-	-	増減なし	2K
53-241	28	新築品・中古	長 7.8 / 幅 4.5 / 厚 2.5	中層 21階、	-	-	増減なし	2K
53-242	28	新築品・中古	長 11.5 / 幅 1.2 / 厚 0.5	中層 05階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-243	28	新築品・中古	長 7.0 / 幅 1.2 / 厚 0.5	中層 05階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-244	28	新築品・中古	長 11.7 / 幅 11.4 / 厚 0.4	中層 07階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-245	28	新築品・中古	長 11.7 / 幅 11.4 / 厚 0.5	中層 05階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-246	28	新築品・中古	長 12.0 / 幅 1.5 / 厚 0.6	中層 11階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-247	28	新築品・中古	長 11.8 / 幅 1.6 / 厚 0.5	中層 11階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-248	28	新築品・中古	長 12.0 / 幅 11.4 / 厚 0.5	中層 15階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-249	28	新築品・中古	長 13.8 / 幅 0.9 / 厚 0.7	中層 2階、上層と中層の間の階に2階を有する。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-250	29	新築品・中古	長 8.6 / 幅 3.2 / 厚 1.2	中層 18階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	2K
54-251	29	新築品・中古	長 4.9 / 幅 2.9 / 厚 1.1	中層 13階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-252	29	新築品・中古	長 12.2 / 幅 6.3 / 厚 1.6	中層 25階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-253	29	新築品・中古	長 8.4 / 幅 4.0 / 厚 1.6	中層 41階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-254	29	新築品・中古	長 13.0 / 幅 13.0 / 厚 1.4	中層 42階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-255	29	新築品・中古	長 14.3 / 幅 2.5 / 厚 1.1	中層 11階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-256	29	新築品・中古	長 17.0 / 幅 6.6 / 厚 1.3	中層 72階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	5K60
54-257	29	新築品・中古	長 7.1 / 幅 5.5 / 厚 1.9	中層 29階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	2K
54-258	29	新築品・中古	長 5.8 / 幅 3.4 / 厚 1.5	中層 29階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	2K
54-259	29	新築品・中古	長 8.3 / 幅 2.3 / 厚 0.6	中層 11階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
54-260	29	新築品・中古	長 3.7 / 幅 4.9 / 厚 0.9	中層 21階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-261	29	新築品・中古	長 2.9 / 幅 3.1 / 厚 1.7	中層 12階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	5K9
55-262	29	新築品・中古	長 4.3 / 幅 12.3 / 厚 0.8	中層 25階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	5K40
55-263	29	新築品・中古	長 15.2 / 幅 10.2 / 厚 1.7	中層 41階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-264	29	新築品・中古	長 14.0 / 幅 3.7 / 厚 3.0	中層 20階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	2K
55-265	29	新築品・中古	長 3.4 / 幅 3.3 / 厚 2.1	中層 33階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-266	29	新築品・中古	長 7.4 / 幅 6.5 / 厚 3.5	中層 20階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-267	29	新築品・中古	長 4.4 / 幅 3.0 / 厚 2.1	中層 40階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-268	29	新築品・中古	長 5.8 / 幅 4.0 / 厚 2.7	中層 12階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-269	29	新築品・中古	長 3.4 / 幅 4.4 / 厚 2.1	中層 30階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-270	29	新築品・中古	長 4.8 / 幅 5.0 / 厚 1.9	中層 02階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	2K
55-271	29	新築品・中古	長 5.5 / 幅 4.9 / 厚 2.3	中層 06階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-272	30	新築品・中古	長 6.7 / 幅 6.7 / 厚 1.9	中層 12階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-273	30	新築品・中古	長 5.6 / 幅 3.9 / 厚 3.8	中層 12階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
55-274	30	新築品・中古	長 6.2 / 幅 5.5 / 厚 3.9	中層 02階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	5K20
56-275	30	新築品・中古	長 8.0 / 幅 7.1 / 厚 4.0	中層 02階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
56-276	30	新築品・中古	長 6.5 / 幅 5.5 / 厚 3.3	中層 19階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	1K
56-277	30	新築品・中古	長 6.2 / 幅 5.3 / 厚 4.1	中層 20階、増築あり、中層の増築。	-	住戸17戸	増減なし	5K30



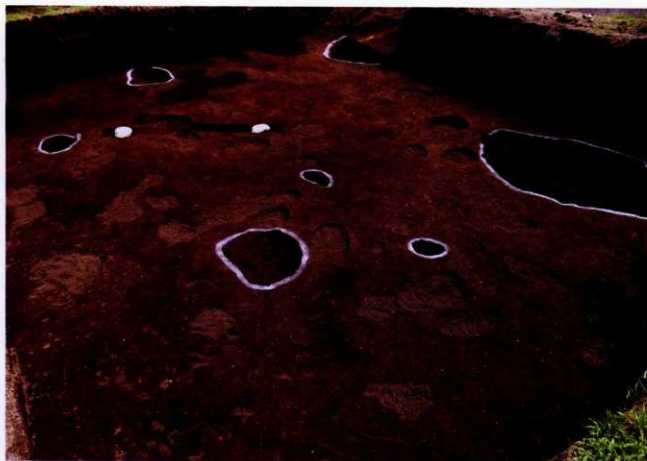


# 写真図版





1. 川原地区航空写真 (矢印が調査地点 平成8年10月撮影) 国土交通省八ッ場ダム工事事務所提供



1. 1区全景① (北から)



2. 1区全景② (南東から)



1. 2区全景〈上面〉① (東から)



2. 2区全景〈上面〉② (南東から)



1. 2区全景〈下面〉① (南西から)



2. 2区全景〈下面〉② (北東から)



1. SK03 (南東から)



2. SK04 (南東から)



3. SK05 (南東から)



4. SK05 半截 (南西から)



5. S105 遺物出土状況 (南西から)



6. SK06 (北東から)



7. SK06 半截 (北東から)



8. SK17 (南東から)



1. SK17 半截 (南東から)



2. SK18 (北東から)



3. SK19 (東から)



4. SK20・45 (南から)



5. SK20 半截 (南から)



6. SK21 (北から)



7. SK21 半截 (南東から)

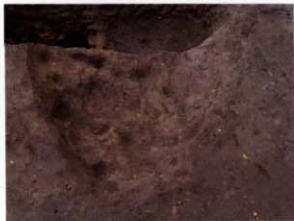


8. SK22 (北東から)





1. SK22 半截 (北東から)



2. SK23・31 (東から)



3. SK26・27 (南から)



4. SK26・27 半截 (南から)



5. SK26 遺物出土状況 (第13図35)



6. SK28・29 (南東から)



7. SK28・29 南北セクション (東から)



8. SK28・29 東西セクション (南から)



1. SK34・35 (南から)



2. SK34 東西セクション (南から)



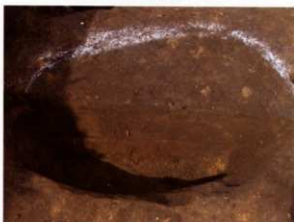
3. SK34 遺物出土状況 (第16図72)



4. SK36 (南東から)



5. SK37 (南西から)



6. SK37 半截 (南西から)



7. SK38 (南西から)



8. SK38 半截 (南西から)



1. SK39 半截 (南から)



2. SK40 (南から)



3. SK40 半截 (東から)



4. SK43 (東から)



5. SK44 (北東から)



6. SK15 (北から)



7. SK15 半截 (北から)



8. SK33 (南東から)



1. SK33 半截 (北東から)



2. SK33 遺物出土状況 (第 21 図 2)



3. SI01 (南西から)



4. SI01 完掘状況 (南東から)



5. SI01 南北セクション (北東から)



1. SI01 東西セクション (南東から)



2. SI01 カマド (南西から)



3. SI01 カマド検出状況 (南西から)



4. SI01 カマド断割状況 (南西から)



5. SI01 カマドセクション① (南西から)



6. SI01 カマドセクション② (北東から)



7. SI01 カマド完掘状況 (南西から)



8. SI01 貯蔵穴





1. SI01 カマド火床 (南西から)



2. SI01 遺物出土状況①〈鉄片〉(第28図11)



3. SI01 遺物出土状況②〈鉄滓〉



4. SI01 遺物出土状況③〈鉄滓〉(第28図12)



5. 1号焼土遺構 (南東から)



6. 1号焼土遺構遺物出土状況① (北東から)



7. 1号焼土遺構東西セクション (南東から)



8. 1号焼土遺構検出状況 (南東から)



1. 1号焼土遺構炭化材検出状況



2. 1号焼土遺構遺物出土状況② (第31図1)



3. 2号焼土遺構 (南東から)



4. 2号焼土遺構セクション (南から)



5. 2号焼土遺構検出状況 (南東から)



6. 2号焼土遺構遺物出土状況 (第33図1)



7. SK07 (東から)



8. SK08 (南西から)



1. SK08 半截 (南西から)



2. SK08 遺物出土状況①〈羽釜〉(第35図2)



3. SK08 遺物出土状況②〈鉄滓〉(第35図3)



4. SK09 (南東から)



5. SK09 遺物出土状況〈鉄滓〉(第35図5)



6. SK10 (南東から)



7. SK10 半截 (南西から)



8. SK11 (南から)





1. SK12 (北東から)



2. SK13 (南から)



3. SK14 (北東から)



4. SK14 半截 (北東から)



5. SK16 (南東から)



6. SK16 遺物出土状況 (羽口) (第37図8)



7. SK30・45・20 (北から)



8. SK30 半截 (西から)



1. SK42 (南から)



2. SK01 (南東から)



3. SK01 (北東から)



4. SK01 南北セクション (北東から)



5. SK01 東西セクション (南東から)



6. SK02 (北西から)



7. SK02 半截 (北東から)



8. SK02 ピット検出状況 (西から)



1. SK24 東西セクション (南から)



2. SK25 (北西から)



3. SK32 (南東から)



4. SK41 (南から)



5. SK41 半截 (南から)



6. SK46 (南から)



7. SK46 半截 (東から)



8. SK47 東西セクション (南東から)



1. SX01AB (南から)



2. SX01AB 南北セクション (南西から)



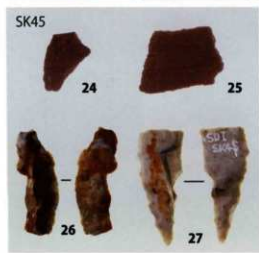
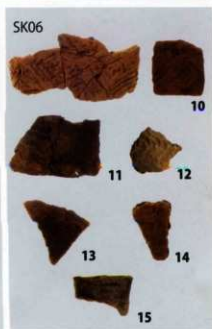
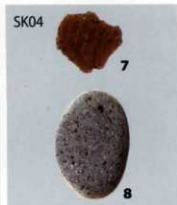
3. SX01A 遺物出土状況 (南東から)



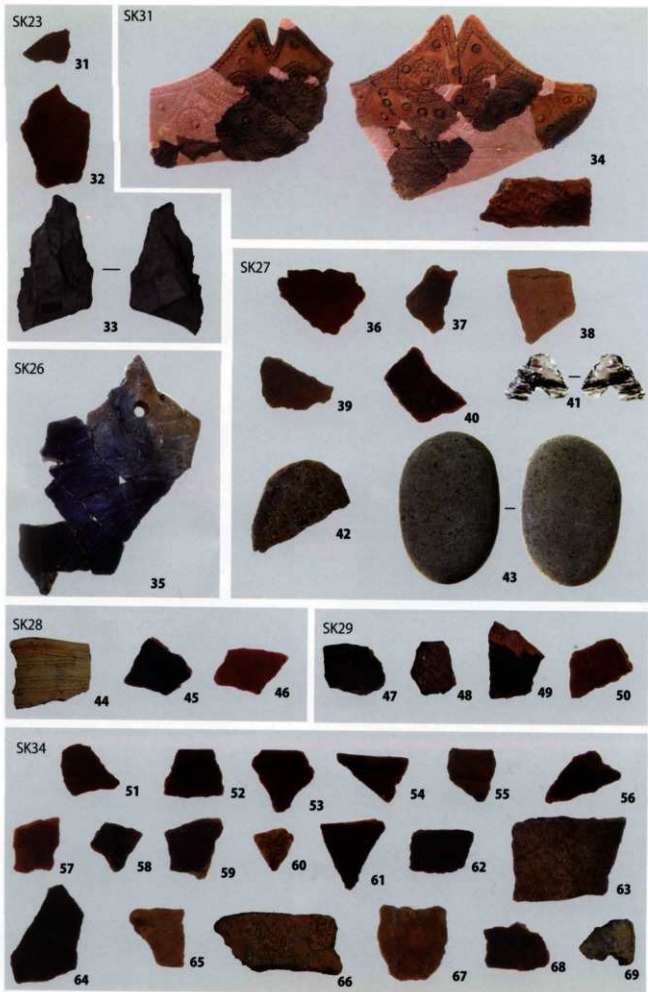
4. 調査前風景 (東から)

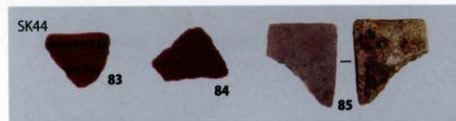
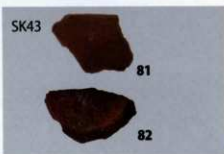
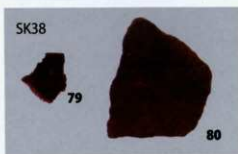
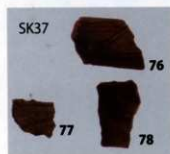


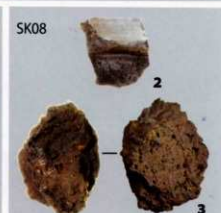
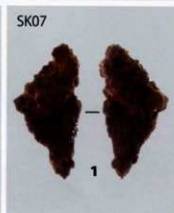
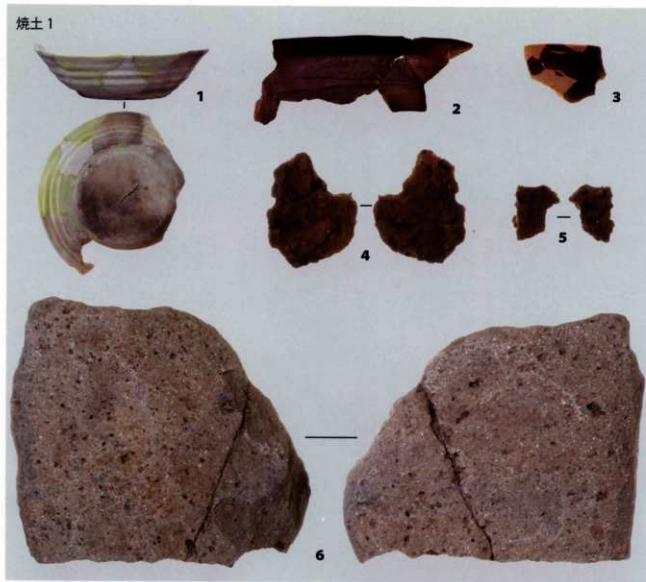
5. 調査風景



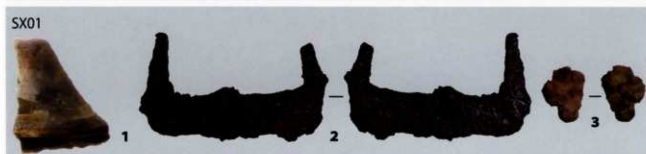




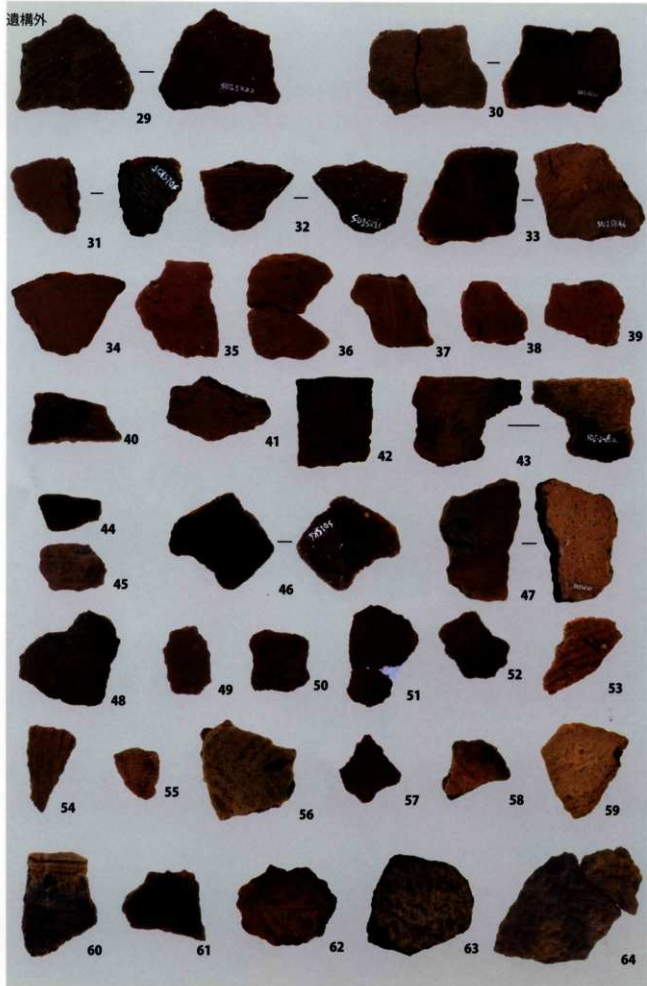




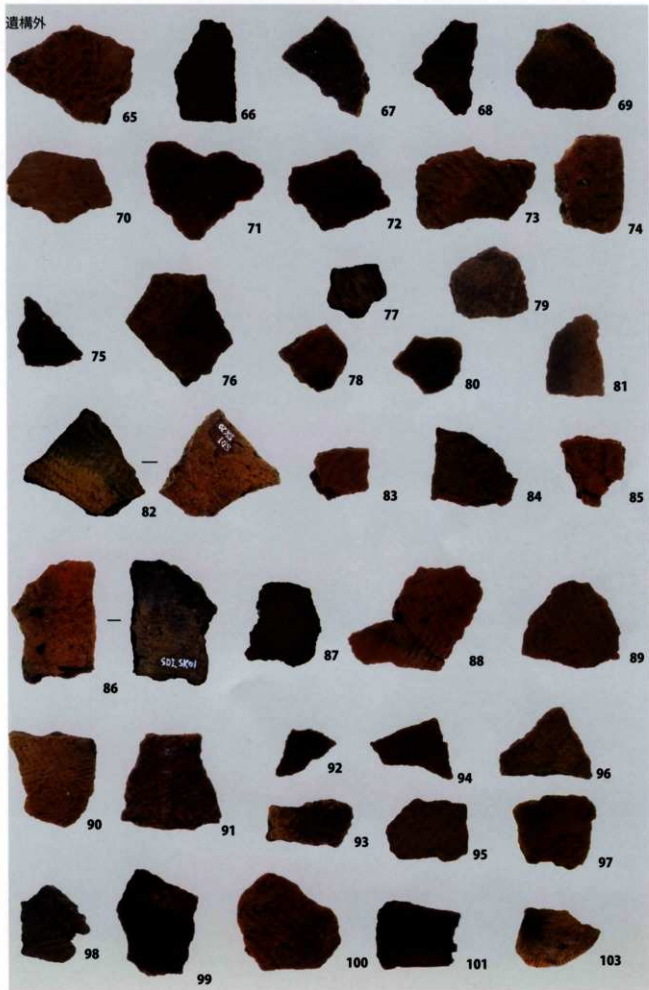




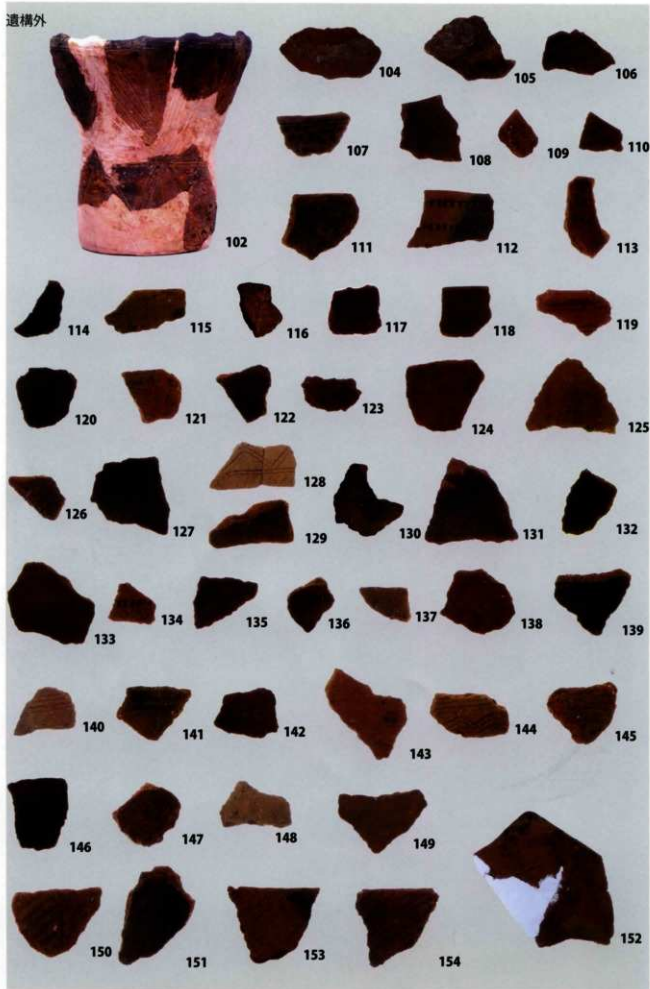
遺構外



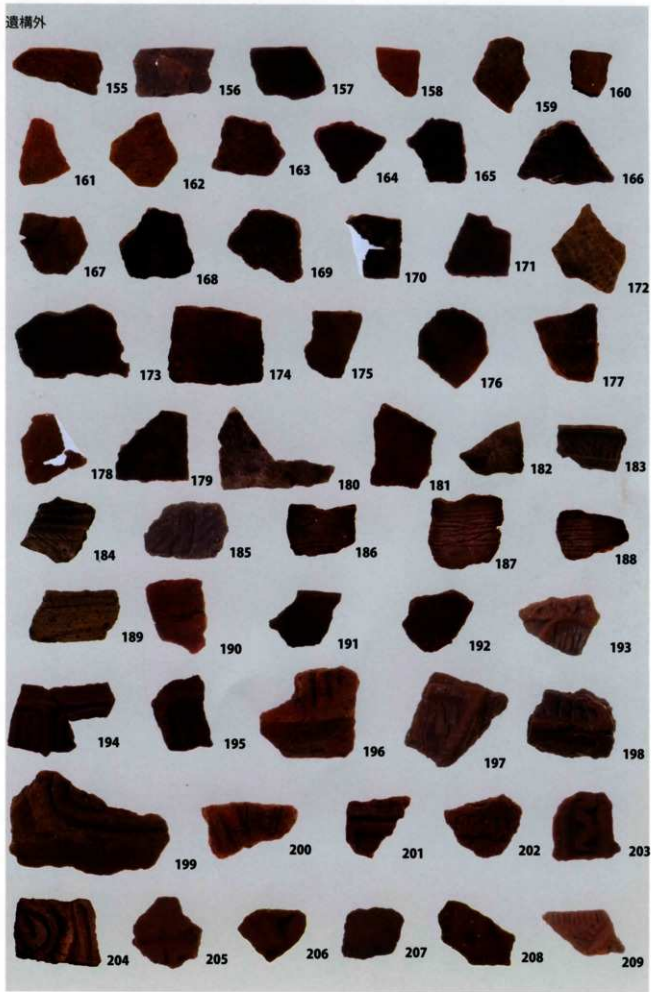
遺構外



遺構外



遺構外

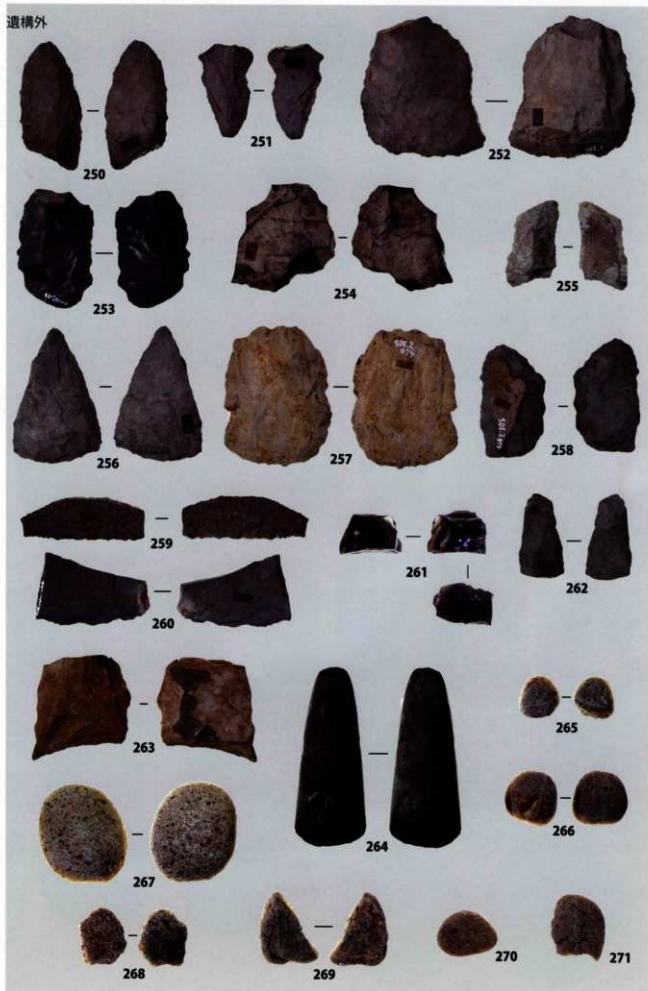


遺構外

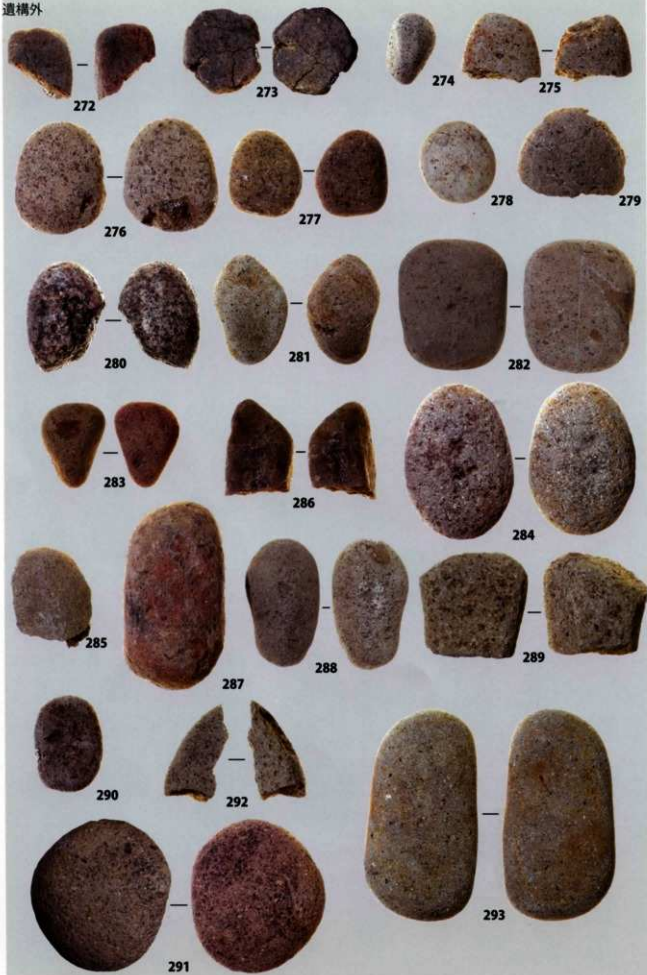




遺構外



遺構外





# 報 告 書 抄 録

ふりがな	さんだいらいちいせき							
書名	三平1遺跡							
副書名	個人専用住宅に伴う発掘調査報告書							
巻次								
シリーズ名	長野原町埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	第26集							
編著者名	富田孝彦							
編集機関	長野原町教育委員会							
所在地	〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174 TEL 0279-82-4517							
発行年月日	西暦2013年3月15日							
ふりがな 所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	(世界測地系)	(世界測地系)		(㎡)	
さんだいらいちいせき 三平1遺跡	群馬県吾妻 郡長野原町 大字川原畑	10424	134	363319	1384210	20080612 ～ 20080807	490	個人専用住宅
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
三平1遺跡	集落跡	縄文時代 弥生時代 平安時代  時期不明 中近世		土坑 25基 土坑 3基 住居跡 1軒 焼土遺構 2基 土坑 8基 陥し穴 8基 不明遺構 1基 土坑 4基		縄文土器・石器 弥生土器 土師器・須恵器・土 製品・石器・鉄製品  陶磁器		長野県域と交 流を示す資料 出土
要 約	<p>本遺跡は吾妻川の左岸最上位段丘の南向き緩斜面に立地する。調査地点の標高は534m位である。縄文時代早期後半～後期中葉の土坑25基、弥生時代中期初頭～中期前半の上坑3基、平安時代の竪穴式住居跡1軒・焼土遺構2基・土坑8基・陥し穴8基・不明遺構1基、時期不明土坑4基が検出された。各時代とも出土遺物に長野県域と共通性が認められ、本地域の大きな特色として捉えることができた。特に平安時代では、鍛冶に関連した遺構や遺物が検出されて当該期集落内で本遺跡でも小鍛冶を行っていることが明確となった。また群馬県内の他地域では見られない紡織具である芋引金具が2点出土しており、これまでの報告事例1点を加えて本町内で合計3点となった。このことから当該期集落の生業に係わるキーワードとして「小鍛冶」と「麻」がより鮮明となったといえよう。</p>							

## 三平 I 遺跡

— 個人専用住宅建設に伴う発掘調査報告書 —

平成25年3月12日 印刷

平成25年3月15日 発行

発行 群馬県吾妻郡長野原町教育委員会

〒377-1305 群馬県吾妻郡長野原町大字与喜屋174

TEL 0279 (82) 4517 FAX 0279 (82) 4519

印刷 朝日印刷工業株式会社



